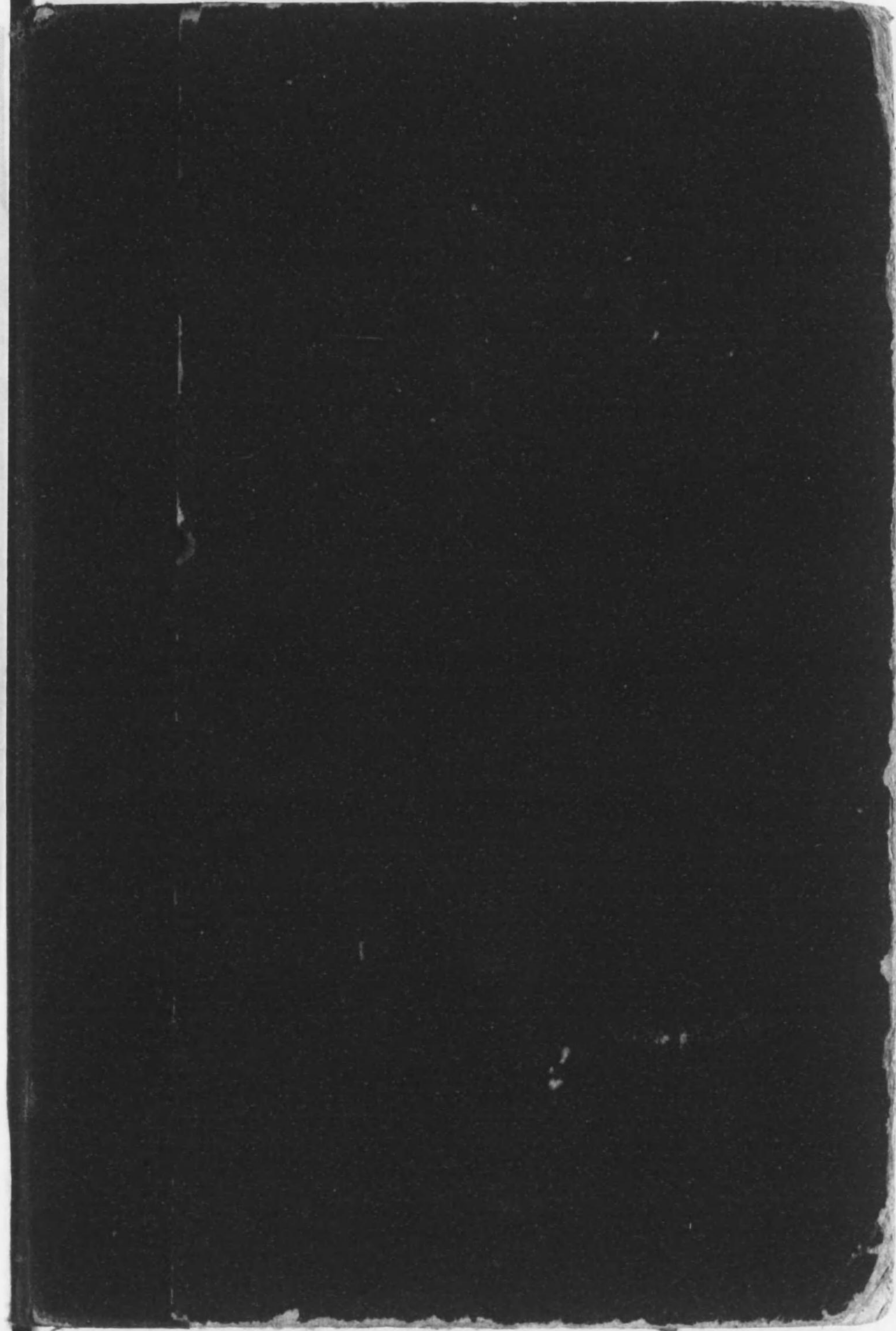


始



930

TA.29

930

T429



アメリカ文學の歴史的背景

高垣松雄著

79.2.10 914.10

文藝春秋新社版



1007
65

目次

| | |
|------------------------------------|-----|
| 第一章・アメリカ先住民族と英吉利植民 | 5 |
| 第二章・第十七世紀アメリカ植民的社會 | 15 |
| 第三章・アメリカ獨立戦争の前夜 | 29 |
| 第四章・合衆國の獨立 | 39 |
| 第五章・ <u>アメリカ・ロマンティシズムの母胎</u> | 45 |
| 第六章・アメリカ南部諸州の精神 | 55 |
| 第七章・ニグロ貿易と奴隸制度 | 65 |
| 第八章・アメリカ民主主義の發展 | 77 |
| 第九章・アメリカ人口の民族的構成 | 83 |
| 第十章・アメリカ生活の近代化 | 91 |
| 第十一章・アメリカ資本主義の成立 | 101 |
| 第十二章・アメリカ開拓線の發展 | 111 |
| 第十三章・アメリカ農民と鐵道 | 121 |
| 第十四章・アメリカ獨占資本主義の時代 | 131 |
| 附 録 | |
| アメリカ文藝・社會年表 | 149 |
| あとがき..... 吉田甲子太郎... | 159 |

アメリカ文學の歴史的背景



第一章

アメリカ先住民族と英吉利植民

文學の歴史を卒然として讀めば、例へば英吉利のそれにしても、エリザ朝の、アン朝の、そしてヴィクトリア朝の文學的盛觀は略々百年の期間を置いて現はれてゐるとして満足するのである。併し一度、かくの如き現象の陰にあつて、更に大なる勢力を有する基本的な事實を注意するならば、それぞれの時代の文學の特徴を理解する上にも役立つことは確實である。何故に第十六世紀末から第十七世紀初頭へかけて、第十八世紀の初葉に於て、また第十九世紀の中葉に於て、あの様な華やかな文藝の開発を見たのであるか、我々はそれを解釋する最も有力な鍵をば當時の社會的、經濟的活動の中に見出す。英國に於ける産業革命は第十八世紀後半に始まつて次の世紀の三十年代に成就したと云はれるが、その完成期に至つてヴィクトリア朝文學は昌えたのであり、アン朝の文學は第十七世紀末に於けるブルジョア革命の後を受けてゐる。そしてエリザ朝文學は第十五六世紀に於ける都市の興起と封建的殘存勢力たる王朝の結びつきによる世界的商戰の勝利を豫想してゐるのである。かくして近世英吉利文學の動向は、大雑把ながら、それを生み出した社會の經濟的勢力によつて支配されてゐると云ふことが出来る。今日のアメリカ合衆國は近世英吉利の商業的活動の一結果として存在するのであるが、そのアメリカの文學の發達を理解するためには、やはりその國の經濟的狀勢を注意するのが肝要である。

茲にアメリカ文學の歴史的背景に就て語らうとするのも、一にさうした關

係を明瞭ならしめんとを試みに外ならないのである。だが、西洋史に於けるアメリカ発見の動機、経過、結果等に就て改めて説く必要はないであらうし、また英吉利とアメリカとの交渉に關しても Henry VII 治下に John Cabot と其子 Sebastian Cabot が Bristol の船乗十八名を引具して Labrador, Newfoundland, Nova Scotia の諸地方を航海した事績 (1497)、その後一世紀、Elizabeth 女王朝に Sir Francis Drake が南米の沿岸に沿つて航し、西班牙人の植民地を脅かし、太平洋、印度洋を経て世界一周に成功せる (1578-80)、また Sir Walter Raleigh の時期尙早なりし Virginia 植民計畫 (1587) に就ても、今は多く述べるほどの重要性は認められない。むしろ我々は第十七世紀初頭に於ける Virginia と New England 兩地方の英吉利植民地開拓の事情を語るに先だち、所謂新大陸に占據して、獨特の生活様式を保つてゐた American Indian を顧みなければなるまい。

American Indian, 或は Red Indian と呼ばれるアメリカ土人は、アジアよりの移住民族の後裔であるとの説もあるが斷定的ではない。彼等の言語の系統によつて二十餘の種族に分け、更にそれらを若干の tribes (氏族) に細別しうるが、英吉利人の植民當初に最も交渉の深かつたのは Algonquins と Iroquois とであつた。後者は Erie 湖、Ontario 湖の周圍、St. Lawrence 河流域地方から New York 州西部、Pennsylvania 州へかけて擴がつてゐて、その中には Mohawks, Oneidas, Onondagas, Cayugas, Senecas の諸氏族を數へた。彼等が聯盟を結んで Five Nations (後に Tuscaroras も加盟して Six Nations) と云つた。Iroquois の分族で南方 Appalachian 山系の南部に占據した Cherokees 及び North Carolina 州の中央北部に住んだ Tuscaroras の二氏族もあつた。Algonquins は North Carolina 州以北、Hudson 灣に到る廣大な地域 (Mississippi 以東) に擴がり、New Jersey 州

から New England, Nova Scotia に到る海岸地方に伸びて、殆んど Iroquois 諸氏族を包圍してゐた形である。此種族に屬するものとしては Blackfeet, Cheyennes, Mohicans (Mohegans), Shawnees 等の種族があつた。Virginia から南北 Carolina 州へかけて Sioux 族の分族 Catawbans が認められ、彼等は獨立戰爭に植民軍に味方したが、此 Sioux はミシシッピ、ミズリの流域にその本據を有してゐた。

これらの種族がアメリカの発見當時いかなる發達段階にあつたかと云ふと、Savagery (蒙昧時代) は通過してゐたが Barbarism (野蠻時代) の下段に在つたとされてゐる。狩獵と粗笨なる農業が行はれ、玉蜀黍、煙草、馬鈴薯、七面鳥、野牛等は新大陸特有の自然物であり、土人の生活を可能ならしめるものであつた。だが、かうした動植物よりも、歐洲人にとつて一層不思議なのは、その社會組織であつた。社會學者 Lewis Morgan は *Ancient Society, or Researches in the Lines of Human Progress from Savagery through Barbarism to Civilization* (New York, 1877) に於て Iroquois の原始共產體を研究した結果を記録したが、其昔の英吉利植民は自分達のそれと全く異なる社會組織を理解することは出来なかつた。従つて土人が白人によつて生活を脅かされた時、猛烈にそれに對抗したのを見て、白人たちは土人を殘忍野蠻としか考へえなかつた。勿論、原始社會を理想化するの誤りであるが、また之を殘忍視するのも誤つてゐる。少くとも内部的には原始共產體は平和と平等の支配する社會であつたのだ。それは天眞爛漫で素朴な氏族制度であつた。兵士も警官もなく、貴族も國王も知事もなく、また裁判所も監獄も訴訟もなくして一切の事が圓滑に運ばれる。凡そ喧嘩口論はそれに関係ある者の全部が、即ち氏族または種族、乃至は個々の氏族相互が、之を解決する。ただ極端な場合、それも稀にしか用ゐられない手段として、血を

以て復讐することがあるだけだ。其處には貧民や窮民がない。老者、病者、戦争不具者は共産體によつて保護された。それに属する全ての者が、男女の別なく、平等であり自由であつて、奴隸の存在は之を見る事が出来ず、更にまた他種族を隷屬せしむる餘地も原則としてなかつた。

かゝる生活を續けて来た土人は始めて歐羅巴人に接觸して如何なる態度に出でたか、それは白人が強力を以て向へば死を賭して争ふか、衆寡敵せずと見れば退却するのだつた。併しながら決して彼等土人は白人に隷屬すること、また白人に同化することを背んじなかつた。されば彼等は黒人の如く奴隸の境涯に入ることはなかつたが、漸次逐はれて滅亡するか、或は狭陋な地域に追込められて今日に到つた。もつとも白人から對等に取扱はれる時、彼等は白人のために道案内となり、交易者となり、同盟者ともなつた。彼等が野牛を追ふて森林を駈けた足跡は trails として白人開拓者を導き、それがやがて往還となり、終には鐵路の敷かれる前驅ともなつた。また交易者の trading posts が水路の要點にあつたのも自然であるが、Albany, Pittsburg, Detroit, Chicago, St. Louis, Council Bluffs, Kansas City 等、今日の都會が往時の土人部落たりし事實も記憶して置くべきであらう。

英吉利植民は新大陸に於て農業を主要産業としたとは云へ、茲に見通してならないのは土人との間に、毛皮の代りにラム酒と銃器を交易したことである。そこで我々はアメリカの frontier の最初のもの、trader's frontier であつたことに氣附く。史家 Turner は言ふ——“The trade was coeval with American discovery. The Norsemen, Vespuccius, Verrazani, Hudson, John Smith, all trafficked for furs. The Plymouth pilgrims settled in Indian cornfields, and their first return cargo was of beaver and lumber.” (交易はアメリカ發見と時を同じくしてゐる。古昔のスカン

ヂナヴィア人、アメリゴ・ヴェスプーチ [伊太利航海者、1451-1512]、ジョヴァニ・ヴェラツァーニ [フロレンス生れの航海者、1480?-1527]、ヘンリ・ハドスン [英國の探險家、?-1611]、ジョン・スミス [英國の冒險家で Virginia の開拓者、1580-1631] これら全て毛皮の取引をしたのである。プリマスの植民は土人の玉蜀黍畑に落着いたのであるが、最初に本國へ送つた船貨は海狸の皮と材木とであつた。——Frederick Jackson Turner: *The Frontier in American History*, p.p. 12-13.

New England に於ける事例は他地方の植民地に於ても同様に見られる。北は Maine 州から南は Georgia 州の海岸へかけて、土人との取引は河川を遡つて漸次奥地へ進んで行つた。そして愈々西方へ及ぶにつれて、Ohio 河、大湖地方、Mississippi 河、Missouri 河、Platte 河の流域が開かれた。交易者の足跡は Rocky 山系に通路を開拓して、Lewis, Clark, Frémont, Bidwell 等の探險者を導くことにもなつた。かうした大陸内地の踏査の進捗が對土人の取引に基因すると考へられる以上、我々はアメリカ植民史に於ける土人の役割の重大なるを思はねばならぬが、茲に一應土人側に與へた影響を顧ることも意味のないことではあるまい。所謂白人の traders は英吉利人の外に夙に佛蘭西人が五湖地方から Mississippi 流域に活動してゐたので、新大陸に於ける英吉利人はメキシコ灣沿岸の西班牙勢力の外にも佛蘭西人を競争相手として有してゐたわけである。ところで英吉利人は農業的植民を基調としたが佛蘭西人は毛皮商人を中心に植民がなされ、兩者の對抗に就ては土人を中心にして興味ある觀察が下されるのである。佛蘭西の naval commander であつた Marquis Abraham Duquesne (1610-1688) が Iroquois 人に告げた言葉はその一例である。“Are you ignorant of the difference between the king of England and the king of France?”

Go see the forts that our king has established and you will see that you can still hunt under their very walls. They have been placed for your advantage in places which you frequent. The English, on the contrary, are no sooner in possession of a place than the game is driven away. The forest falls before them as they advance, and the soil is laid bare so that you can scarce find the wherewithal to erect a shelter for the night.” (お前達は英吉利國王と佛蘭西國王が異つてゐるのを知らないのか。わが佛蘭西國王の築かれた城塞へ行つて見れば、お前達は城壁の下で今も狩獵が出来るのが判るだらう。城塞はお前達の都合のよいやうに、お前達のいつも行く場所を選んで築いてあるのだ。ところが之と反對に英吉利人どもが或る土地を手に入れると早速に獲物は追拂はれてしまふ、英吉利人どもの進んで行く先々の森林は伐倒されて地面がむきだしになるから、お前達は晩に寝る處を作らうとしても必要な物を得ることが六ヶしいのだ)。

これは佛蘭西人が土人を自分の味方に引入れようとしての巧言であるのは言ふまでもないが、言葉の上での誘惑よりも恐ろしいものが土人の平和な生活を亂したのである。それは外ならぬ銃器であつた。『土人が佛蘭西人を愛惜すること、彼等の兒孫に對する以上であつた。と云ふのは我々佛蘭西人によつて彼等は銃器その他の貨物を手に入れることが出来たからである』と探險家 La Salle (1643-87) は言つたが、實際、銃を所有した土人部族は所有せざる部族よりも有利なる立場に置かれたのは勿論である。従つて彼等が白人交易者を歓迎したのは自然であつた。しかも同時に優秀な武器を有つた土人が交易者の後に進んで白人農業者を懼すことになつたのは皮肉な現象とも見られる。英吉利植民の土人に對する關係は第十七世紀末から愈々多事にな

つた。それがために、各個の植民地が連絡を取り、共同政策を立てて土人に當る機會を作つたが、此共同の精神がアメリカ獨立戰爭に際して大いに役立つたと知れば、アメリカ土人の歴史的意味は一層大なるものがあるといふことが出来よう。

英吉利植民がアメリカ土人と物資の交換だけに甘んぜず、彼等の土地を蠶食して行つたことは餘りにも明瞭である。土人にとつて土地は、日光と同じく、至上者からの賜物であつた。そして土地を個人の所有と見ず、部落、種族の共同體の所有とされた。されば白人は彼等と個人的取引が出来ず、條約を結んで各種族を其原住地から逐つて他の地方に移らしめた。或は買収したり武力に訴へたこともあるが條約によるのが最も容易であつた。かくして土人の自由に馳驅しうる領域は漸次狭められ、三百年前には今日のアメリカ合衆國三百萬方哩の土地全部が彼等のものであつたのに、今では總計五萬三千方哩の土地が彼等のために國內各地方に Reservations として特別地域をなしてゐるのである。其人口は現今約三十五萬を算するが、1600 年には土人總數約八十萬で其内の二十五萬は Mississippi 以東に住んでゐたと考へられてゐる。そして或る研究者の明言するやうに、“Originally, the Indians owned all the land; later we needed most of it for ourselves; therefore, it is but just that the Indians should have what is left.” と云ふ見解が一般に行はれてゐる次第であつて、此事の眞理はアメリカに於てのみならず、地球上の到る處に於て見られるのである。

扱てアメリカ土人に關して一通りの記述を済ませたので、文藝作品に彼等土人が如何に取扱はれて來たかを紹介して置かう。從來我國では此方面の紹介が殆んど見當らないから、此機會に一言する次第である。植民時代の歴史的文献、個人の日記等に斷片的に記録されたものは別として、1766 年に

London で出版された Robert Roger's (1730?-1795) の *Ponteach: or the Savages of America* は最初に注目すべきものと考へられてゐる。此戯曲は白人が土人と交易する時いかにも欺瞞的手段を用ゐること、そして其邪曲を助成するものに宗教家のあることを忌憚なく非難してゐるため、當時上演される機會はなかつた。土人の性格を描く點に於て不充分なるものがあると説く批評家もあるがそれは兎も角、さうした正義感に基いた作品を第十八世紀中葉の文藝に見出すことは意外な喜びでなければならぬ。なほアメリカ土人を主題とした戯曲が 1808-48 の四十年間に數多く現れ、かの Virginia 開拓者 John Smith の救命者として有名な酋長の娘 Pocahontas を主人公としたものだけでも四篇に上つてゐると云ふ。同じく第十九世紀の二十年代から四十年代へかけて James Fenimore Cooper (1789-1851) の傳奇物語五篇——*The Deerslayer, The Last of the Mohicans, The Pathfinder, The Pioneer, The Prairie* 之を總稱して“Leatherstocking Tales”と呼ぶが當時の讀書界を風靡したが、此 Cooper の作品に瀰漫してゐるのも正義の觀念である。“Justice, not partizanship, is Leather-Stocking's essential trait: justice as conceived, somewhat out of space and out of time, by the universal spirit of youth.” (Carl Van Doren: *The American Novel*“ p. 45.)

第十九世紀の中葉にはニグロ問題がアメリカ全土を支配した如くに見えるが、それが漸く落着くと、再び土人の生活に注意を向ける作家も現はれるやうになつた。だが此時期になると、土人生活の背景はミシシッピ河以西カリフォルニアにまで移動してゐる。Helen Hunt Jackson 夫人 (1831-1885) は小説 *Ramona* (1884) に於て“true conflict and injustice...between the old Californians, Indian or Spanish, and the predacious vanguard

of the Anglo-Saxon conquest” (Van Doren, *Ibid*, p. 228) を描いてゐる。現代作家の中では Mary Austin 夫人 (1868-) がアメリカ土人研究の權威として作品に論文に彼等の生活を記録してゐる。夫人と同じく太平洋岸地方に住む詩人 Robinson Jeffers も長詩 *The Loving Shepherdess* に土人の一性格を描いてゐる。茲では正義感よりも敗殘民族の魂の底を見きほめようとの努力が強く働いてゐるが、Michael Gold の短篇 *Love on a Garbage Dump* に出て來る變質者 James Cherry は現代社會機構に於ける彼等 American Indian の運命を端的に指示してゐるものであらう。

第二章

第十七世紀アメリカ植民的社會

前章の説明の中で American Indian 自身の文學的表現に就て述ぶべきを逸してゐたから、茲に簡単に紹介して置きたい。第十七世紀の英國植民は純文學的活動の見べきものがなかつたと言はれてゐるが、此舊大陸よりの移住者たちに比すると、所謂新大陸の原住民族は寧ろ高度の文化を所有してゐたとも考へられるのである。殊に詩の領域に於て素晴らしい才能を屢々發揮してゐる。Canada 東部地方、Newfoundland 地方に住む Algonquins に屬する Micmac 族の間で作られた想夫戀の曲に次の如きものがある。勿論茲には英譯を掲げるより仕方がない。

There are many men in the world,
But only one is dear to me.
He is good, and brave, and strong,
He swore to love none but me;
He has forgotten me.
It was a bad spirit that changed him,
But I will love none but him.

何處の國土にあつても戀の歌に優れたものが多い。次に掲げるのは Chipewey 族の古い戀の歌である。同じやうな詞を繰返しながら漸層法にびたりと協つて、單純な力強さが感じられる。一徹な戀心のほのめきが露(か)に窺はれる。

I will walk into somebody's dwelling,
Into somebody's dwelling will I walk,

To thy dwelling, my dearly beloved,
Some night will I walk, will I walk.

Some night in the Winter, my beloved,
To thy dwelling will I walk.

This very night, my beloved,
To thy dwelling will I walk, will I walk.

最近 *A Literary History of the American People* (to be completed in 4 vols.) を著した Charles Angoff は、"Instead of trying to make Christians of the Indians, the colonial Americans might well have listened to their love-songs, and got some civilization into themselves. Mrs. Bradstreet, Michael Wigglesworth and the authors of the Bay Psalm Book had much to learn from their heathen neighbors." (土人を基督教化することに努めるよりも、植民人たちは土人の愛の歌に耳を傾け或種の文明を自分等の中へ導入すべきだつた。ブラドストリー夫人[1612-1672]、マイケル・ヴィグルズワース[1631-1705]およびベイ・サーム・ブック[1640年完成、舊約聖書の詩篇を欽定譯とは異なる見解の下に譯したるもの]の筆者たちは彼等の隣人たる異教徒に學ぶべきものが多かつたのである)。とまで切言してゐるが、なるほど次のやうな愛人の讚美の頌を讀むと、ソロモンの雅歌に見える有名な章句が想起されると共に、アメリカ土人の生活様

式までも鮮かに知られて、清美なる原始の世界が我にもあらず眼底に浮んで來るのである。これも Chippeway 族の生んだもので、恐らく世界文學の絶唱の中に數へても遜色なきほどである。

My love is tall and graceful as the young pine waving on the hill, and as swift in his course as the noble, stately deer; his hair is flowing, and dark as the blackbird that floats through the air, and his eyes, like the eagle's, both piercing and bright; his heart it is fearless and great, and his arm it is strong in the fight, as this bow made of iron-wood which he easily bends. His aim is as sure in the fight and chase, as the hawk, which ne'er misses its prey. Ah, aid me, ye spirits! of water, of earth, and of sky, while I sing in his praise; and my voice shall be heard, it shall ring through the sky; and echo, repeating the same, shall cause it to swell in the breadth of the wind; and his fame shall be spread throughout the land, and his name shall be known beyond the lakes.

扨て、上述の如き先住民族を瞥見の後、我々は英吉利植民の社會状態に就て語らねばならない。だが最初に記して置くべきは、同じく植民時代の社會と言つても Boston を中心とする北部地方、New York, Philadelphia を中心とする中部地方 Jamestown, Charleston を中心とする南部地方によつて各々情勢は異なるし、第十七世紀末葉——1680 年代以後とそれ以前では社會生活の中心勢力も移動してゐると云ふ事實である。そして此時代に於ける、所謂文明の契機となる富の覇權が奈邊に握られてゐたかと言ふに、大地主と大商人の手にあつたことは贅言するまでもない。だが、アメリカへの最

初の英國植民が宗教的動機に因るとされてゐる以上、かの清教徒の勢力を無視することは出来ない。ただ清教徒の勢力が第十七世紀の末葉に及んでは既に頽勢に向ひつつあつたことを注意すれば足りよう。もちろん Puritanism は New England に於て特に壓倒的勢力を有し、それが今日のアメリカ的理想の根幹をなせるものであるから、Massachusetts Bay に臨む Boston を中心とする地方の事情から我々の概観は始められるのが順序であるだらう。

そこで此現世的な富の勢力と、超絶的な精神世界の交渉を如何なる観点から眺めるべきか、それを我々は Parrington 教授から教示を仰ぐべきである。

"The course of its [the American mind's] somewhat singular development would seem from the first to have been determined by an interweaving of idealism and economics—by the substantial body of thought and customs and institutions brought from the old home, slowly modified by new ways of life developing the silent pressure of a freer environment. Of these new ways, the first in creative influence was probably the freehold tenure of landholdings, put in effect at the beginning and retained unmodified for generations; and the second was the development of a mercantile spirit that resulted from the sterility of the Massachusetts soil, which encouraged the ambitious to seek wealth in more profitable ways than tilling barren acres. From these sources emerged the two chief classes of New England: the yeomanry, a body of democratic freeholders who constituted the rank and file of the people, and the gentry, a group of capable merchants who dominated the commonwealth from early days to the rise of industrialism."—V. L.

Parrington: *The Colonial Mind*, p. 3. (アメリカ精神の特異とも云ふべき發展行程は、もともと理想と經濟との交互作用によつて——換言すれば、母國より齎された思想、習慣、制度の實體が、自由なる環境の黙々たる壓力の下に開始された新生活様式によつて徐々に抑制變化せしめられて——決定された如く思はれる。是等の新生活様式のうち、創造的影響を與へたものの第一は恐らく土地の自由保有で、その権利は當初に於て規定されたまゝ幾世代に互つて變改を見ざりしものである。第二はマサチューセッツの土地不毛から結果した商利精神の發展であつて、これは野心家をして荒蕪地を耕作するよりも多大の利益をあげる方法で富を追求せしめる所以となつた。是等の源泉からニウ・イングランドには二つの主要階級が現出した。即ち、小農階級と郷土階級で、前者は住民の卒伍を形成せる民主的土地自由保有者の一團、後者は初期時代より産業主義の興起に到るまで該地方の共和體を支配した有能なる大商人の一群であつた。)表面より之を見れば、小農と郷土階級の所有衝動本位の目標、意圖は多くの場合調和してゐるが、もちろん夫々異なる方向を指してゐたことは言ふまでもなく、ただ我々の注意すべきはかゝる意圖目標が神權政體の理想と清教的神學の抑遏と交互作用をなしてゐた點であらう。かくして理想精神と經濟生活は New England に於ける初期の植民時代を鮮かに特徴づけてゐるのであつて、再び Parrington 教授の言葉に聽けば次の如くに説明されてゐる。"The Puritan and the Yankee were the two halves of the New England whole, and to overlook or underestimate the contributions of either to the common life is grossly to misinterpret the spirit and character of primitive New England. The Puritan was a contribution of the old world, created by the rugged idealism of the English Reformation; the Yankee was a product of

native conditions, created by a practical economics."—*Ibid.* pp. 3-4.
 (ピウリタンとヤンキーは全ニウ・イングランドを二分した、従つて此兩者孰れかが一般生活に寄與した所のものを看過し、或は過少評價するならば、初原ニウ・イングランドの精神および特性を甚だしく誤り傳へることになる。

○ピウリタンは英吉利宗教改革の括屈な理想主義によつて創造された舊世界よりの一寄與であつた。ヤンキーは實際的經濟生活より生れ出でたる、風土固有の條件の所産であつた。

驕つて Puritans の新大陸への渡來と、其後の生活に就て、稍々具體的に述べるのは我々の次にすべき務めであらう。從來の史書に説いてある所によれば、アメリカへの植民の動機は純粹に宗教的なものとされてゐるが、それは今日では文字通りに理解することが出来ない。英吉利本國に於ける Puritanism そのものの勃興からして經濟事情の必然的歸結と考へられるのであつてみれば、かの Pilgrim Fathers として名高き渡航者百二名の中、宗教的信念のために和蘭に亡命してゐる者は三分の一にすぎなかつたと云ふ事實を聞かされても驚きはしない筈である。此 Pilgrim Fathers が 65 日の難航海の後 Plymouth に上陸したのは 1620 年十一月で彼等は其地に植民地を開いたのであるが、其後の十年間には同地方への移住者は數ふるに足らず、1630-40 年の期間に及んで所謂 Puritan Exodus もしくは Great Migration が見られたのである。此大移住の動機が經濟的のものであつた證據として、或史家は、彼等が渡來したのは生活狀態の向上を願つたためであり、政府の誅求を遁れんためであり、土地を獲んがためであるとして 1640 年に Massachusetts の人口を急激に膨脹せしめた一萬六千人の中、一萬二千人までが教會員でなかつた事實を擧げてゐる。是等の民衆は當初は周圍の自然を征服する技術に熟せざるところから、彼等の指導者と仰ぐ聖職の支配

の下にあつて徐ろに勤勞の生活を送りつつ、漸くに漁撈、造船、紡績を營んで富を蓄積するに到つたのであつて、茲に Yankee の發生を見た次第である。第十七世紀の末葉に近づくに及んで Puritan divines の政治的權力が没落期に入つた理由は他に之を求むるまでもない。

かくて第十七・八世紀の New England の發達を記述するに當つて、その前半を Puritan 萬能の時代、後半を Yankee 隆昌の時代と考へ、それによつて、先づ Puritanism の規定せる生活とは如何なるものであつたかを窺はなければならぬ。清教徒的規律の嚴格さはあらゆる行爲、一切の生活様式のはしばしにまで適用された。その權威の源は聖書、わけても舊約諸書の中に現れたる神の意思であつた。新約書に見られるキリストの人間の情味に滿てる教訓よりも峻嚴酷烈とも評すべきモーゼの律法が彼等の生活指針として採用されたのである。然らば Puritans の理解した神の意志とは何であるかと云ふのに、人生の事すべて道德的意味が中心となつてゐること、及びカルヴィンの神學に説く所の豫定説によつて知られると云ふのであつた。アダムの原罪によつて人類は墮落したけれども、若干の選ばれたる人間は召されて天の樂園に入るを許される。ただその選民となる者の資格は人間自身によつて決定されるのでなく、不可測なる神の正義によつて判ぜられるので、個人は神の豫定し給ふた所を寸毫たりとも變改することは出来ない。それでは人間は自分が天國に召されるか地獄に追放されるかを判断する方便を全く絶たれてゐるのだらうか。必ずしも然らずである。自己の行爲を常に反省し、自己の魂の喘ぎ求むる所を細微に涉つて検討することによつて、判断することが可能である。——こうした考へ方が基礎となつてゐたために、New England の植民人の間には廣く日記をつける風習が行はれたのであり、當時の文學には "torturing searchings of heart" が特に著しいのだと言はれる

のである。

彼等清教徒の中には自らが救済を期待しえざる呪はれた存在であると觀念した者もあつたが、多くの者は自らを選民なりと信じたがため、清教徒以外の Quakers とか Baptists とかを迫害したのだつた。植民地域内に Quaker 教徒を伴ひ來つた者は百磅の罰金を徴せられた。Quaker 教徒が植民地から追放を受けて再び入りこんで來れば、最初の場合には片耳を殺ぎ、第二回目には他の片耳を殺ぐと云ふ罰法があつた。そして若し三度禁を犯した時には舌に燒鑊で孔を穿つことに定められてゐた。後に到つて此最後の罰則は一層酷烈となり、idolatry, blasphemy, adultery, witchcraft 等の罪と同様、死を以て遇せられた。他に對して峻嚴を極めた清教徒が自分達の生活に就て厳格な規律を定めてゐたことは言ふまでもない。服裝、調髪、命名、夫婦の寢室に於ける作法に關してまで逐一に神の掟が定められてゐた。植民地開拓初期には教會に於ける説教は毎週四回づつ行はれたがかくては信徒の日常の仕事に差支へると云ふので説教は日曜だけと制限された。ところが熱心な牧師の側ではそれを不満として、土曜日の夜と日曜日の晝夜ぶつ通しに説教をしたものであつた。そして遠路の來聴者は夜明までに歸宅するため日曜の夜半まで續く説教は途中でやめて去らなければならなかつた。日曜と云へば聖なる安息日で、如何なる種類の娛樂も絶つべきで、良家の者ならば教會への往復を外にしては街路に姿を見せるのすら憚つた。また幾人かの牧師は日曜に生れた小兒に洗禮を授けることを拒んだが、その理由は、日曜に生れるのは日曜に懐胎したものと一般に信じられてゐたからであつた。然るにその洗禮を拒んだ牧師の一人が遂に所信を譲へざるを得ざるに到つた事情が起つた、それは其夫人が日曜に双生兒を分娩したと云ふのである。此事實は Angoff のアメリカ文學史に従へば、“Proceeding of the Mas-

sachusetts Historical Society. New Series. Vol. VI. p. 494” に見えてゐるとのことである)

茲で一應、Puritans の實世間的勢力の強大であつた所以を考へてみるのに、マサチューセツ植民地では、他の多數の植民地に於てと同じく參政權は宗教上の資格によつて得られた。1634 年には四千人の植民人口の中、有權者は三百五十人、1670 年には二萬五千の人口中、千百人だけが有權者であつたといふ。此事實から見て第十七世紀の大部分が教會員本位の、謂はば神政政治であつたことはアメリカ史の研究者が常に知つてゐなければならぬ所である。併しながら 1680 年に William 王の命によつて參政權は宗教的資格によらずして財産的資格によつて與へらるべきものとされ、茲にアメリカ植民地は封建時代よりの過渡期を脱して、明確に近代社會へ足を踏み入れたのである。

第十七世紀の植民人の思想の背景をなしたものは宗教的教養であつた。移住民の指導者は當時の英吉利中産知識階級に屬し、大多數は大學出身者であつた。かくして當時の一般植民社會は舊世界のいつれの國々に於ても見ることの出來ないほど讀書に對する執着心が養はれてゐた。教育の尊重された證據として、早くも既に 1636 年に Harvard College が設けられた事實を挙げれば足りるであらう。もちろん當時の教育はあくまで宗教本位で、次の世紀の中葉に及んで Benjamin Franklin が Pennsylvania 大學の基礎を置くまでは、アメリカに於ける英吉利植民地には近代的意味に解しての高等教育機關は絶無であつた。ところで第十七世紀の一般教育の性質と程度を知るために、“The New England Primer” なるものの内容を一瞥するのは無益であるまい。それは始め家庭に於ける兒童のために準備された讀本であつたが、漸く初等學校の教科書として用ゐられ、また程度の低い一般修養書めいたも

のとして取扱はれるやうになつた。従つて其内容も屢々改められ、宗教道德の訓戒を主としたものに断片的な歴史の知識をも加へられた。“The New England Primer”の始めて出版された正確な年代は不明であるが、1687-90年の間であらうとされてゐる。そして或研究者の述べる所によると五十七種の異なる版が存在すると云ふ。初版發行以來、本書が廣く行はれた約一世紀半の間に毎年平均二萬部を賣つたと云ふことから推して考へて、それがどれほど人氣があつたかを想像することは難くない。またそれが New England 地方のみで讀まれたのでないことは、Philadelphia の或書肆で 1749-66 年の間に三萬七千部を賣つたと云ふことによつても知られる。(因に、1600 年に於けるアメリカ南北諸植民地の總人口は約八萬、1760 年には約百五十一萬と概算されてゐる。此第十八世紀中葉に於ける人口の地方的分布を見るに New England には四十七萬餘、中部地方には四十萬餘、南部には七十一萬餘。而して全人口の四分の一弱、即ち三十八萬六千は黒人であつた。) 典型的な “Primer” の内容はどんなものであるか、それは “the alphabet, the syllabarium, the alphabet of lessons, the Lord's Prayer, the Creed, the Ten Commandments, the poem of the Martyr John Rogers with an illustration of his burning, and the names of the Books of the Bible” とされてゐる。醜惡な版畫の挿繪、椗の板の表紙、死の恐怖を幼少年の頭腦に泌みこませる内容。——併し茲には其中より若干の「詩句」の引用を以てそれを髣髴せしめよう。

In Adam's Fall
We sinned all.

Thy Life to mend
This Book attend.

The Cat doth play,
And after slay.

An Eagle's flight,
Is out of sight.

The idle Fool,
Is whipt at school.

As runs the Glass
Man's Life doth pass.

Peter Denies
His Lord and cries.

Time cuts down all,
Both great and small.

Xerxes the great did die
and so must you and I.

Youth forward slips
Death soonest nips.

I in the Burying Place may see Graves Shorter there than I;
From Death's Arrest no Age is free, Young Children too may die;
My God, may such an awful sight, Awakening be to me!
Oh! that by early Grace I might For Death prepared be.

次に掲げるのは道徳的訓戒の言葉である。

Good Children Must

Fear God all Day Love Christ alway
Parents obey In Secret Pray
No False thing Say Mind little Play
By no Sin Stray Make no delay

In Doing Good

Awake, arise, behold thou hast
Thy Life a Leaf, thy Breath a Blast;
At Night lye down prepar'd to have
Thy sleep, thy death, thy bed, thy grave.

かゝる現世否定的な思想を注入された少年少女が生長して後に如何なる文學を創作したか、恐らく何人も容易に察知できるのであらう。第十七世紀の New England が産出した文學としては、歴史的文献としての價値を有する Annals の類、日記の類、また科學上の論文、説教、などを外にすれば若干の詩があるのみである。しかもその詩たるや、Angoff の批評する如くに、

アメリカ土人の純粹な抒情的表白に劣ること數等の、概念的な宗教詩でしかなかつた。Puritan 萬能の時代に Thomas Morton, Roger Williams 等の自由思想家の聲が大なる勢力とならず、却つて抑壓された運命にあつたのは當然であるが、それとは別に、植民地時代の社會生活そのものの性質が Puritanism の規律を必須のものとして、それ以外に注意を逸らす餘裕のなかつたことを我々は充分に認めなければならない。その眞理であることは、Cotton Mather を中心とする所謂 Puritan oligarchy の没落が何によつて結果したかを考へるならば直ちに首肯できる、即ち新大陸に生活の本據を確立した富裕なる中産階級の擡頭である。

第三章

アメリカ獨立戦争の前夜

歐羅巴からアメリカ大陸への移住者が二代三代と新しい環境に落着いて生活する間に、独自の文明が築き上げられたと想像するらならば、それは大いなる誤解である。初代の移住者の中には教養あり且つ見識の高い人物も相當數多くあつたけれども、文字通りに萬里の波濤を隔てた本國と直接の交渉を有する者は、其後の數十年の間にあつては、少數の支配階級に屬する者だけであつた。詩人として Michael Wigglesworth (1631-1705) を、文筆教養の人として Cotton Mather (1663-1728) を第一人者と仰いだ時代は、之を高く評價するわけには行かないであらう。——我々は今、前章の續きとして、觀察の範圍を主として New England 地方に限つて述べてゐるのではあるが、爾余の諸地方に於ても一般的情勢は概して同一であつたと解してよいのである。——第十七世紀末葉から次の世紀の初めへかけて、アメリカ植民地は文化的には何の見るべきものがなかつた。 狭陋な provincialism が植民地人の頭腦と心情を支配した。瘦せた土地にモーゼの律法を遵奉する人民が生活する時、それは免れざる所であつた。彼等の使用する言語そのものまでが光澤を失つたと評されてゐるほどである。“The clean and expressive idiom that Bunyan caught from the lips of English villagers, with its echoes of a more spontaneous life before the Puritan middle class had substituted asceticism for beauty, grew thinner and more meager, its bright homespun dyes subdued to a dun butternut.”—V. L.

備
地
の
秘

Parrington: *The Colonial Mind*, p. 85.

宗教の方面に就て考へてみても、植民地開發當時の熱切なる信仰の指導は期待できなかつた。Provincialism が形式本位の弊風と結びついて、牧師の努力にも拘らず、神の言葉も縁なき衆生の耳には野の風と同じものにしか聞えなかつた。“Sermon-proof, gospel-glutted generation” (説教不浸透福音飽満の世代) であつたのだ。尤もそれには牧師自身の側にも責任がないとは云へない。彼等さへも形式に墮して、熱を缺いたと評される。それがために迷信への道が準備され、1692年に最頂點に達した witchcraft 征服の如き悲劇的事件を惹起した。世界の終末が世紀の終に到來すると云ふ思想が New England 一體に擴まり、demonology に對する關心を喚起し、當時の有識者までもが “the Evening Wolves will be much abroad, when we are near the Evening of the World” (夜陰の狼どもは、世界の夕暮の近づくと共に、のし歩く) と信じて疑はなかつた。感情の不自然なる抑壓と Puritan 神學の二元論が原因となつて、かゝる變態的心理を結果したものである。

前章で説いた如く、第十七世紀の末に、アメリカ植民地に於ける参政權は宗教的資格から財産的資格に置換へられたが、時代の推移が何事を物語るかはずべて、此一點に歸して考へることが出来る。Puritan の理想精神は茲に衰頹して、Yankee の實利的精神が擡頭して來たのである。Parrington はそれを、“The venture in idealism was over and economic determinism reasserted its sway” *The Colonial Mind*, p. 125 と表現してゐる。此傾向推移は、富の蓄積の増加するにつれて加速度的に促進され、やがて名譽稱號を欲する Tory の一團、植民地的貴族制の發生にまで導かれた。この商利者流の Tory 勢力の發達は、之に對抗する民主的な一群——土

地自由保有、town meeting、組合教會、貴族制度に對する不信、等の特徴とする庶民階級——の勢力消長と關聯させて考へなければならぬ。尤も、それは後に到つて稍々詳述すべき課題であつて、さし當つては封建的 Tory と Puritan Yankee (植民地人を綜合的にかく呼んで可いであらう) の對立拮抗を一瞥すべきである。かくすることは即ちアメリカ獨立戦争への一里塚の一つを理解することである。但しそれに就て多言を費すことは出来ないので一挿話を以て代表させるに止めたい。

植民地時代にはアメリカ諸地方は英吉利國王に任命されたる Governor によつて統治されてゐた。Massachusetts の幾代目かの Governor に Joseph Dudley と云ふ人物がゐるが、彼は移住者の子として生れながら、英吉利に長く住み、議會に席を占めたこともある。彼が 1702 年に Governor に任命されると、持前の肩で風を切る特權階級者の悪い方面を發揮したのだつた。1705 年十二月の或日、彼が田舎路を馬車を驅つてゐる時、反對の方向から來る二臺の材木運搬車に行きあつた。道路の兩側には雪の吹溜りが堆高く、何方かが道を避けねばならなかつた。Governor は馬車の窓から首を出して相手の carters に向つて傍へ寄るよゝに命じた。すると先方は、吹溜りの在る處で荷馬車の方が道を避けるのは無理だと云つて、命に従はうとしない。双方で言葉を重ねてゐる中に語氣が荒くなつて行つた。たとへ荷馬車曳きでも一箇の人間だとばかり、一人のcarter は叫んだのである、——“I am as good flesh and blood as you... you may goe out of the way.” それを聞くと Governor Dudley も黙つてはゐられない。彼は我を忘れて之に應じた、——“You lie, you dog; you lie, you devill.” 今度は carter が負けてゐず、“Such words don't become a Christian.” とやり返す。Governor は更に “A Christian, you dog! a Christian, you devill! I

was a Christian before you were born!" と叫んで carters の鞭を奪ひ、それで無禮者をしたたかに打ちのめした。そして二人の carters を召捕へて牢屋にぶちこんで了つた。此の挿話は Samuel Sewall (1652-1730) の有名な日記に見えるが、かゝる庶民の間の氣概は決して珍しい事例ではなく、一般の空氣を代表するものと考へられるのである。『Village New England was becoming surprisingly independent in spirit when plain countrymen stood upon their rights against the Governor..... Three generations in America were having their effect in the creation of a homespun democracy.』(The Colonial Mind, p. 126) と Parrington の言つてゐる通り、我々は既に第十八世紀の初頭に於て、アメリカ獨立の精神の萌芽を認めるのである。併しながら、獨立戦争の動因は極めて多方面から之を考察しなければならぬのは勿論であつて、社會史的にそれを理解せんとすれば、戦争の直接原因のみを抽出して満足するわけに行かない。以下に於ては第十八世紀初年から、ほぼ世紀の央ばまでの大勢を概観しよう。

既に繰返し述べた如く、第十七世紀末から Puritan theocracy は漸く勢力を失墜して、中産階級が頭を擡げ始めた。更に我々が注意すべきは、同じ頃に及んでアメリカ大陸に於ける英吉利諸植民地が互に連絡を取る氣運に向つて來た事實である。先住民族である American (Red) Indians を共同の敵としたことは(前々章に指摘して置いた)植民地全部一つの統一體として英吉利本國に對峙せしめることにもなつたのであつて、アメリカ獨立を中心に考察する場合、之を重要視しすぎることは不可能であらう。名著 *Revolutionary New England: 1691-1776* (1923年出版) の著者 James Truslow Adams の言葉を引用すれば、"It was in the Eighteenth Century that the American Colonies grew into a nation psychologically as well as

politically, and that the American mind took on its distinctive features." なのである。舊來の史家は、第十七世紀に於て植民地人一般が宗教上の自由、政治上の自由を渴望して已まなかつたと説いてゐたが、事實は然らずであつて、かゝる自由に対する要求は第十八世紀に入つてから盛んになつたと考へるのが最近の定説となつてゐる。

植民地諸地方の全人口の増加を先づ念頭に置くとして、それは 1650 年に凡五萬二千人であつたのが、1700 年には二十七萬五千に増してゐる。ところが此増加が舊世界よりの移住者の増加に因るものであることは言ふまでもなく、また彼等移住者がいつれも經濟上の理由から渡來したのである以上、新しい國土で各々業務に働んだことは想像するに難くない。従つて植民地に於ける産業は忽ち活氣づいて、貨幣の動きも活潑になつた。労働力の需要が多くなつたために黒奴の輸入も計畫された。黒人奴隸賣買は北方 New England の商人の手によつてなされたもので、後年奴隸廢止運動に際して南北對立の氣勢となつたのは、北方の商人が奴隸賣買から利益を擧げることが出来なくなつたことも一つの理由として考へられる。それほどにも南部諸植民地での黒人繁殖が盛んだつたのである。獨立戦争の直前に於て黒人人口は五十萬以上を數へた。Georgia, 南北 Carolinas, Virginia, Maryland にあつては、黒人と白人と數に於て相匹敵し、或は後者が前者を凌いだ。Delaware, Pennsylvania 等の中部地方ですら人口の五分の一までが黒人、New York では六分の一が黒人であつた。New England 諸植民地でも五十人に一人の割合で黒人がゐた。方面を變へて造船業の景況を見ると、第十八世紀の中葉までに、New England では毎年 70 隻の新造船が海に浮び New York と Pennsylvania では 45 隻、他の南部諸地方では 40 隻と云ふのだつた。London の造船業者はかゝる競争者の出現を見て歎聲を發せざるをえなかつた。

彼等の仕事は奪はれ、造船工は陸續として國外に去つて行き、利潤は減退する一方であつた。

かくて新大陸の經濟的生活は獨自の歩みを始めたので、そこに住む tradespeople の仲間も自己の勢力に対する意識が濃厚となり、参政權の要求となつた。Puritan theocracy の代表者の一人 Increase Mather (1639-1723) が 1691 年に英國に渡つて、財産上の資格による参政權の確立に反対したのが徒勞に歸したのも尤もであつた。宗教上の資格を云々しても、それは既に過去の形骸に過ぎなかつた。(Puritanism の消極的な人生觀は新しい現實に満足し、希望の生活を憧れる民衆に對して無力であつた) 罪と罰を説く牧師の聲に耳を傾ける者は漸を追ふて減少した。正統派の信仰の牙城の一つとして 1702 年に建立された Yale 大學の如きも “unholy trend of the times” を如何ともする術がなかつた。此間の事情を史家 J. T. Adams は次のやうな言葉で概括してゐる。 “In a world daily growing richer, safer and pleasanter, in which healthful labor met with a sure if moderate reward of content and prosperity, it was hard to maintain the belief that most of one's friends and neighbors were doomed to everlasting damnation.....The sense of sin tended to evaporate.....The pessimistic passivity and determinism of Calvinism, with the whole negative attitude toward life of New England Puritanism, was abandoned by many for the positive activity and optimism of a deistic conception of the universe.”—*Revolutionary New England*, p. 36.

政權はかくして middle-class の手に歸することになつた。そして次に來る世紀の四分の三の期間に於ける文明の進歩は彼等によつて左右された。煉瓦工や大工が行政司法の機關を動かし、社會の特權階級者として仰がれた

clergy の位置を奪つて了つた。さらば社會の新しい支配者は如何なる文化の所有者であつたらうか。彼等は Puritans の如く書物に對する愛を有たなかつた。新大陸の中産階級者も開拓者 (frontiersmen) もそんなものを見向きもしなかつた。彼等は一般に學問教養といふものを問題にしなかつたのである。文學史家 Charles Angoff は彼等を “the original Babbitts of America” と評してゐるが、まづ彼等にとつて人生の最大緊急事は生活の資を獲ることと、財産を積むことであつた。それ以前のものには taboo (禁制) だつたのである。Boston の無名の筆者が 1719 年に記した所は當代の代表的意見と見らるべきであらう。彼に従へば、若干の財産があつて、それから上つて來る収入を當てに懐手をしてゐる一人前の人間があつたら、それこそ許すべからざることであるのだ。穀物を育てる農夫は、人の目を娯ませるだけが能の畫家に勝つて人類に奉仕してゐる。良き家を作つて我等を雨露から救ふ大工は、人の想像に訴へる彫刻の作者よりも益する所大である。人口増加して、萬人のために必需品が具はつた後に於てのみ、 “some should be employed in innocent Arts more for ornament than Necessity.” と云ふのである。

(第十八世紀に入つてから南北諸植民地の連絡が開始されたと前に述べたが、それは多く政治的の交渉であつて、文化的には各植民地相互間に影響の見るべきものが幾何もないとされてゐる。大學の設立 (Harvard, 1636; William and Mary, 1693; Yale, 1702) が此處彼處に見られるようになつて後は、富裕なる家庭の子弟が甲の植民地から乙の植民地へ送られることもあつたが、大衆は封建時代の視野と同じく狹隘な世界に躡踏してゐた。New England の生んだ最大の神學者 Jonathan Edwards (1703-1758) の名前すら當時の Virginia に知られてゐたといふ記録がないと云ふのは、其時代

の知的活動が局限されてゐたことを最も雄辯に立證するものであらう。書物の出版の如きも、讀書の比較的盛んであつた第十七世紀中葉(1636-1670)に於てすら、當時最大の印刷所の稱ありし Cambridge press から僅か157種類を刊行したに過ぎない。そして或研究者の調査による種類別を一見すると、當代の讀書の一般的傾向が察知される。

| | |
|---------------------------------------|----|
| Almanacs | 26 |
| Books in Indian language | 19 |
| Religious books (prose)... .. | 5 |
| Religious books (verse)... .. | 5 |
| Lists of Harvard theses | 12 |
| Laws and official publications | 22 |
| School books | 3 |
| Poetry... .. | 4 |
| History, biography, etc. | 8 |

之によると所謂文學書が無視されてゐたことが知られるのであるが、1700年に Boston の書肆 Michael Perry の記帳した書冊は全部で2,504冊あり、其内75%までが宗教書類で、2%が古典、そして英文學に關するものとしては *Pilgrim's Progress* が三部と云ふみじめさである。また1723年に Harvard 大學の藏書目録が印行され、その書目の86%が宗教書であつた。(尤も此大學が教役者養成の目的で設けられたことは考慮に入れるべきであらう。)個人の藏書の内容も略同じやうな割合であつたと考へられるが、その藏書數の記録されたるものを見ると意外な感に打たれる。讀書の盛んな New England 地方で1713-1745年に於ける最大の藏書家と云はれる John Eliot は僅243冊の書物を遺して死んだ。それに比すると南方 Virginia の Dr.

Charles Brown は1738年に670冊の藏書を残して死に、Willian Byrd は1744年に4,000冊を残したなどは奇特であると評されよう。茲で興味あるは、これも Virginia の Robert Beverly が1734年に266冊の藏書の分類を記録せるものである。それによると、宗教—39; 文學—41 (*Bacon's Essays*, *Milton's Paradise Lost*, *More's Utopia*, *Pope's Poems*, *Gay's Beggar's Opera* 等を含む); 古典—63; 歴史—24; 法律—9; 文法—9; 地理—6; 辭書—12; 科學及數學—15; 舞蹈—1; 音樂—1, などあつて所謂 gentleman の教養の性質を窺はしめるに足る。

眼を轉じて journalism の發達に一瞥を與へるならば、茲でも中産階級の據頭進展と歩調を揃へてゐるのに氣づく。1690年九月二十五日木曜日に、Boston Benjamin Harris が發行した *Publick Occurrences* はまさしく一日の生命で消滅したが、Samuel Sewall の日記によれば "Sept. 25 A printed sheet entituled Publick Occurrences comes out, which gives much distaste because not Licensed....." とあり、更に一週間後には、"Print of the Governour and Council comes out shewing their disallowance of the Publick Occurrences," と記されてある。検閲制度の存在はアメリカ・ジャーナリズムを二葉で摘取つてしまつたが、その後十四年、即ち1704年四月二十日、近代的意味の新聞 *News-Letters* が Boston で創刊された。そして今度は獨立戦争に際して英吉利軍が Boston を占領するまでの七十二年と云ふ長い壽命を生きた *News-Letters* は Tory 擁護の保守的新闻であつたが、同じ系統の *Boston Gazette* が1719年に創刊され、超えて二年、1721年になつて始めて反對派の新聞である所の *New England Courant* の出現を見た。

アメリカに於ける新聞の發達を知るためには興味ある材料が多いけれど

も、茲では社會史の指標としての新聞に就て一言して満足しなければならぬ。第十八世紀の中頃までに植民地の諸地方で—— Rhode Island, New York, Pennsylvania, Maryland, Virginia, South Carolina の諸都市で多くの新聞が創刊された。それらは多く週刊で、アメリカに於ける出来事の報道は極めて不完全で、英國王室の宮廷録事、國會議事の消息、科學、文學に關する論文、エッセイが幅をきかせてゐた。大西洋横斷に五週間乃至八週間を要し植民地相互間の交通も道路わるきため天候次第で甚だ不便であつた時代にあつては、news を手に入れることの困難であつたことは想像以上であつたに違ひない。South Carolina の Charleston の火災 (1741 年冬) の如き三百戸を焼失し、損害百萬弗といふ大事件が *Boston Gazette* に報道されたのは二ヶ月後であつたと云へば他は推して知るべきであらう。

附記。本章に説くをえざりし社會、政治方面の好參考として、高木八尺氏著「米國政治史序説」を併讀されんことを希望する。

第四章 合衆國の獨立

アメリカ獨立戰爭を政治的あるひは軍事的の方面よりのみ理解する事は、とりわけアメリカ文學の研究者にとつて、多くの物足りなさを感じしめるであらう。獨立戰爭と呼ばずして、革命と云ふ時、この大なる社會的現象は始めてその意味が明瞭になる。我々はアメリカ革命を“social, economic, and intellectual transformation”と解すべきなのである。然らば斯かる變革を齎した原因と見るべきものは何か、の疑問に對して第一に答へる事が必要であり、その結果が如何なる程度にまで、諸原因に對應してゐるかをも一應は調べて見て、然る後にアメリカ革命の歴史的意味を考ふべき順序であるだらう。

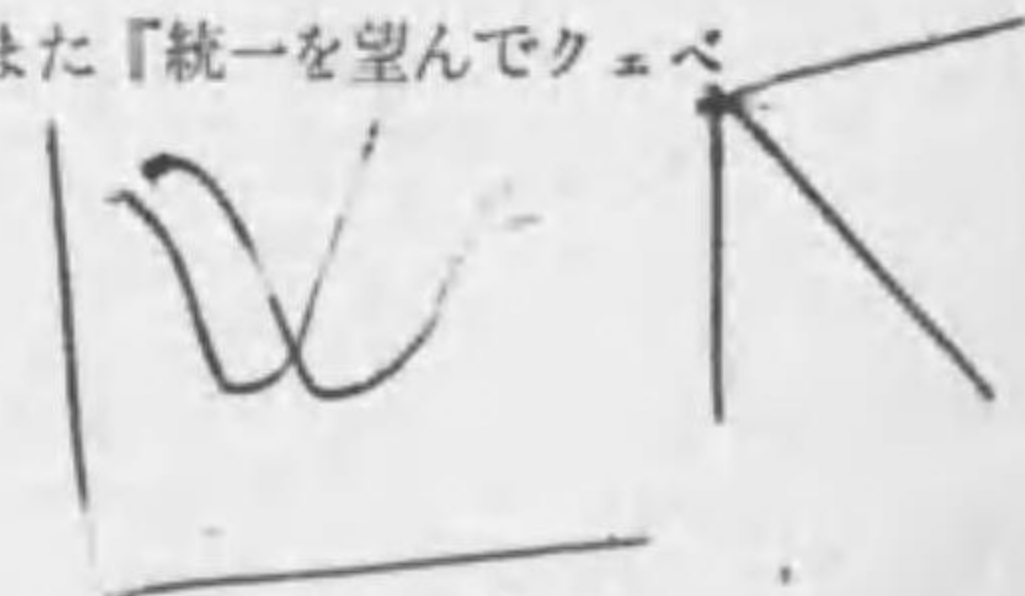
合衆國創建の元勳の一人であり、後に大統領になつた John Adams が 1818 年に、“the true history of the [American] revolution can not be recovered,”と述べたと云ふことであるが、その言葉を引用してアメリカ獨立を論ずる史家がいつも自分の仕事の困難なる所以を啣つと云ふ。やかましく論じるとなると其様な辯解が必要であるかも知れないが、茲では何事も解決してゐるかの積りになつて説明を進めなければならない。先づアメリカに於ける英吉利植民地自身の經濟生活を基調として考へるとして、各々植民地によつて事情が異なるところから、New England や New York の商人、南部諸植民地の農場主、アレガニー山脈の麓に近く土を耕す小作農等は、相互に共通でない理由からではあるが、英國の統治を喜ばなかつた。John Adams 從兄弟の Samuel Adams は當時に於ける隨一の agitator で、

彼は“Taxation without representation”と云ふスローガンを押立てて英國の主權に對する反抗の氣運を煽つた。このスローガンが何處の植民地人に對しても同じ意味を以て訴へたと云ふのではないが、それによつて各自の不平不満を表現したことは否定できなかつた。航海條例其他の法令はアメリカ植民地の同意なしに制定せられながら、彼等の生活を制限すること甚しいものがあつた。植民地との貿易に用うることを許される商船は英國で建造され、英國人の水夫の乗組めるものでなければならなかつた。植民地から移出される物貨の中、煙草、帆樁用材、テレピン、其他若干のものは英國以外の外國に市場を有つことを許されなかつた。そしてアメリカ人は英國商人の手を通してのみ商品の購入が許された。更にまた羊毛織物、帽子、鋼鐵等はアメリカで生産する事を禁じられてゐた。またアメリカ植民地には紙幣發行の權限も與へられてゐなかつた。

植民地人にとつて、かかる經濟生活上の制限が最大の不便を感じしめたことは勿論ながら、他面、彼等が政治上の權利を充分に有つてゐなかつたこと、そして英國政府の對植民地政策が甚だしく不賢明であつたこと、更に地理的事情からして本國と植民地の交通の不便なりしこと等がアメリカを英吉利から離れしめる重要な原因となつた。それに加ふるに、植民地の人口を形成する民族が多くの Scotch-Irish および German 系を含んでゐたし English の中にも奴隸同様の身分に置かれた者が千を以て數へられたのであるから、彼等の間に英吉利國王に對する忠誠の念が無かつたとしても不思議でなく、自らに植民地獨立の氣運は醸成されたわけである。

以上は極めて概括的な觀察であるが、第十八世紀中葉に於ける南北諸地方の個々の植民地に就て、觀察の範圍を局限して説明を試みるならば、次の如き諸事情の存在を指摘することが出来る。通例、史家は當時のアメリカ植民

地の實際的勢力を三つの流れに沿つて解釋する。即ち (a) 北は New England より Philadelphia あたりまでの海岸の都會に根を張れる商人の勢力、(b) Potomac 河以南、即ち Virginia, 南北 Carolina, Georgia 等の大地主の勢力、(c) 當時の開拓線 (frontier) に未來のアメリカの運命を背負つてゐる農民の勢力、これである。第一の勢力を形成する富裕な商人たちが航海條例その他によつて直接不都合を感じしめられたことは言ふまでもないが、彼れ等は内心不満を懷きつつも露骨に自ら率先して本國政府に反抗する氣概はなかつた。そして獨立戰爭の勃發と共に Boston を逃出した有名な商人が二百人もあると傳へられてゐるが、それにしても agitators が獨立運動の當初に於て彼等を利用して一般民衆の味方の如くに思はしめたことは忘れてならない事實であらう。ところで南部地方の大地主階級は彼等相當の理由から英吉利本國に對して不平を感じてゐた。彼等の大多數は贅澤な生活を維持するために London の商人から借財をして、それが積り積つて、世襲的借財にまでなつてゐたのである。アメリカ大地主の土地から上つて來る生産物の値段は英吉利商人に支配されるのであるから、彼等は借錢を返却するためには紙幣を發行することによつて之を解決するより外はない。然るに此唯一の方法は禁じられてゐるのであつてみれば、彼等とても北部地方の商人同様、本國の經濟的、政治的支配に對して何等かの手段を講じるよう、最後の決心をする必要があつた。もちろん彼等大地主は紙幣發行の他にも、アレガニーの山を超えた彼方の廣漠たる原野を開拓して、そこに新しい搾取の對象を見出しえたのであるが、これもまた英吉利本國の政策によつて出鼻を挫かれた。1774 年に制定された Quebec Act は『カナダの大州クエベック地方に佛蘭西系住民の傳統習慣に鑑み、「基督」舊教を寛容し、司法制度を特殊にし、代議制の議會を要せざる政治制度を布かう』とし、更にまた『統一を望んでクエベ



ック州の範圍を擴め、オハヨオ河の南方一帶の地迄を含み、西方ミスシッピーに及ばしめた』(高木八尺著「米國政治史序説」二一頁参照)ので、これがため Virginia の大地主は彼等の西部地方進出の機會を阻まれて了つた。かの George Washington が革命軍の指揮者たる覺悟を固めたのも此 Quebec Act の影響によると解されてゐる。一人の批評家は次の如き言葉でその法律の目的を説明する。

“Clearly it was the English intention to maintain the Ohio country as an Indian hunting ground and fur-producing region, all to the great enrichment of the Londoner and the impoverishment of the colonies.”

我々は上述の説明に於て經濟生活にあまりに重きを置きすぎたと批評を受けるかも知れない。さういふ批評に氣兼ねするのは無用であることは勿論だが、少しく觀察の方面を變へて、Puritan の精神とアメリカ革命の關係を一瞥しよう。Puritan のアメリカ移住民が經濟的動機を超越しえなかつたことは言ふまでもないが、彼等には一種の精神的な理想があり、矜持があつた。個人的生活に於ける倫理的規範の嚴正なる實踐、ならびにその社會生活への適用、それらのものに Puritan 存在の意味が最も明瞭に認められた。彼等の生活理想に照して考へるならば、英吉利本國の指導的地位にある階級の行爲は實に唾棄すべきものであつた。社會道德も個人道德も共に一樣に不都合極まるものであつた。國會の議席は黄白によつて賣買され、法案の通過も賄賂によつて左右された。英吉利富裕者の蕩盡する富は印度民族の膏血より出でたものであつた。是等の事實が “New England guardians of righteousness” の眼を欺くことは出来ない。Puritan のかくの如き倫理的批判も革命への道を準備したことは疑へない。また同じく Puritan によつて代表される Protestantism は新大陸に於ける基督舊教の勢力扶植に對して好感を

持つ筈がない。Quebec Act によつて Catholic 教會が公認されたことは Puritans にとつて大なる衝撃となつた。かくして彼等は——長老教會派、組合教會派の別なく——革命者流の味方と認められたのである。“Although the Puritans were affected by many of the same influences that were felt in various colonies, it is probably safe to say that Puritanism, because of its unique history and temperament, responded to stimuli that were felt slightly or not at all by other classes. At all events the loyalists looked upon the Presbyterian and Congregational clergymen as ardent traitors and preachers of sedition, and on the other hand Revolutionary agitators considered the ministers among their most potent assistants.” (*American Literature: As an Expression of the National Mind*, by Russell Blankenship, p. 144.)

北部地方の大商人、南部地方の大地主、是等の勢力と並んで、西部地方——と云つても今日のアメリカ合衆國の地圖に就て見れば、東部地方の西寄りの地域——に開拓者の生活を生きてゐた小作農に屬する階級層が革命の機運と如何なる關係にあつたかが、我々の次のトピックになる。前述の大商人が實行の段取りになつて躊躇したのとは異り、開拓線に在つた frontiersmen は水の低きに就く如く必然的に英吉利の支配に對する反抗を實行に移した。彼等は理論に關しては宗教家や政論家の説くに委せ North Carolina 州の Mecklenburg 郡に於ける Scotch-Irish 系の農民の如く、1774 年 10 月の Continental Congress (Georgia を除く、全植民地の代表が合同して對英策を議した所謂第一回の大衆會議) に先んずること數ヶ月の時に既に獨立宣言をなしたほどである。實際に英軍との對戦に當つて最も目覺しい活動をしたのも彼等農民であつた。そして我々が看過してならないのは、彼等が直接

には植民地の東部海岸地方の法律家や商人に操縦されてそれに不満を感じてゐたとは言へ、アメリカと英吉利の對立は democracy と aristocracy の拮抗であると解して、“vigilant and harsh English government” を打ちのめすことを最後の目的としてゐたことである。されば彼等の協力なくば決してアメリカの獨立はあれだけの期間に成功は不可能であつたらう。實に彼等の frontier に於ける生活そのものが舊世界の封建的社會の對蹠だったのである。アメリカ革命と關聯させて西部地方農民の役割とその寄與は Blankenship の言葉によつて要約されてゐる。“In short the frontier with its democratic, leveling tendencies had already fully prepared its people for a break with England when revolutionary agitation was started. The frontiersman needed no political philosophy to justify his fighting, he already understood what was meant by taxation without representation. Once in the fight the backwoodsmen rendered a great service to their cause on many a battlefield and especially in their capture of the Northwest Territory.” (上掲書 p. 147)

合衆國の獨立が、かくして、三つの大きな勢力の存在によつて實現されたことを我々は知る。その中、南部地方の大地主は封建制度の殘存物として、新しい共和國の發展に大なる寄與をなす所なく、半世紀餘の後、南北戰爭によつて潰滅に歸した。西部の未開拓地方に廣漠たる沃土を發見した。frontiersmen はその絶大なる努力にも拘らず、單なる農業者としては殆ど酬いられる所なく、ただ獨り北部の商工業者のみが資本制社會のチャンピオンとして、その後殆ど一世紀半の間、時代の寵兒たる地位を獨占し來つた。それらの事實は我々が以下順を追つて明かにせねばならぬ中心の題目である。

第五章

アメリカ・ロマンティズムの母胎

アメリカ合衆國の獨立が如何なる勢力によつて實現されたかは既に略説した。その結果は概括的に言つて、“Advance of the Common Man” と呼んで可い。“Common Man” に對するものを “Aristocracy” であるとして、同じ現象を別の角度から眺めるならば、それは “Decline of Aristocracy” であらう。だが果して aristocracy なるものが衰頹の一路を辿つたであらうか。史家 Arthur Meier Schlesinger は “The Decline of Aristocracy” と題する論文の結語に於て、aristocratic tradition が消滅せざるべき所以を説いて次の如く述べてゐる。“New conditions and altered circumstances of society have, in the past, rendered possible the creation of new privileges and pretensions for those who were energetic and alert.” (*New Viewpoints in American History*, p. 100) つまり歴史の教へる所に従へば、新しい社會の情勢に應じて、特殊な天稟を具へた人間が新しい特權を獲得した。換言すれば彼等が各々の社會の aristocracy を形成したと、云ふのである。だが過去に於て然うであつたからとて將來に於ても同じ事が起らねばならぬとは斷定できない。社會の根本組織が不變のものであると云ふ公理が成立せざる以上は、Schlesinger 教授が “In the shortcomings of democratic society therefore, lies the hope of the future for the perpetuation of the aristocratic tradition in America” (民主的社會の缺陷の中にこそ、されば、未來に於てアメリカの

貴族的傳統が引繼がれてゆく希望が存してゐる)と述べても、それを文字通りに信じるわけにゆかぬ。Aristocracy の意味を少数の特権者流と限つて解し、それを不朽化せんとする考へ方は我々の排せねばならぬものである。併しながら、過去の歴史に現れたる所を見ると、アメリカに於ける獨立戰爭の結果として、社會の實權を握る地位を擁するに到つたブルジョア階級は、過ぎ去つた世紀の封建貴族の持つてゐる特權を受け継ぎ、衣裳外貌こそ異れ、たしかに新しい時代の貴族階級を形造つた。

(アメリカ合衆國はその成立の動機に於てブルジョア的であり、従つてその發達の經路に於ても近代歐羅巴諸國家の經て來た所とその揆を一にしてゐることは當然である)。(アメリカに於ける中産階級が社會的指導權を握るに到る迄には若干の時間を必要とした。第一にそれは土地と農民を搾取の對象としてゐる封建的勢力と對抗しつつ、新しい産業制度確立のために努力しなければならなかつた。その謂はば擡頭期に當る半世紀乃至二世代の期間を、アメリカ・ロマンティシズムの時代と呼ぶことが出来る。正確に年代を擧げるとは遠慮されるが、ほぼ第一九世紀前半、南北戰爭までとして可いであらう。尤も獨立宣言を發した 1776 年、George Washington が最初の大統領に就任した 1789 年等の年代も考慮に入れるとすれば、此期間を過去に延長して、二世代を三世代としてもあながち反對するには及ばない。だが、若しそのやうに期間を擴げる場合には、それを前後二期に小區分し、1812-14 年の對英吉利戰爭を以て兩者の境界にするのが便宜である。それは此の戰爭の年あたりを境として、アメリカにも産業革命の影響が直接的になり、製造工業が起つて來たからである。Vernon Louis Parrington の解釋によれば、"The half century that lay between these dramatic episodes [i.e., the War of 1812 and the Civil War] was a period of extravagant youth, given over

to a cult of romanticism that wrought as many marvels as Aaron's rod." *The Romantic Revolution in America*, Introduction. (1812年の對英戰爭と南北戰爭といふ二つの劇的な挿話の中間に横はる半世紀は、のほろづな青年期であつて、エアロンの杖にも劣らず数々の不思議を行つたところのロマンティシズム崇拜に耽つた)のである。そして南部地方、ニュー・イングランド地方、また西部の邊疆地方に於て、それは第十八世紀の收穫の殘骸を消盡し、用心深かりし前時代のもつさりしたリアリズムを掃蕩し、その代りに蠱惑的な理想を與へて人心を收攬した。大小の變革が相踵いで起つた。何でもない投機事が思はぬ前人未踏の路を拓くのだつた。かくてそれが準備を整へつつあつたところの最後の成果は、新しい中産階級の出現であつて、續く半世紀に於て此の階級は全アメリカをその目的に従屬せしめたのである。(Parrington 上掲書・Introduction 参照)

*Aaron's rod 舊約聖書埃及記第七章以下數章によると、アムラムの子エアロン(彼はモーゼの兄)が埃及王にエホバ神の奇蹟を行ふに當つて、その持てる杖を蛇に化し、或は河や池の上にその杖を伸ばす時はすべて水が血となり、また蛙、蟻を出して埃及人を苦しめて反省を促した由が傳へられてゐる。

アメリカ史に於て經濟的要素を高調することは、マルクス主義の適用を俟つまでもなく、アメリカ憲法の生みの親と呼ばれる James Madison の言説に於て早くも見出されるのである。Schlesinger 教授の引用によると、Madison は 1787-88 年に書いた *Federalist Papers* の中で、人間が常に宗教的信仰、政治的見解の相異に基いて黨派の別を生じる事實を指摘してゐるが、彼はそれらのものよりも一層重要な契機が經濟的利害に存してゐると主張するのである。黨派の分れる原因として最も一般的であり、また最も永続的であるのは、不均衡な財産の分配といふことである。有産者と無産者は常に別箇の利害關係を有つて來た。債權者と債務者も同様に區別を立てられる。又地主、製

造家、商業者、金権者、その外諸他の利害關係は文明諸國に於て必然的に生じ、彼等はそれぞれの階級を形成して、異なる見解情操を抱懐するのである。("But the most common and durable source of factions has been the various and unequal distribution of property. Those who are creditors, and those who are debtors, fall under a like discrimination. A landed interest, a manufacturing interest, a mercantile interest, a moneyed interest, with many lesser interests, grow out of necessity in civilized nations, and divide them into different classes, actuated by different sentiments and views." Quoted in A. M. Schlesinger: *New Viewpoints in American History*, p. 48; also, V. L. Parrington: *The Colonial Mind*, p. 287.)

Madison は如上の觀察を基礎として、それらの對立する利害の調和を必要なりとし、「共和的」(republican) と民主的 (democratic) といふ二つの指導精神を批評したのである。併し我々はその何れを正しいと断定するよりも、對立の事實を認めることを當面の務とする。そこで所謂「共和派」と「民主派」と呼ばれる政治的主張の根柢にあるものの一瞥を與へなければならぬ。合衆國獨立後半世紀以上の期間に於ける政黨の發達を述べる餘裕はないが、始め Federalists の名で知られ、次で Whig party の大部分を形成してゐた National Republicans は今日の Republicans であつて、之に對立するのが始め Repulicans と呼ばれた Democratic Republicans, 即ち今日の Democrats であつた。そして概して言へば、前者は北部地方の商工業者の、後者は南部の地主、農民の利益を代表したと見られる。尤も彼等の主張なり背景なりを理解するためには少しく説明を必要とするであらう。

前に述べべくして觸れる機會を失した一つの重要な事實は、獨立宣言書に

現はれたる思想と、合衆國憲法に現れたる思想の相異である。「宣言」はフランス・ロマンティシズムの社會的・平等同權主義に影響されてゐるが、「憲法」は反駁の餘地なき財産支配の事實に基いて、新興イギリス中産階級の理想を標榜する政治的リアリスト達によつて書かれた。是等の重要な文獻の中にアメリカの現實を読み取ることは必ずしも困難でなく、前者の中に南部地方の利害、後者の中に北部地方の利害の表明を認めうるのである。前述の Federalists は即ち憲法制定に躍起になつた連中で、當時のアメリカ人口の大多数が農民であつたため、彼等は多勢に無勢の苦しい戦ひを戦はなければならなかつた。彼等は national credit の設定、財産と契約の保全、商業と製造業の保護を要求し、強力なる聯邦中央政府と兵力の必要を主張した。そして政治的権能は少數の有能者あるひは門閥の手に歸すべきものと説いたのである。彼等が英國の意を迎へ、フランスには背を向けようとしたことは、フランスに於ける恐怖時代の出現による社會的不安に恐れをなしたのに外ならない。

それに対して Jeffersonian Republicans (即ち Democrats) は別の立場から對抗した。Jefferson は獨立宣言の事實上の起草者として、アメリカ自由主義の開祖として敬重されてゐるが、彼とその一黨は地主農民の利益の代辯者であつた。好適なる耕作地に恵まれ、生活の安定をえてゐる農民や地主にとつて強力なる政府の必要は痛感されない。北方の代表者 Hamilton の提唱する國立銀行、關稅制度、等の財務再組織は個人の利害に餘計な世話をやくものとし考へられない。Democrats の眼から見ると、政府の當路者たる Federalists——初代の大統領 Washington も次代の John Adams も Federalists であつた——は少數者の利益のためにのみ圖つてゐる。それに抗するために、彼等は democracy——多數者の意思による政治を聲高

く叫んだ。彼等は農民以外にもその後援者を見出さうと努めた。當時未だ大きな勢力にはなつてゐなかつたけれども、都市に於ける労働者をも Democrats は味方に入れたのである。Federalists と對照させて考へる時、十九世紀の三十年代まで Democrats は "poorer and less fortunate classes of society" の利害を代表してゐたと概説して可いであらう。

アメリカ・ロマンティシズムの全貌を描くことは容易でない。Russell Blankenship の *American Literature: As an Expression of the National Mind* は新しい研究方法による教科書として注目すべきものであるが、その一つの章 "American Romanticism" に擧げてある項目は次の如く多岐である。—What is Romanticism? Jean Jacques Rousseau: Romanticism and the Status of the Individual: Romantic Optimism; The Reform Movement; Romanticism and the Humble Life; The Romantic Concept of Nature; The Romantic Appeal to Imagination and Feelings; Romantic Literary Forms; Geography of Romanticism. そして同じ著者は "The fundamental premises of romanticism were so congenial to the American environment and temper, and the immediate results so harmonized with certain other forces already in this country, notably Jeffersonian democracy and the frontier spirit, that the movement spread rapidly to all parts of America and held on tenaciously even after its main ideas became hopelessly old-fashioned." [ロマンティシズム] の基本的な諸前提はアメリカの環境およびアメリカ人の氣質にしつくり合つてゐたし、またその直接の成果は前から此國土に存した若干の他の勢力——とりわけジェファソンの民主主義とフランティア精神——と極め

てよく調和してゐるので、此 [ロマンティシズム] の運動は急速にアメリカの隅々に迄押擴がり、その主要な諸觀念が取上げえられないほど時代遅れになつた後までも、しつこく持續された) と言つてゐる。ところで Blankenship は此 passage に於て中産階級の擡頭に就て露骨には言及してゐず "American environment and temper" と抽象的に指摘してゐる點で不十分な表現を用ゐてゐると批評せねばならないが、"The frontier spirit" と云ふ語によつて一つの大なる社會的勢力の存在を言ひ現し、我々の概説を別の方面から注意する必要を氣附かせてくれる。だが Frontier の西部地方への進出と獨立戰爭に際してその寄與に關しては前章で觸れたから茲に再説するまでもなからう。今はただ、Jeffersonian Democracy に對して、frontiersmen の經濟的利害から發生した Jacksonian Democracy が十九世紀の二十年後半に到つて斷然勢力を増し來つた事實を記して置く。Andrew Jackson が、アメリカ大陸の自然界と戦ひ、先住民族 Red Indians を驅逐して、今日の合衆國の隆昌を齎した開拓者たちの荒くれた手によつて大統領の椅子に推し上げられた 1829 年は、Virginia の名門から出た大統領 Jefferson の歿した 1826 年と結びつけて考へる時、アメリカの社會的勢力が如何に地理的背景と緊密に關係してゐるかを知らる便利がある。

中産階級の資本主義的精神が frontier (開拓線) の西漸につれて愈々刺戟され、そしてアメリカ・ロマンティシズムの發生を見たのであることは贅言するまでもない。だが、その現象を單に文學的なるものに限らず、更に廣い展望を以て理解することは、やがて英吉利その他の國々の文學と社會的背景を有機的連關の下に考察する場合にも大なる参考になると思はれるので、此問題を Parrington の所説に準據して説くことにしよう。

新しい未開拓の経済的領域に直面しては、如何なる鈍物と雖もユートピアの創造に乗出さんとする刺戟を感じる。静的状態の崩壊、新しい世界への大膽なる進出、その中にこそロマンスの繁茂するに最も適せる肥沃なる土壤が準備されてゐると言つてよい。實に第二對イギリス戦争に續く時代にアメリカを襲つた急速多様な変化の中にこそ、質實素朴な過去を足跡にかけたロマンティシズムは煮えたぎつてゐたのである。それは経済や政治の領域に於ても、神學や文學の分野に於ても同じやうに顯示された。突忽としてアメリカは、嘗て夢想だにしなかつた可能性を具へた新しい世界に轉化した。此の新しいアメリカは用心深い前の世代の狹陋な生活様式では我慢がならなかつたのである。植民地時代の古いアメリカは靜止的で、合理主義的で悲觀に傾き、刷新改革に對して虞れを抱き、ひたすら因習に膠着してゐた。人間の本性を惡なりとし、すべて人類を教ふべからざる邪曲の徒と解し、従つて輝き未來にユートピアを夢みる自由はなかつた。日常生活は狭小なる家族經濟の埒内に局限され、社會的身分も殆ど變化する機會がなかつた。人口は専ら自然増加に俟ち、自然の開發利用には多大の勞力を必要とした。富の蓄積は店商ひや野良仕事、漁撈や海運によつてなされた。農業本位の地味な考方に支配されてゐた古いアメリカは、原始的な自給自足に頼つて、投機思惑と云ふが如き捷徑を求めて富を獲得することをせず、習慣を墨守して變化を疑懼した。

かくの如き古きアメリカはパリ講和(1783年)から1812-14年の對イギリス戦争に到る三十餘年の期間に衰亡への道を辿りつつあつた。これに續く時代のアメリカは變轉極りなき、流動の世界で、青年らしい樂觀を懷き、向上の熱望に燃えてゐた。富を獲得するのにも地道(きん)な自然的増收に俟たず、濡手で粟的方法に就かんとした。此新しいアメリカは、人間の獲得本能を基本道徳に數へ、大陸の未開拓の自然的富源をあさり求めるのに躍起であつ

た。前世代に用ゐられた石橋を叩いて渡る式の方法は去年の曆同然と考へられた。幾つも新しい共同社會が曠野のただ中に興りつつあつた。戦亂に疲弊した歐羅巴からは移住民が押寄せて來た。荒蕪の地が日毎に土地投機の對象として市場に現れた。投機によつて金儲けが出来た。開拓地の擴大するにつれて投機も倍加して行つたのである。靜止的な社會の理想は片づけられて「進歩」が自然の第一法則と認められ、改革刷新こそ進歩の表徴であるとして歓迎された。かゝる母胎からロマンスの精神は發生した。

合衆國の主要な三つの地方はそれぞれ異なる仕方に於て新しい時代を迎へた。大西洋岸の北部諸州は、北は Maine から南は Pennsylvania に到るまで、産業資本主義秩序にユートピアを發見した。工場へ雲集する移住民と共に都市の異常なる膨脹、および中央集權の運動が開始された。その結果としてアメリカは田園本位の社會から都市中心の社會に變容した。そして business man が farmer に取つて代り従來の傳統的心理は崩解して行つたのである。此の新しい産業主義が南部地方に與へた反作用は忽ちのうちに現れた。纖維工業に於ける改良につれて、舊來の藍、米、煙草の如き作物に加ふるに、棉花に基礎を置くユートピアに對する期待が増大した。白い綿と黒い奴隸の耕地を擴張して、メキシコを抱擁し、西印度諸島にまで手を伸ばさうとする侵略的な夢は此時期になつて強く甦まれたのである。しかるに、アレガニーの山の彼方の奥地に於ては、北部地方の資本主義、南部地方の奴隸制度に根ざす帝國主義を容認しない一つの經濟が生起しつつあつた。それは平等主義的、地方分權主義的で、「獨立宣言書」の理想によつて育成されはしたが、その理想は新しく解釋された——自由市民各個は自分の技倆一つで自然の富源を開發利用し、以て各々の獲得本能を満足せしめる天賦の權能を保有する、と云ふのである。なるほど、それは表面上は民主的であるとも云へるけれど

も、その氣魄と目的に於ては中産階級的であつた。ミシシッピ河流域の廣漠たる地方——それを“Valley of Democracy”と呼んだ作家がある——にはアメリカ人の心を訪れた夢のうちで最もロマンティックなものが包蔵されてゐた。それはフランスの批評家 de Toqueville の胸に深き感銘を印した所のものである。彼はアメリカの詩を、進み動く開拓線のロマンスの中に見た。涯しなき曠野を伐り拓いて西へ西へとひた押しに進む開拓者のかぎりなく燃えさかる野望と夢想の中に、彼ド・トクヴィユはアメリカの詩を発見した。(Parrington *Romantic Revolution in America*, pp. iv-vi 参照)

かゝる急速な膨脹、かゝる高まりゆくロマンティシズムの氣分は、不可避免的に、新しき希望抱負を盛るに適應せる哲學を準備する。十九世紀は、十八世紀風の狹隘なる語法に満足できず、その思想をロマンティックな様式に適合するように鑄直さざるをえない。それが受用したところの様式の大部分は歐羅巴に起源を有するものであるが、之を新世界の必要に應じて援用した。フランスから、イギリスから、そして後にドイツから、様々な面貌を具へたロマンティシズムの理論が齎らされた。しかもそれは何れも究竟に於て個人主義の理想を讃美したものである。この面貌の多様性は異なる階級、異なる利害關係にそれぞれ別箇に訴へる可能性を有つてゐた。我々はその最も顯著な實例として Emerson の超絶主義哲學を擧げることが出来るが、それらの細説は別の機會に譲るより外はない。

第六章

アメリカ南部諸州の精神

例によつて Parrington 教授の言葉を引用して我々の考察を始める。——“To those who follow the main-traveled road of American experience, as we know it to-day, the mind of the old South seems curiously remote. It is so archaic, so wholly apart from all present day ambitions, as to appear singular.” (V. L. Parrington: *The Romantic Revolution in America*, p. 3.)——アメリカ的經驗の主要なる進路を今日われわれが跡づけんとする時、その昔の南部地方の精神は不思議なまでに距離があるやうに思はれる。それは餘りにも時代離れがしてゐて、現代的霸氣から全く遠ざかつてゐるので、奇異に感じられると云ふのである。けれども今日のアメリカが進みつつある道程は、幾世代か昔のアメリカの歩んだ大道とは別のものであるのだ。變化を見たのは北部地方なのであつて、南部諸州ではなかつた。ありし日の Old Dominion (南部地方の稱呼) を指導した諸理想を標準とするならば、現代のアメリカ國民性はげにも惱ましき心勞の原因となるのである。今日では南部の精神は古めかしくなつて了つてゐるが、それは主著のものであり、長年の名譽ある家系を誇りうるものである。ただその特異性は第十八世紀から發生したのみならず、アメリカに於て第十八世紀なるものが夙に時代遅れとなり了つた後までも、長くその起原の明瞭な印刻を留めたのであつた。それは何よりも政治的傾向を帯びてゐて、イギリス派と言ふよりもフランス學派の系統を引いてゐた。同時にそれは經濟學の方面をも

無視したのではなかつた。茲では Adam Smith (1723-1790) に負ふよりも François Quesnay (1694-1774) Du Pont de Nemours (1739-1817) の思想を継承してゐた。農園本位の社會の必要と氣質に適合せる所のフィジオクラットの農本主義の方向に偏向してゐたことは明白である。この政治的農本主義がその見透しに於て、全國民的であるよりも地方的であると云ふことは、後の工業化されたアメリカに對して、南部の精神の特異性を説明するに充分であると考へられる。

以上の如き概観を補ふために、われわれは南部諸州の地理的環境と經濟生活の交渉を瞥見し、進んでそこに住む人々の生活理想の諸様相を解剖しなければならないのである。氣候と土壤の好都合なる結びつきによつて、南部諸州が農業地方として、合衆國の他の地方と比較を超えて豊饒な收穫を見たことは常に語られる所である。肥沃な土質に加ふるに、温帯と亞熱帯に屬する廣漠たる地域の故に、而して雨量の多きために、煙草、棉花、米、砂糖等の主要農産物は到る處に生育した。その生産に必要な勞働力は黒人奴隸の使用によつて補はれたが、奴隸の輸入が重大なる文化的意味を將來したことに就ては章を改めて説かねばならぬものがある。しかも茲にその奴隸人口の統制、奴隸制度の維持擴大のために必要とされた政治行動、等の問題が南方人の注意を獨占してゐたことを指摘して置くことも無意味ではない。ところで、南部の海岸地方に於ては、早くより農業が企業として發達した。大地主が彼處にも此處にも出現して、組織的に支配したのである。植民時代の初期から Virginia 州 (1608 年植民) に於ても、南北 Carolina 州 (1628, 1663 年植民) に於ても、また Georgia 州 (1728 年植民) に於ても、農業は立派に利益を擧げてゐた。利益のあがるにつれて農場主は土地を買ひひろげ、奴隸を増加した。かゝる手順が繰返されて行く間に、大地主は次第に封建的な支配者

の身分を獲得して、その家族は gentry の階級を、その使用人と奴隸は別の階級を形造つてしまつた。そして中・小の自作農は地主からも奴隸からも別箇の存在として生活したが彼等は自らの地位が何れの側からも敬意を以て迎へられぬのを知り、所有の土地を手離して、漸次海岸から遠い地方、丘原の地方——そこは Piedmont と呼ばれた——へと移つて行つた。是等の農民層は開拓者を形成した者で、大地主階級を嫉視しながら、未來のアメリカの支配者たらんことを夢想したのである。その夢は南北戦争以前には著しい進出の機会がなかつたので、われわれが今考察しつつある時代には、希臘的民主主義の實行を急務とした海岸地方の大地主の勢力を主として對象としなければならない。

南北戦争以前に於ける、換言すれば 1800 年から 1860 年までの期間に於て、アメリカ南部地方の中心勢力は始め Virginia に存し、後に到つて South Carolina に移つたとされてゐる。Virginia の思想的傳統は Thomas Jefferson に發してゐるのであつて、社會の福祉に對する献身的努力、民衆の信頼に對する絶対的忠實、個人的自由の愛護、および包容的な人道主義、これらのものがその理想であつた。これが政治に現れては自由主義の形を取り、農本社會の現實の要求に適合せしめられたのである。その指導的地位にある人物の聲譽は、北部地方の代表的道德家 William Ellery Channing (1780-1842) の稱揚によつて裏書きされたほどである。Channing は 1798 年に Harvard 大學を卒業してから、二年足らずの歳月を Richmond の名家に家庭教師として滞留したことがあるが、彼は直接の見聞によつて "Virginia culture, tolerance, and good breeding" から感化を受けざるをえなかつた。此の Virginia 文華の昌えた時期は 1800-1830 年で、奴隸とその主人の間の温情主義的關係、高度の教養を可能ならしめる閑暇、それらの

ものは農園の生活を理想化して眺めしめるに充分であつた。當時の状態は牧歌的に取扱はれて、幾多の文藝作品となつてゐる。その中で最も有名なるはJohn Pendleton Kennedy (1795-1870) の *Swallow Barn* (1832) であらう。一人の文學史家はかゝる文學一般に就て次のやうに述べてゐる。"Idyllic, it seemed when viewed from the dark days after the Civil War. Virginia contributed of its very best when it gave to American literature a picture of its plantation life and its controlling spirit, the Virginian gentleman. That both were later idealized was only to have been expected; idealization is the prerogative of romanticism." (Russell Blankenship: *American Literature*, p. 209.)

然るに南部諸州の奴隷經濟の急速な發展と、北部諸州に等しく急速に進展しつつあつた産業主義の夾撃にあつて、紳士的なジェファソン流の農本自由主義は殆ど新しい問題に対する解決策を提示しえなかつた。ジェファソンの思想の中の或もの、例へば、state's rights 説(州政府の權力を聯邦中央政府の權力に對して對等なりとする意見)は South Carolina 州の指導者の採用するものであつたけれども、かの獨立宣言書に表明された抽象的な理想論は排斥されたのであつた。そして所謂 Jeffersonian democracy に代置される思想が、Greek Democracy の名の下に、1830-1860 年の期間に南部地方の思想傾向を代表した。それは古代希臘の黄金時代を出現せしめた所の、少數自由民を頂き、その下に中産階級と奴隷の多數を保持する社會組織を典型とするものである。1830 年以降に於て南部の奴隷制度は、農業の進展と共に迅速に西進する開拓線に従つて、Texas に到るまでのメキシコ灣を抱く諸州に布かれた。農業が "big business" となつたのである。少數者の手に握られた資本、奴隷労働搾取の必然、かうした現實は希臘的民主主義

の名を藉る貴族主義を提唱せしめずには措かなかつた。南カロライナ州の代表的政治家 John C. Calhoun (1782-1850) は寡頭政治の永續化を計らんがために states' rights を主張した。しかもその見解が Jefferson によつて主張された時、それは主として中・小地主の自主權擁護を目標としたのである。キャルフーン一派の説く所に從へば、社會存立の目的は多數者の權利を確立するに非ずして、少數者の優越的地位を維持せしめ下層の階級を可避的な邪曲から解放するにある。而して労働の搾取は可避的でなく不可避的なものであるから、之を如何することもいらないのである。

かゝる南部諸州に於ける指導精神の推移と、その繼承に就て、Parrington 教授は次の言葉に於て巧みに要約してゐる。—"Simple and homogeneous in the early years of the nineteenth century, it [political agrarianism] nevertheless carried the seeds of disruption within it. Beneath the surface of this common political agrarianism disintegrating forces were at work, that were to produce broad cleavages of thought and lead to sharp differences of outlook and polity. An old South and a new South dwelt side by side, and to the West lay a frontier that took particular form as it came under the determining influence of one or the other. Virginia and South Carolina were the germinal centers of southern culture, from which issued the creative ideas that gave special forms to the brood of frontier states. Kentucky and Tennessee were the intellectual heirs of Virginia; Alabama and Mississippi were the intellectual heirs of South Carolina." (上掲書pp. 3-4.) これの大意を譯せば次のやうである「第十九世紀の初頭に於て、單純で同質的でありながらも、それ「政治的農本主義」はその内部に分裂の素因

を包蔵してゐた。表面では此の政治的農本主義が共通であつたけれども、その下には分解的な諸力が働いてゐて、そのために廣い思想的裂目を生じ、やがてその見通し及び政體に鋭い差異を設けしめるに到つたのである。古い南部と新しい南部とが並存し、その西方に當つては一つの開拓線が横はり、それは甲もしくは乙の決定的影響の下に、特殊な形態を取つた。ヴァージニアと南カロライナとが南部の文化の萌芽的中心地で、是等から發した創造的諸觀念が開拓線上にある同腹の諸州に獨特な形態を與へたのである。即ちケンタッキー州とテネシー州とはヴァージニアの知的繼承者であり、アラバマ州及びミシシッピ州は南カロライナの知的後繼者となつた。』

續いてわれわれは知的指導者そのものの系統を知つて置かなければならない。これは次の章で述べる南北戦争に際しての思想的對立に關聯する重要な契機を含んでゐるのである。上の引用に直ぐ續けて Parrington は述べてゐる。"Of these two schools of thought that looked in different directions and sought different ends, Jefferson and Calhoun were the intellectual leaders; and the contrasts in their philosophies—the rejection by the latter of equalitarian idealism, and the substitution of economic realism—mark the diverse tendencies which in the end disrupted the South. Jackson and Lincoln were followers of the Jeffersonian school; Jefferson Davis finally went with Calhoun; and Henry Clay, lacking an adequate philosophy, wavered between them. The differences between these men were open and patent, and any analysis of the mind of the South, any attempt to understand the conflict of tendencies that marked the development of southern thought between 1800 and 1860, must give due weight to such

differences. The problem, therefore, instead of being single is threefold, and involves an examination of the mind of Virginia, the mind of South Carolina, and the mind of the new West from the Ohio River to the Gulf—是等二つの思想系統は異なる方向を目指し、異なる目的を追求したが、ジェファソンとキヤルフーンがそれぞれの知的指導者であつた。そして彼等の哲學に於ける對照は後者〔キヤルフーン〕による〔ジェファソン〕の平等主義的理想論の否定、ならびに經濟的現實論の代置〔主張〕を通して、遂に南部諸州を分裂せしめた所の多様の傾向を表明してゐる。ジャクソン [Andrew Jackson, 1767-1845; テネシー州生れで合衆國第七代の大統領、在職期間 1829-37] とリンカン [Abraham Lincoln, 1809-1865; ケンタッキーに生れ、イリノイ州で育つた、第十六代大統領、在職期間 1861-65] はジェファソン説の追隨者であつた。ジェファソン・ディヴィス [1808-89; ミシシッピ州に生れ南北戦争に際して南部諸州聯盟 Confederacy の大統領] は結局に於てキヤルフーン説に同じだ。ヘンリ・クレイ [1777-1852; ケンタッキー生れの政治家、雄辯を以て知らる] は哲學らしきものを有たず、以上の兩者の中間を動搖した。是等の人々の相異點は明々白々であつて、苟しくも南部精神の分析、即ち1800年より1860年に到る南部の思想の發展を特徴づけた諸傾向の確執の理解、を旨とする者は必ずやかゝる相異點に然るべき較量を與へざるをえないのである。従つて、此の問題は單純でなく、三つの方面を有つ、即ちヴァージニア精神、南カロライナ精神、及びオハイオ河からメキシコ灣に到る新興西部地方精神の検討を包含してゐるのである。

勿論われわれは今、この三重の内容を有つ問題を論じ盡すことは出来ない。しかし、前に Virginia の文化に就て言及した關係から、それと均衡を取るために、South Carolina の文化の中心地 Charleston に關する記述を省略す

ることは許されないであらう。Charleston の開市はRichmond に遅れること半世紀以上であつた。即ち 1680 年に今日の都市の基礎が成つたのである、そこは農園地方に於ける社交と歡樂——競馬、酒宴、舞踏の中核を形造つた。毎年、冬になると田紳連が此都市に集つて来た。しかも Charleston はアメリカ全土で最も英國的雰圍氣が濃厚であつた。1825 年にその人口は白人一萬四千、黒人はそれ以上を數へた。そして白人の血の中にはフランスのユグノオのそれが多くの割合を占めてゐるとは言へ、Parrington の評語を以てすれば、Dr. Johnson が 1780 年のロンドン・フリイト街から 1825 年のチャールズトンに足を踏み入れたとしても、恐らく almost at home に感じたであらう。英國々教會と法律家がそこでは幅を利かした。政治的には保守思想がのさばつた。文藝の方面でロマンティシズムの勢力が擡頭したのは 1830 年代以後で、恰も New England に於ける文藝思想の黄金時代出現と並行した。それまでのチャールズトンでは英吉利から輸入された革表紙の書物が珍重され、Addison のエッセイとか Pope ばりの heroic couplet に教養の標準があつた。その後、若い知識階級の間には、Tom Moore, Ossian, Mrs. Radcliffe 等につづいて、Byron と Scott が最も人氣があつた。併し Burns, Wordsworth, Shelley, Keats, あるひは Carlyle は疎外された。それによつても好尚が貴族的なるものに偏してゐたことは窺はれる。

かゝる狀勢の下に於て、Hugh Swinton Legaré (1789-1843) は Boston の *North American Review* (1815 年創刊) の例に倣つて、1828 年に *Southern Review* を創刊したが、四年後にラグリー自身渡歐するや、後繼者なく廢刊された。彼を以てチャールズトンの intellectuals の代表者とすれば、作家の代表とすべきは William Gilmore Simms (1806-1870) であらう。彼の著作は八十種に上り、その中、小説物語の類は三十五種、その他は詩集、詩

劇、歴史、傳記、雜文である。併し彼の名聲は小説に集中してゐるらしく、就中獨立戰爭を扱つた *The Partisans, Woodcraft*, またアメリカ土人 Yamacsee 族の對白人の戰爭に取材した *The Yamacsee* (1835) は有名である。殊に後者は多くの批評家によつてシムズの傑作と認められ、それがために彼を *The Last of the Mohicans* の著者 James Fenimore Cooper と比肩せしめてゐる。

第七章

ニグロ貿易と奴隷制度

アメリカの劇作家 Eugene O'Neill の名篇 *The Emperor Jones* の第六場で、主人公の黒人 Brutus Jones は西印度の島で密林に道を迷ひ、樹間を洩れて射す月光に幻想をえて、宛も大洋を航する船中にある感じになる。Jones が森の中の空地に来ると、地上五呎ほどの高さで樹々の梢が左右から絡みあひ、幹にまつはる蔓草がアーチ型に低い天井を形成してゐる。かうして取りかこまれた空地はさながら古風な船の、臭い、眞暗な部屋である。そこで、ぼろぼろに破れたズボンを穿いた Jones は疲労のあまり身を投げだし、顔を地面に伏せてしまふ。それまでは眞暗だつた空地がどことなく明るくなる。そして Jones の後ろに、人影が二列に並んでゐるのが見えて来る。"They are sitting in crumpled, despairing attitudes, hunched, facing one another with their backs touching the forest walls as if they were shackled to them. All are negroes, naked save for loin cloths. At first they are silent and motionless. Then they begin to sway slowly forward toward each and back again in unison, as if they were laxly letting themselves follow the long roll of a ship at sea." (彼等は押潰されて絶望しきつた様子で、背を曲げ、互に向ひ合ひ、背中は壁のやうに立つ森に觸れて恰も緊縛されてでもゐるやうだ。いずれも皆黒人で、裸身に腰布を纏へるのみ。初め彼等は無言で、身動きせずゐる。やがて緩漫に各個人が前方に身體を伸し、また一齊に後方へ揺り返す。さながら大き

く横揺れする海上の船の動揺に力なく身を委せてゐる貌である。) この記述は、併し、奴隷船の惨酷な光景を寫す目的で書かれたのではないから、我々が語らうとするニグロ貿易の一面を傳へるには不充分である。The American Empire の著者 Scott Nearing の援用してゐる J. R. Spears の調査によると、アフリカから攫はれて來た黒人が大西洋上を運ばれる時、"They were squeezed so tightly together that the average space allowed to each one was but 16 inches by five and a half feet." と云ふ窮屈な状態に置かれたのである。また、"Where the 'tween decks space was two feet high or more, the slaves were stowed sitting up in rows, one crowded into the lap of another, and with legs on legs, like rider on a crowded toboggan." とも記されてゐる。此様な状態で數週間はおろか數ヶ月の間、荒海の上を航さなければならないのだつたが、暴風雨の時には船口蓋や隙間をすべて密閉して了ふので汚物は流したなりで、排け口はなかつた。奴隷船の悪臭が風下五哩の處から識別できたと言はれてゐるのも不思議はないであらう。

だが、何のための奴隷貿易かと言へば、勿論ニグロ自身の利益のためではない。白人商人と白人地主の利益のためであつた。新大陸に於ける労働の不足が根本の原因で、和蘭や英吉利の利にさとい商人達がニグロ貿易を始めた。その非人道的な商賣の隆昌を極めたのは第十八世紀中葉以後であるが、西班牙植民地には 1510 年既にニグロ労働者が現れ、1517 年に Charles V は和蘭人に奴隷貿易の獨占權を許したと傳へられてゐるし、英吉利植民地に就て見ても、1619 年に Virginia の Jamestown に寄港した和蘭商船が二十人の黒人を賣つたのが最初とされてゐる。英吉利植民地では始め白人労働者の補充として一時的にニグロを使用したので、その數の増加も著しくはなかつ

た。1681 年の調査によれば、Virginia に於てさへ白人使役人六千人に對し、黒人奴隷は二千人を數へたのみであつた。第十七世紀の末 (1698 年) までこれらの奴隷は Royal African Company of England が一手に賣込んでゐたのであるが、爾後その獨占權が失はれて、アメリカ人の奴隷貿易商人も英吉利商人と共に此の利潤多き仕事に加つた。第十八世紀の初頭には毎年三萬人の奴隷が彼等の手によつて新大陸に運ばれたと云ふ。尤もその中相當の數が西班牙植民地へ向けられた。奴隷貿易に従事したアメリカ人は全て北部の New England の商人で、第十八世紀の末年に於て、奴隷船一隻の建造費は三萬五千弗で、一航海に純益三萬弗乃至十萬弗に上つた。そして船の壽命は五航海まで堪へた。アメリカ植民地、後に合衆國へ輸入されたニグロの數を決定することは困難であるが、國內の奴隷人口は大凡次の如くであつたと算定されてゐる。——1760 年—三十萬人。1790 年—七十萬人。1800 年—九十萬人。1820 年—百五十萬人。1840 年—二百五十萬人。1860 年—四百萬人。また奴隷一人の價は第十八世紀末には二百弗であつたのが漸次高値を呼んで七百弗までになつた。南北戦争の直前には優秀な field hand は二千弗で賣買されたほどであると云ふ。奴隷貿易港として最も著名なるは New York で、Boston, Portland (Maine 州所在、詩人 Longfellow の生地) が之に次いだ。1859-60 年に New York 港で艦裝した奴隷船八十五隻と報ぜられ、それだけの船によつても一年に三萬乃至六萬の奴隷を運搬しうる筈であると記されてゐる。

以上で我々は奴隷貿易に關する概略を語つたが、——アフリカの地に於ける黒人固有文明の白人による破壊に就ては頗る怖れてわざと述べなかつた——以下に於て、アメリカ獨立後、わけて第十九世紀に入つてから奴隷制度が動かし難いものとなつた事情を説明しなければならない。植民地時代にあつ

でもアメリカ人自身はニグロ労働を歓迎したとは考へられない。早く 1710 年には Virginia Assembly が黒人輸入を阻止するため、黒人一人につき五ポンドの税金を課することを決議し、1760 年には South Carolina でも奴隷輸入禁止法を通過した。然るに英吉利政府は是等は無効ならしめたのである。即ち奴隷貿易商人がいかに勢力を有してゐたかの反映と見なければならぬ。Lord Dartmouth が 1776 年に英吉利政府の意向を代辯して、アメリカ植民地が奴隷賣買と云ふ “a traffic so beneficial to the nation” を抑退阻止することを不問に附してはならないと述べた。事實上、アメリカ植民地で奴隷を必要としたのは、米および藍の栽培に従ふ South Carolina と Georgia に於ける農園であつて、他の諸地方では、New England の奴隷商人を除けばそのために利益を受けること僅少であつた。 されば獨立後のアメリカ諸州では漸次に奴隷制度廢止の機運に向ひつつあつたのである。 此間の消息を窺ふために第十八世紀末の Massachusetts に於ける労働力の關係を John Adams の言葉に就て見るのは甚だ興味がある。 Adams は 1795 年に次のやうに記した。――

Argument “might have [had] some weight in the abolition of slavery in Massachusetts, but the real cause was the multiplication of laboring white people, who would not longer suffer the rich to employ these slave rivals as much to their injury……If the gentlemen had been permitted by law to hold slaves, the common people would have put the negroes to death, and their masters too perhaps……The common white people, or rather the laboring people, were the cause of rendering negroes unprofitable servants. Their scoffs and insults, their continual insinuations, filled the negroes with discontent,

made them lazy, idle, proud, vicious, and at length wholly useless to their masters, to such a degree that the abolition of slavery became a measure of economy.” (Quoted by E.F. Humphrey in his *An Economic History of the United States*, p. 132.) —— (大意)「マサチューセツ州に於ける奴隷廢止に就て是非の意見が戦はされるでもあらうが、事實上の原因は白人労働人口の増加であつた。彼等はもはや自分等の競争者たる奴隷が富裕者に使役され、自分等に損害を加へることを黙視しないのだ。……若しも紳士階級が法律の保護の下に奴隷を使用したならば、庶民階級はニグロを殺し、あるひはその主人をさへ殺したかも知れない。……白人庶民階級が、と云ふよりも白人労働者が、ニグロを奴婢として無價値のものならしめた原因である。彼等の嘲笑と無禮、彼等の不斷の諷刺は、ニグロに不平を懐かせ、ニグロを懶惰、自負、悪習に導き、終にはその主人にとつて無益のものならしめたので、奴隷廢止が制度の問題となつたのである。」

黒人奴隷がアメリカ經濟に不可缺のものであるとは當時の南部地方の識者も考へてゐなかつた。奴隷制度は之を放置しておけば自然に消滅すると見てゐた。ところが彼等の豫測を覆へす事情が起つて來た。そして従前見るをえなかつたほどに強固な基礎の上にそれは確立されることになつたのである。即ち、一方に於て英吉利および New England に擡頭した紡績工業の需要を満たすために愈々多くの棉花が南部諸地方で栽培されることになり、他方に於て Eli Whitney の發明にかゝる棉繰機械 (1793 年發明、その特許權は South Carolina 州に對して五萬弗で讓渡された) が棉花の栽培を海岸地方のみならず奥地に於ても可能ならしめた。かくして大規模の農場が南部地方わけても Alabama, Mississippi, Louisiana の諸州へ擴張されて行つた。Virginia, Maryland, Delaware, New Jersey 等の奴隷所有者が新開拓の地

方へ移つて行つた。複雑な操作を必要とせざるため、棉花栽培は未熟練のニグロ男女、また小兒にすら委せることが出来た。棉花生産高に就て見れば1791年に始めて英吉利へ輸出した量は十八萬九千封度、1794年—Whitneyの棉繰機械發明後最初の輸出—には百六十萬封度、更に1837年には四億四千四百萬封度といふ莫大な數字を示してゐる。全生産額は、五百封度の梱を單位で計算して次の様な統計が擧げられてゐる。—1800年(73,000)、1810年(177,824)、1820年(334,728)、1830年(723,218)、1840年(1,347,640)、1850年(2,136,083)、1860年(3,841,416)。

前章で、1830年を境として、南部地方の指導權がVirginiaからSouth Carolinaに移つたと述べたが、この事は奴隷の境涯に就て見ても大なる相異を齎らしたのであつた。南部の奴隷擁護論者は奴隷とその主人の關係は、北部の工場労働者と備主との冷酷な關係とは異り、温情主義によると稱してゐたが、なるほど1830年以前にあつては“The old patriarchal system of plantation government, with easy-going methods of management and personal oversight of the slaves by a beloved master,”といふのが實際であつたらうが、1830年以後に於ては事情は全く一變した。“With the introduction of large-scale methods of cotton production in the Lower South, the master ceased to have close personal supervision over his slaves, and employed professional overseers whose reputation depended on their ability to exact from them a maximum amount of work. Under such a regime the system tended to become thoroughly commercialized, and to lose its semifeudal character.” (A.M. Schlesinger: *A Political and Social History of the United States: 1829-1925*, p. 88) —[大意]「棉花の大量生産方法が南部地方 [Lower South

とはメキシコ灣に近い諸州を指す]に弘がると、主人は親しく奴隷を監督することがなく、職業的管理人を雇備するやうになつた。この管理人の評判は奴隷に最大限度の勞働を強ひる技倆の有無如何にかゝつてゐたのである。かかる組織の下に於ては[奴隷]制度は徹底的に商業化され、それが有してゐた半封建的性質を失つてしまつた。」更に悪いことに、1831年Virginiaで黒人説教者Nat Turnerの指導する蜂起に際して六十人の白人が奴隷のために殺された事件があつてから後、南部の立法者は奴隷の行動に對して極度の制限を加へた。(Turnerはあるplantationを暫くの間占據してゐたが、彼と二十名の黒人は絞刑に處せられ、更に暴動地帯では百人以上の黒人が慘殺された。) 奴隷の火器携帯禁止、農場を離れる場合は許可書を必要とすること、読み書きを教へることの禁止、白人の同席なくして集會を有つことの禁止、等が法律で定められた。]

是等のニグロに對して南部地方白人の状態を一瞥すると、彼等は幾つかの異なる層に分れてゐた。1841年に於て、五百萬乃至六百萬の白人人口の中(合衆國全人口は千七百餘萬人)、奴隷所有者の家族構成人口は凡そその三分の一であつた。South Carolina, Alabama, Mississippi, Louisianaの諸州にあつては、大都會は別として、その數が全白人人口の半ばに達した。併しながら大農場を所有し、五十人以上の奴隷を使役する家族の比率は遙かに小で、奴隷所有家族數の二パーセント強であつた。1860年の統計によれば、合衆國全土に奴隷所有者は三十八萬人を數へたが、大多數は十人以下の奴隷所有者であつた。そして百人以上の所有者は二千人に足らず、五十人以上の所有者は約一萬人であつた。是等の奴隷貴族に次いで、數名の奴隷を有する農民と、その收入を奴隷貴族に仰ぎ、彼等と密接に手をつないでゐた階級層があつた。即ち辯護士、醫師、牧師、教師等である。尤も農民層は富裕と進歩には見難

されて、生活状態はみじめなものであつた。白人の中で最も悲惨な状態にあつたのは“poor white”と呼ばれる仲間で、僻遠の山間に住み、もしくは農場主が捨てて顧みないやうな土地から辛うじて食物を獲てゐた。彼等は北部に於ける如く産業への道も開かれてゐないので、進取の氣象も反省の機會も殆どえられなかつた。

上述の概観を以てしてはアメリカに於けるニグロの社會的地位と貢獻に關して不十分な知識を與へるにすぎぬのを遺憾とするが、その文化的寄與に關しては、殊に第十九世紀前半に於ては、殆ど語るに足るものなく、V. F. Calverton の編纂にかゝる *An Anthology of American Negro Literature* (Modern Library Series) に挙げられた名前南北戦争前に活動した人々は Phyllis Wheatley, Frances Harper の二女詩人と、Frederick. Douglas, James Bell の如き代表的解放運動者と、都合四人である。それで今は我々の叙述の順序として、アメリカ合衆國に於ける最も顯著な社會運動である Anti-Slavery Agitation に眼を向けなければならない。

北部地方で奴隷反對運動が戦闘的な傾向を取つたのは第十九世紀の三十年代になつてからであつた。それ以前にも奴隷廢止を主張する新聞や團體があつて、此惡制度に對する知識を弘め、漸次に之を消滅せしめようとしてゐた。その主唱者たちは多く奴隷州と境を接する地方の住者で、奴隷所有者が自發的に黒人解放の方途に出でることを期してゐた。ある奴隷反對の協會 American Colonization Society——それは 1816 年に設立された——は黒人をアフリカへ送還することを目的として組織されたが、かゝる目的は非實際的であることがやがて明白になつた。と言ふのは、此協會の最も活潑に働いた時期に於てすら、故郷へ送還しえた黒人の數は彼等の自然増加人口の五分の二に達しなかつたほどであつたからだ。1830 年頃から新しく活氣を加へ

て來た奴隷廢止運動は、當時の社會全體に影響力を有つてゐた社會正義の精神に動かされたものである。同じ精神は Mexico 及び Spanish-American republics に於ける、また英領 West Indies に於ける奴隷制度廢止となつて現れたのであつた。尤も之れを或る見地から解釋すれば、これらの事實は奴隷制の存在が經濟的利益を擧げなくなつたことを裏書きするものとも考へられる。

New England をはじめ北部の各地方に起つた反奴隷制度運動は幾多の闘士によつて指導されたが、彼等はあくまで非妥協的で、法律に認められてゐる此惡制度を即時、無補償で廢止することを主張した。彼等はあらゆる危險に身を曝しながら、奴隷解放を以て國家の統一よりも重大事なりとして東奔西走し、口にペンにその主張を説いて已まなかつた。彼等の中で最も果敢なる指導者は William Lloyd Garrison (1805-1879) であつた。マサチューセツ州の貧しき家に生れ、幼少より新聞社の活版小僧として働きながら文字を習つたが、社會の邪曲に對して敏感に反應する彼は何よりも奴隷制度打倒のために身命を擲つことを決意した。彼は或る奴隷商人を非難した處で Baltimore 市で投獄され、七週間の刑期終つて後ボストンに歸り、自身の手で週刊紙 *The Liberator* を發行した。その第一號は 1831 年一月一日に現れ、Lincoln の奴隷解放令發布の後、1865 年十二月二十九日號を以て廢刊された。“The young man just turned twenty-six who thus marked out the path he was to follow for thirty-five years was an extraordinarily single-minded and rugged character.....Unyielding as granite, sheer Yankee will driven by a passionate energy, he was born for hazardous leadership. He was a man utterly unacquainted with fear. Lied about daily, threatened, bullied, charged with every sin

in the Decalogue and every crime on the statute-book, he could not be coerced nor intimidated nor turned aside from his purpose." (V.L. Parrington: *The Romantic Revolution in America*, p. 354.) [大意]—

「此青年は二十六を越したばかりで、その後の三十五年を捧げんとしつづつあつた進路に踏みだしたのであるが、彼は一本気で、不撓不屈の性格であつた。毅然たること……花崗岩の如く、あくまでヤンキー的な意思は焰々たる情熱に驅られて、彼は生來の冒險的指導者なのであつた。彼は恐怖といふことをてんで知らなかつた。虚偽の誹謗に日毎に惱まされ、威嚇、脅迫に襲はれ、モーゼ十誡のあらゆる罪、法律に定められたあらゆる犯罪、によつて訴へられながら、なほかつ決して彼は強要に屈せず、怖毛をふるはず、また自ら決意せる所をそらすことがなかつた。」

Garrison は 1832 年に New England Anti-Slavery Society を設立し、翌年にはそれが全国的な組織たる American Anti-Slavery Society に解消した。彼の同志として加はつた者の中 Wendell Phillips は最も戰鬥的な態度を持したが、他の或者は Garrison の非議會主義に反對して別の陣營を形成するやうになつた。ボストンのユニテリアン派の牧師 William Ellery Channing, 詩人 John Greenleaf Whittier 等はその中に數へられる。そして彼等は 1840 年に Liberty Party を組織して、國會に於て Abolitionists の主張を表白した。彼等の外にも幾多の同情者があつて、逃走した奴隸を北部地方の、もしくは國境を超えてカナダの安全地帯へ送る秘密機關を組織してゐた。それは“Underground Railroad” と呼ばれるもので、1838 年には Robert Purvis を President とする合法的な團體が Philadelphia で形成された。彼等の活動の最も成功したのは當時の Northwest (現今の Middle-West 地方に於てであつて、Ohio 州のみに就て見ても、1830-60 年の間に

四萬人のニグロを援助して自由の身たらしめた。また全国各地に散在する奴隸制度反對協會の總數は 1840 年に於て二千に達し、その會員數は二十萬人に及んだと傳へられてゐる。

奴隸解放問題をめぐる多くの事實は今日の我々をも深く考へさせるものがあるので更に細説したいのであるが、今はその餘裕がないので主要の項目を羅列して満足しなければならなかつた。

第八章

アメリカ民主主義の發展

デモクラシーの精神がアメリカ合衆國建設に關係あることは疑ふまでもないが、中産階級の自覺に基く思想の分野が此國に於て生活のあらゆる方面に決定的な勢力をもち始めたのは第十九世紀の三十年代のこととされる。アメリカ合衆國は此時代に到つて新しい經驗の世界へ進入した。その基本的な條件に就ては曩に「アメリカ・ロマンティシズムの母胎」の題下に説明を試みたが、今は稍異なる觀點から、1830年を出發點とする一世代の瞥見を試みよう。史家 A. M. Schlesinger は合衆國を新しい時代に導いた若干の條件の中で重要なものを三つ數へてゐる。“Fundamental among these [conditions] were the westward expansion of the population, the birth of labor movement in the East, and the broadening of the suffrage.” *Political and Social History of the United States, 1829-1925* p. 2) 即ち、多數庶民の西部地方への發展、東部地方に於ける労働運動の誕生、および參政權の擴張である。是等の中で前二者は經濟關係、最後のものは政治的關係を表明してゐるのであるが、茲でも經濟と政治の密接なる關係を見逃すことは出来ない。そして經濟關係は政治關係の基底をなすものなるが故に、それは西部の農業と東部の商工業に大別して考察することが必然的に要求されるのである。

未開拓の西部地方が與へた無盡藏の自然的富源、既成社會の窮屈な制限を脱却した自由な境涯、更に冒險的な生活の提供する誘惑、かうしたものが所

謂開拓者の性格を不羈奔放とも見えるまでに自主的ならしめ、因習を超越した生活ぶりは粗暴の風を興へた。彼等が個人主義的で、無名の庶民の能力に對する自信強く、また地方的利害にさといものにも拘らず、nationalismの傾向を取つたと云ふのは、彼等開拓者が雑多の民族の混合であり、異州よりの移住者であつたことに幾分の理由があるとされる。これはアメリカ文明の背景としての地理的及民族的要素の交錯の研究として興味多き頭目を形成するものであるが、今はそのために説明する餘裕はない。むしろ概括的に此時代の特色を明瞭ならしめることが必要である。それに就て我々は最も都合よき文獻を Ralph Waldo Emerson の講演集の中に見出す。彼が 1844 年二月七日 Boston の商業圖書館協會にて試みた *The Young American* と題するものである。(エマソン全集第七卷『自然論・演説及講演』戸川秋骨譯。四八一頁以下参照。)

『若きアメリカ人』に於て Emerson は三つの課題を掲げてゐる。第一は鐵道による交通機關の發達その他を利用して「一つのアメリカ魂を作ること」であつて、科學的農業、庭園築造の藝術が勸奨される。「蒸汽は我等のために大西洋を縮めて一箇の海峡と化したれば、岩石多く剛健なる西部地方は、大陸の新要素を國民の心に注入し、我等は今後益々アメリカ魂を有つであらう。然かも若しアメリカ全土が一つの庭園となり、人民が一つの樂園の小事に生長したりとせば、如何ばかり好ましき事なるべきか。」第二に説かれるのは「封建政治を潰滅して從來世人の知らざりし新しき力を其跡に打建てた勇士『商業』である。『哲學者並びに人類を愛する人人は、商業を甚だ惡しざまに罵るけれども、史家の見る所は之と異り、商業を以て自由の原理』としてゐるのである。『今や商業は世界に於て新に働き手となる偉大なる機能を有するものとなり、甚だ聰明なる勢力となつてゐる。商業は身體の筋力を斥けて、之に

代ふるに、計算と、團結と、知識と、科學とを備付け、前代の君主統治時代には眠つてゐた或る種の力を悉く喚び起した。」けれども、此の商業も一箇の道具にすぎず、「その存在は或る期間に限られて、やがては其の性質一段と勝り、其範圍更に廣き或る物に己を譲らざるをえない」ことを Emerson は認める。彼の考察の第三の對象は、「既に空に曙けつつある」幾つかの徴候の中から擇ばれたる「新興の社會主義——人間を福利に導き、温情懇切なるべき吉祥を有する」社會主義である。そして彼 Emerson は、「極めて短時日の間に、我が共和國 [マサチューセツ州] 内に發生したる三つの團體の状態、及びマサチューセツ州市民が他州の土地のうちに起したる若干の團體」に關する批評を試みてゐる。その評語は彼の經濟説の表白であつて、彼の實社會に對する知識と理解を想望せしめるに充分である。(このことは Emerson が超絶哲學者の名で呼ばれる習慣から、往々にして現實を無視するものと誤解される危險を訂正するのに役立つであらう。そして彼自身是等の新しい團體——即ち Riply, Hawthorne, Fuller たちの Brook Farm とか、Alcott の Fruitland とか、或は John Humphrey Noyes の Oneida Community など——に直接参加しなかつたとは言へ、それらに對して期待を以て臨んでゐたことは疑へない。かくして *The Young American* に説かれてゐる根本的意圖は、ニュー・イングランドの青年が正義と人道のために奮起して、アメリカ獨立を實現せしめた榮譽ある祖先の名を恥しめざるやう、此國の精神的貴族とならんことを勧める點にある。富源の開發、商業組織の發展、更に道德の新しき問題の發生によつて、アメリカは國民として一段の變化を見ようとしてゐるが、「是等の傾向はすべてアメリカの未來に偉大なる相貌を致す」ものであつて、茲にはただ希望あるのみである。——“One cannot look on the freedom of this country, in connection with its youth, without

a presentment that here shall laws and institutions exist in some proportion to the majesty of Nature.....It is a country of beginnings, of projects, of vast designs and expectations. It has no past; all has an onward and prospective look." (From *The Young American*.)

エマソンの此講演がなされた 1840 年代が如何に賑かなものであつたか、それはエマソン自身の言説からも想像されるが、現代アメリカの著名な經濟史家 John Commons 教授は之に "the hot air period" の名を與へてゐる。蓋し "hot air" とは "excited or boastful talk" の意である。「四十年代は遙に他の時代よりも多辯であつた。一つの新聞紙の廣告欄を見ても、月曜の夜は奴隷廢止期成會の集會があると云つて居るかと思へば、火曜の夜は排酒同盟會、水曜の夜はグラハム・パン普及會、木曜の夜は骨相學講演會、金曜の夜は死刑廢止演說會、土曜の夜は全社會改造協會の集會があるといふ廣告をも載せて居つた。」(出井盛之『近代經濟組織と學說』134頁。) かの現象が新しい時代の兆證の一つであることは勿論ながら、我々はそれによつて社會生活の中心がいつれの方向に向いてゐたかを知るのである。これを一口に言へば個人の覺醒に他ならない。労働運動、婦人解放運動、奴隷制廢止、参政權擴張、その他多くの社會的運動がすべて個人生活の主張と擁護に基いてゐることは餘りにも明白である。そこで我々は次にそれらの或者に就て聊か述べてみようと思ふ。

千八百三十年代は、當時合衆國大統領の地位にあつた Andrew Jackson の名によつて記憶され、Jacksonian Democracy の語が聞かれる。それは西部地方の勢力を代表するものであるが、此時代は前にも言及したやうに東部に於ける労働者勢力の擡頭によつて特徴づけられてゐる。これは技術者、職工等の工場労働者の増加を意味し、また近代的都市の興起を意味した。

1800 年に合衆國全土に八千以上の人口を有する都會は六つしかなかつたが、三十年後には二十六に増加し、最大なるものはニュー・ヨークで二十五萬の人口を有した。そして都市は水力を利用しうる地方もしくは炭田地方に集中される傾向にあつた。例へばマサチューセッツ州の Lowell は 1820 年には僅か二百五十人の住民を有したのに 1840 年までには工業労働者を吸収して人口二萬の都市になつた。その紡績労働者の數は 1833 年の報告によると女工三千八百名、男工千二百名である。彼等の労働時間は十二、三時間、そしてニュー・イングランド地方労働者の平均統計によると、その四割までが十六歳以下の少年労働者であつた。東部地方の労働者が先づ不満の聲を揚げた理由は、該地方に於ては無産者の法律的、政治的權利が西部の開拓地に於てよりも局限されてゐたのによる。また教育制度も有産者のためのみに存在してゐたので、1833 年に於て六歳より十五歳までの年少者にして全然學校教育を受けたことのない者が百萬人に及んだと記されてゐる。(1830 年の合衆國人口は千二百八十六萬人) 労働組合や勤勞者政黨の組織は 1825 年以降陸續として成立し、それぞれ地方的に成功した。1836 年の報告によれば東部海岸地方の諸都市に於ける組織労働者の數は三十萬人に上つた。組合の目的とした所は賃銀引上、"closed shop" (労働組合員ならざる労働者の雇傭を禁ずる工場)、労働時間を十時間に短縮するなどの要求實現であつたが、無産者政黨の旨とする所はその範圍極めて廣く、生活のあらゆる方面の向上を企圖してゐた。Philadelphia 發行の *Mechanics' Free Press* (1831 年 4 月 16 日號) によると、労働者の要求せるプログラムの一般は次の如きものであつた。—— "Universal education abolition of chartered monopolies [including the United States Bank], equal taxation, revision or abolition of the militia system, a less expensive law system, all officers

to be elected directly by the people, a lien law for laborers, no legislation on religion." (quoted in A.M. Schlesinger's *New Viewpoints in American History*, p. 208.)

アメリカの初期労働運動は 1837 年の恐慌の餘波によつて大打撃を受けましたが、その要求の若干は既成政黨たる Democratic Party の手によつて相當に實現された。Jackson の次に大統領となつた Martin Van Buren は 1840 年に聯邦政府の一切の雇傭者に對して十時間労働の原則を適用したので一般にもそれが及んだ。まだ借財のために投獄されるといふ法律的制裁も大抵の州で撤廢され、義務教育制度の基礎もやがて確立した。我々はかゝる労働者階級の運動の外に、知識階級層の間に於ける排酒運動、女權擴張運動、平和運動、自由的宗教運動、精神病院、盲啞學校の設立、監獄制度改善、高等教育機關の普及等に關しても語るべき多くの問題があるのを感じるのであるが、あまりに多岐にわたるので別の機會を待つて語ることにしなければならぬ。

第九章

アメリカ人口の民族的構成

アメリカ合衆國には地球上の殆んどあらゆる人種が集つて來てゐるので、人種的 meltingpot と呼ばれる程である。今日の狀態から推して、過去百五十年に亘る、その獨立國家としての存續期間に於ける諸民族の錯綜せる關係を想像しても大過ないのではあるが、社會狀勢の推移に應じて、一つの時代に於ける移住民の動きと性質は次の時代に於ける其等と比較して見れば餘程趣を異にする。吾々は上來アメリカ文學の歴史的背景について述べて、南北戰爭直前の時代即ち千八百四五十年代の事情にまで説き及んだ。この前後に至つて合衆國は急激に多數の歐洲移民の入國を見たのである。1820 年には(この年にアメリカでは始めて移民の統計が出來た)八千人の入國移住民があつた。それが 1830 年には二萬三千、1840 年には八萬四千、そして 1850 年には實に三十七萬人に達したのである。1860 年にはその數は減退して十三萬三千であつた。しかしそれにも拘らず、1830 年より 1860 年の間に合衆國に移住した外國人の總數は約二百五十萬人あつたとされてゐる。

合衆國に運河、鐵道、鑛山、工場制度等の發達を見るにつれて、労働力の拂底を愈々感じるやうになつた。しかも、豊富にして廉價なる食料が得られ、汽船の出現によつて大洋航海が比較的容易になされるといふやうな事情から、新世界がヨーロッパの民衆を誘惑したのも無理はない。のみならず、ヨーロッパ自身が社會的不安を経験しつゝあつた十九世紀の三四十年代に、アメリカ合衆國は宛も約束の國であるかのやうに想像されたのであつた。當時のヨ

ヨーロッパには Democracy と Nationalism の思想が嵐となつて吹き捲り、1830年に既に幾多の民衆運動が起つたが、更に千八百四十八年は“Year of Revolutions”と呼ばれる程に危機の年であつた。同じ年の中に別箇の叛亂が十五ヶ所に起つた。フランスに於ける二月革命がその先驅を勤めた。それは第二共和國の確立となつた（尤も四年後にルイ・ナポレオンによる新しい帝國が出現した）。オーストリアの専制治下に悩まされてゐた諸國民が反抗を開始した。ヴェネナに叛亂が起つてハプスブルグ皇帝は周章して憲法を制定した。ハンガリーは共和國創設を宣言して Louis Kossuth がその指導者の地位にあつた。イタリアでもオーストリアの羈絆を脱せんとする決死的努力が見られた。ドイツでも、オランダでも、デンマークでも、スウェーデンでも同じやうな社會的變革が試みられた。イギリスに於ては、かの Chartists の運動があつた。但し、これらの民衆運動が最後の勝利を得なかつたことは歴史の傳へてゐる所である。しかし、かゝる事情の説明は如何にして得られるであらうか。吾々は次の記述に於てそれが得られると考へる。――

「1848年の『革命』の前には、極東以外の全ヨーロッパを襲つた1847年の經濟恐慌があつた。マルクスは、ロンドンにおいて當時の經濟事情、世界市場の状態を研究してゐたので、新しい局面は革命の〔即ちプロレタリアの——引用者〕爆發には有利でないといふ、および彼や彼の友人の豫期した新しい革命的叛亂が起らないのは革命家たちに革命的創意と革命的精力とが缺けてゐること以外の事實で説明し得るといふ、結論に到達した。現在の情勢の詳細な分析に基づいて、1850年の終りに彼は、かゝる經濟的開花期に面して強ひて革命を行はうとしたり、叛亂を誘導したりすることは、必ず效果なき敗北に終るべきものだ、といふ結論に到達した。また當時の情勢は、殊にヨーロッパの資本の發展を助成するものがあつた。途方もなく豊富な金銀がカ

ルフォルニヤおよびオーストラリアに發見された。尤大な労働者の群がこれらの國に流れ込んだ。ヨーロッパ移民の大洪水は1848年に始まり1850年には恐るべき割合に達した。」(リヤザノフ「マルクス・エンゲルス傳」)

移住民の大多数は極度の貧窮者であつた。その郷國から見ればスカンディナヴィヤ人その外ヨーロッパの諸民族が新しく渡つて來た。また大太平洋の沿岸地方には支那人労働者が迎へられて、黄金狂の白人の爲に家庭内の賤業に従つた。しかし乍ら壓倒的な部分はドイツの農民と労働者、及びアイルランドの中部、南部地方より渡來した農民であつた。後者は1847年より引續いての馬鈴薯凶作と英人よりの壓迫が原因で渡來したのである。先づドイツ移民について見る。1830年から1850年の間にアメリカに移住したドイツ人は五十萬を越えたが、次の十年間には更に百萬人近くも渡來した。1847年に五萬人、1850-60年の間は毎年九萬人の割合。)その過半数はアレガニーの山を越えて Middle West 地方に居を占めた。その或る者は Ohio 州の未開墾地方に赴いて pioneer となり、また Cincinnati の町に留つた。また或る者はミシガンの湖に沿ふ Wisconsin 諸地方の森林地帯を伐り拓いた。その他 Michigan, Illinois, Indiana, Missouri, Iowa の諸州へ分れ住んだものも多數に上つた。このドイツ移民の中には可成高い比率で知識階級の有能なる指導者が見出された。例へば南北戦争に加り、社會問題に貢獻する所多かつた Carl Schurz (1829-1906) がある。彼について C. A. Beard は次の如く誌してゐる。“With a keen eye for competent strategy, Carl Schurz carried the campaign into Missouri where he protested with eloquence against the action of the slave power in denying ‘the laboring man the right to acquire property in the soil by his labor’ and made a

special plea for the German vote on the ground the free land was to be opened to aliens who declared their intention of becoming American citizens." *The Rise of American Civilization*, Vol. II, p. 34) これらのドイツ人は夫々の地方に於ける精神的、教育的發達に貢獻する所多く、特にその自由な社會的習慣はニュー・イングランドの峻嚴な清教徒的傳統と極めて興味ある對照を見せたのである。

ライン溪谷や南部ドイツ諸地方の農民、労働者にも優つて悲惨な生活を送つてゐたのが、カトリック教を信奉するアイルランド農民であつた。彼等は政治的にはイギリス人の桎梏の下にあり、經濟的には同じくイギリスの不在地主に搾取されてゐた。それだけでもう耐え切れぬ重荷であつたのに、更に馬鈴薯の凶作が續いてやつて來た。幾千人の農民が餓死し、路傍に遺棄された死骸の口の邊には雑草の液汁が青く染められてゐたと旅行者は語つた。雑草は胃の腑を滿すことは出来なかつたのだ。命のあるうちにと彼等はアメリカへ押し寄せて行つた。二十年程の間にアイルランドの労働人口の半數以上が大西洋を越えてアメリカの土を踏んだ。合衆國政府が 1850 年に初めて外國生れのアメリカ人の統計を調べて見ると、その中アイルランド人は百萬人に近く、比率から云ふと 42% に相當したといふ。その後 1860 年までの十年間に更に 五十萬以上の新しいアイルランド移民が入國した。勿論彼等は着のみ着のみでやつて來た連中で、多く合衆國東部地方の都會に集つた。或る者は工場で、或る者は運河、鐵道、その他の工事に従つて働いた。ドイツ移民が多くは農村地方で勢力を扶殖したのに對して、アイルランド人はアメリカ産業の開花期の雜然たる都市に密集して、多くの社會的害毒の源となつたと見られてゐる。不衛生、無教育、餓死線上の彷徨、等がアイルランド移民の特徴とされてゐた。ボストン市の委員會の報告 (1849 年) に依れば、

"wretched, dirty and unhealthy condition of a great number of the dwelling houses occupied by the Irish population," (quoted in A. M. Schlesinger, "*New Viewpoints in American History*," p. 9.) と云ふ状態で屋根裏から地下室に至るまで一つの部室に一家族乃至數家族が住つてゐたのである。

移民の數が激増すると共に、健康、教育、同化、及び労働等に關する多くの問題が論議の中心を形造ることになつた。聯邦議會では委員會を設けて歸化法の修正、貧民及び犯罪者の渡來禁止法制定等を議せしめたが、委員の調査に依つて知り得た所によると、英國では法律に依つて貧民の國外放逐を認め、また多くのヨーロッパ諸國の犯罪者は合衆國へ移住すれば罪を許されるといふのであつた。この報告に基づいて 1838 年に一つの法案が提出された。——いかなる船長も若し合衆國へ向け外國より白痴、精神病者、或ひは犯罪者を輸送するならば、罰金及び體刑に處せられる、また貧民を輸送した場合には罰金に處せられる。最もこの法案は聯邦政府の移民に對する自由放任政策の爲に遂に討論にも附せられなかつた。

吾々は是等のドイツ移民、アイルランド移民のその後の生活を寫した文學作品として、現代文學の中に之を求めると考へる。彼の大作 *The Genius* には Wisconsin 地方のドイツ農民の成功した事例が見られ、短篇 *Mighty Rourke* (短篇集 *Twelve Men* に收む) にはアイルランド生れの建築労働者の一つのタイプが描かれてゐる。更に名作 *Jennie Gerhardt* では女主人公の家族は貧しいドイツ移民、主人公の家族はアイルランドから移住して實業界で富を成した者である。兩者のアメリカに於ける家祖は共に十九世紀中葉に渡來したことになる。こうした一二の例について見ても分かる通り、南北戰爭直前の

時代にアメリカは歐洲移民の氾濫を見たのである。しかし乍らこの事情を合衆國獨立以前の時代に於けるアメリカへの移住者の性質と對照的に考へて見ることは無意味であるまい。

植民地發達の初期に當つては、アメリカへの移住者は殆んど純粹にイギリス人であつた。商人、郷土、労働者、工匠、オックスフォードとケンブリッジの卒業生、及び極めて少數の落魄した貴族——彼等の富の挽回を期して海を渡つた——であつた。十七世紀の三十年代に此等の移住者は二萬人に上つた。尤もこれ程盛んな植民地への渡航者の流れはその後長く見られなかつた。かくして獨立戰爭の前夜に於ては上述の original pioneer stock の後裔が人口の過半を占めてゐたのである。このことは當時の植民者の家族がいかにも多數を擁してゐたかを知れば自ら首肯出来るであらう。例へば Maria Hazard といふロード・アイランド生れの一婦人は百歳の長壽を保つて、その子、孫、曾孫、玄孫を數へると五百人もあつたと傳へられる。但し彼女が死んだ時には彼等のうち二百五人だけが生存してゐた。勿論こうした植民者の大多數は母國イギリスを知らず、アメリカの地に對して祖國愛を感じてゐたのであつた。さてイギリス系の移住者に次いで數の多いのは Scotch-Irish であつた。彼等の祖先は十七世紀のスコットランドからアイルランド北部地方へ轉住し、その肥沃な土地から生活の資を得てゐた。(それはアルスター地方で、彼等の前に此の地に定住してゐたアイルランド人はクロムウェルの爲に放逐されたのであつた。このアイルランドへ移つたスコットランド人は長老教會の信仰を奉じ、麻及び羊毛織物を主産業として榮えてゐたが、轉て同産業がイギリス人の爲に壓迫され、英國議會は彼等の生産品の輸出を禁じて了つた。かかる事情の下に彼等 Scotch-Irish は十七世紀の末葉以後、連續的に新世界

へ移つて行つた。彼等は海岸地方に住所を得ること難く、邊疆未開の地に居所を定めなければならなかつた。蓋し諸種の便宜多き海岸の土地は彼等よりも先にイギリス人、オランダ人、スウェーデン人等に依つて占められて居たのである。

植民地時代に於ける Scotch-Irish は植民人口の六分の一に上り、充分に勢力を持つてゐた。彼等と前後してアメリカに冒險を試みたのはドイツ人であつた。その先驅者とも云ふべきは William Penn で、彼の勸誘に應じてヨーロッパ大陸からも陸續として新しい移住者が到來した。彼等も亦奥地に安住の地を求めることを餘儀なくされた。彼等はイギリス化せんとする努力に對して極めて冷淡に、彼等自身の言語、宗教、教育、等を墨守した。獨立戰爭當時に於ける彼等の頭數は二十萬を數へたと云はれてゐる。彼等の外にも幾多の異なる民族がアメリカへ渡つて來た。フランスの新教徒 Huguenots は「ナントの勅令」廢止(1685)以後に於て渡來した。彼等は主として商業に従事し、イギリス人とアメリカ市場に於いて競争した。本來のアイルランド人、即ち Celt の血を享け Catholic 教を信奉するアイルランド人も、或はヨーロッパの各地方から逃れて來たユダヤ人も相當の數に上つた。彼等の外に Negro があつたことも忘れてはならない。十八世紀に於て黒人はアメリカ植民人口の五分の一に達してゐた。

これらの異なる民族がアメリカの發達に夫々異なる社會的、文化的役割を務めたことは云ふまでもない。勿論その影響の功罪如何はこれを容易に決定することは出来ないが、吾々は今暫く視野を限つて文藝の方面における諸民族の貢獻を一瞥して見よう。H. L. Mencken に言はせると、イギリス系のアメリカ人は文化的に寄與する所なく、音樂はドイツ人及びイタリヤ人に依つて殆んど獨占的に開拓され、繪畫はフランス人に依つて發達されたのである。

教育の方面では幼稚園から大學に至るまでドイツ人が手本を示して呉れた。有名な文學者の血統を調べて見れば Whitman の母親はオランダ人、Henry James の祖父はアイルランド人、Poe でさへもドイツ人の血を享けてゐる。現代のアメリカの詩人作家について見ても、Mencken や Dreiser はドイツ系、Sandburg はスウェーデン系 Arturo Giovannitti はイタリア系、Kreymborg や Untermeyer や Waldo Frank はユダヤ系、O'Neill や Robinson Jeffers はアイルランド系——といふやうな事實は餘りにも有名である。

以上の雑駁な記述を纏める意味で、次に夫々の民族の特性を要約した Schlesinger 教授の言葉を引用してこの稿を結ぶことにする。——“Of the older racial strains, the irrepressible good humor and executive qualities of the Irish, the solidity and thoroughness of the German, the tenacity and high mindedness of the Scotch-Irish, the law-abiding qualities of the English, and the sobriety and industry of the Scandinavian have undoubtedly made important contributions to our national character.” (Ibid., p. 19.)

第十 章

アメリカ生活の近代化

アメリカ大陸に於ける白人文明の歴史的時期を区分するに當つて、歐洲各國人の新大陸發見と植民を以て「古代」とし（之に先行するアメリカ土人の固有文明の時代は「先史時代」とするのである）、英吉利諸植民地の獨立以後南北戦争に到るまでを「中世」とし、爾後の二世代餘りの期間を「近代」と考へることが出来る。アメリカ史上の中世が終を告げるに到つた大なる事情を二つだけ數へるとすれば、その一は政治的のものであつて即ち聯邦を形成する各州の州權が聯邦中央政權に取つて換られ、時代錯誤的な奴隸制度が潰滅に歸したことである。第二には、此政治的變革の裏にあつて絶大の作用をなした産業革命といふ經濟的事情を擧げなければならない。英國に於ける産業革命の結果として工場制度が打立てられ、それがアメリカに移植されるようになったのは 1812 年の對英吉利戦争前後から保護貿易政策が強行されたのに因ると見られるが、そのために十九世紀の二十年代には漸く北部大西洋沿岸各州に工場が設けられ始めた。併し合衆國全體から之を見れば農業本位の時代で、全人口の五分の四までが農耕地に住んでゐたのである。南北戦争までの工業發達の概況を數字を以て現すために、年額五百ドル以上の生産を有する工場に就て、使役労働者の數と生産額を擧げてみよう。

| 年次 | 労働者數 | 生産額 |
|------|---------|---------------|
| 1820 | 349,000 | — |
| 1840 | 791,000 | \$483,278,000 |

| | | |
|------|-----------|-----------------|
| 1850 | 957,000 | \$1,019,106,000 |
| 1860 | 1,311,000 | \$1,885,861,000 |

工業の中で最も盛大なのは紡績業で、その發達初期の経過を示すと次の如くである。

| 年次 | 工場數 | 労働者數 | 紡錘數 | 生産高(年) |
|------|-----|--------|---------|-------------|
| 1807 | 15 | — | 8,000 | 300,000(封度) |
| 1812 | 87 | 4,000 | 80,000 | 2,833,000 |
| 1815 | — | 76,002 | 500,000 | — |

そして 1860 年には紡錘總數五百二十三萬、生産高は五百封度欄三百八十四萬箇に上つてゐる。それに次いで羊毛加工業と製鐵業が擡頭して來た。羊毛工場は 1840 年に於て 1,240 を數へ、生産高は三千五百八十萬封度、二千六十九萬ドルに達したが、1860 年の生産高は六千二百六萬封度、六千八百萬ドルに及んだ。鉄鐵 (Pigiron) の製産額を見ると、1810 年 (53,908 噸) 1830 年 (165,000), 1840 年 (286,900), 1850 年 (563,700), 1860 年 (821,200) と云ふ統計が記録されてゐる。産業の進展が都會の生長を意味したことは言ふまでもない。アメリカ資本主義の擡頭につれて農業本位の生活がくつれ 人々は商業、わけても工業の地方的中心へ、全國的中心へと集つて行つた。都市人口の増大はアメリカ合衆國獨立直後から南北戦争直前までの間に於て既に驚くべき變化が見られた。舊來の都會の發達と並んで新興都市の進出が注目を惹いた。1790 年 (ワシントンが初代大統領に選ばれた翌年) に合衆國には五萬以上の人口を擁する都會はなかつた。即ち最大の都である Philadelphia が四萬九千、次位の New York が二萬九千 (その中の二千人は奴隸)、Boston は一萬八千、Baltimore は一萬三千の人口を數へたにすぎない。その後二十五年、つまり 1815 年の調査によれば、Philadelphia は依然として首位を占

めて七萬餘、New York は六萬餘、Baltimore は三萬、Boston は二萬五千と云ふのであつた。然るに 1840 年には New York の人口は三十一萬を數へ、1860 年に於ける大都會の順位は次の如き形勢となつたのである。

| | |
|--------------|-----------|
| New York | 1,174,700 |
| Philadelphia | 565,520 |
| Brooklyn | 279,100 |
| Baltimore | 212,400 |
| Boston | 177,840 |
| New Orleans | 168,670 |
| St. Louis | 160,700 |
| Chicago | 109,260 |

この中 Chicago は 1840 年には五千足らずの人口を有してゐたにすぎない。

茲で便宜上、合衆國全人口の増大に就ても、それを入國移民數と對照して、記して置かう。

全國人口は 1780 年 (3,929,000), 1800 年 (5,308,000), 1820 年 (9,638,000), 1830 年 (12,866,000), 1840 年 (17,069,000), 1850 年 (23,191,000), 1860 年 (31,443,000)。而して入國移民は 1790 年から數年間は毎年四千人平均を數へたが、1795-1810 年の間は六千人平均に増した。その後の五年間は奈翁戦争の影響のために殆ど移民は杜絶したが、1817 年には急激に増加して二萬人となり、茲に合衆國聯邦議會は問題を重視するに到り、移民法を制定した。かくして 1820 年以後、移民統計が記録されることになつたのである。而して爾後四十年間に於ける移民數を表示すれば次の如くである。

| | |
|--------------|---------|
| 1821-1830... | 151,824 |
| 1831-1840... | 599,125 |

1841-1850... .. 1,713,251

1851-1860... .. 2,598,214

扨て我々はあまりに数字にこだわつたやうであるが、時代の推移を簡単に傳へるためには、かゝる方法も已むをえないのである。ところで南北戦争に到るまでの三十年を呼んで、ある經濟史家は *The Golden Age of Small Industry in America* と言つてゐる。産業の發達が見られたとは言つても、それは今日から考へれば小規模のものに過ぎず、富豪の如きも *millionaire* と呼ばれる者は片手で數へられる程であつた。一般社會生活は無駄が多くいはば不合理的でこそあつたれ、悠長な、安易なものであつた。されば發明特許品の如きも稀で、1833年に特許局長は事務が閑散であるところから、最早人智はその極に達して此上發明品は出ないのであらうと考へ、辭職の意を洩らした文書を殘してゐるとのことである。(Cf. A. M. Schlesinger: *New Viewpoints in American History*, pp. 246-7.) 此様な狀勢から當時の日常生活上の便宜に就て一瞥を與へるならば、Abraham Lincoln は我々の時代よりも Benjamin Franklin や George Washington の時代に近い。いな彼等と同時代に住んでゐると語るのが正しいと云ふことに氣づくのである。Lincoln にとつて三階あるひは四階以上の建築物は全然新奇である。道路の舗裝、商店の陳列窓の板硝子、少年の乗りまわす自轉車、硫黄燐寸、こんなものも彼は知らなかつた。管工事は始められたばかり、石油ランプの使用もやつと普遍化されかけてゐるところ、鋼鐵製のペンが驚ペンの代りに用られるやうになつて間のない時代であつたのだ。鋼鐵軌道、鐵橋、高馬力の機關車、人造氷、郵便爲替、小包郵便、連發銃、是等のものすら Lincoln の生前には知られてゐなかつたのである。1860年あたりを境としてアメリカ史の中世と近代を區劃する所以なのである。特許發明品に関する詳細の説明を

與へられなくとも、合衆國特許局の記録が此方面の躍進ぶりを證明する。その開局以後 1860年までに許可した總件數は三萬六千弱であつたのが、その年から十九世紀の終末までに許可した特許件數は實に六十四萬に達したと計上されてゐるのである。

南北戦争前後から世紀の末までの期間は所謂 Big Business の擡頭期で、之を二期に分けて 1860-1880年を Nationalization of Business となし、南北戦争の戦後經營の間に於てアメリカ經濟が南北對立の情勢から全國的に統一される機運に向つたことを指示し、更に 1880-1890年を Big Business in its Golden Age of Laissez-Faire となし、アメリカ資本主義が漸く成熟期に入つて Corporation Era (大組織時代) をその中に孕める事實を指示することが出来る。併し我々は本章で此時代を分析して、鐵道の發達と西部地方の開發、開拓線の消滅と農村經濟問題、新しき労働者の團結、大資本家の誕生、等々の項目のそれぞれに就て述べる餘裕はないから、此時代の主要な傾向であるプチ・ブルジョア的文化生活の一面に觸れるに止めよう。

南北戦争の終結以後の約四半世紀を The Gilded Age と呼ぶことが廣く行はれてゐる。それは此時期に於けるアメリカの社會・經濟生活の一切が黄金によつて彩られ、金が至上者となつて萬事を判斷する基準をなし、ドルの獲得のために全國民が狂氣のやうに卑しい奪ひあひに熱中したからである。またそれは本質的に黄金的なのでなく、鍍金した成上り者の表面的なまばゆさを揶揄した稱呼とも考へられるのである。この『金びか時代』の主要な特徴として建築、調度、服飾、文學および藝術に現れた卑俗な趣味を、文明史家は非難する。初期のアメリカ建築を一様に好ましいものと斷定するわけにはいかないが、概して言へば落着きがあり、安慰の感を懐かしめるものがあつた。然るに『金びか時代』になると、當時の成金が自己の富を見せつけるため

にあらゆる工夫が凝らされた。嘗ては農耕者であり、肉屋であり、番頭や小商人であつたそれらの成金は、もちろん建築の外観のみでなく、室内装飾や調度の類にも自らの低劣無教養の徴證を示さずには置かなかつた。すべて金目のかゝつたと思はれるもの、法外に高價な物を模したのでないと承知が出来なかつた。繪畫、帳帷、絨氈、いづれも派手な色彩、無理にちぐはぐの意匠を凝らしたのが最上とされた。文學の方面でも、飾り澤山の賑かな、しかもセンチメンタルな作品が一般の人氣を博した。E. P. Roe は騎兵聯隊附の布教使として、また南北戦争に際しては衛戍病院附の牧師として働いたが、後に小説を書いて一層廣大な聴衆に訴へようとした。*Barriers Burned Away, He Fell in Love with His Wife Opening a Chestnut Burr, Without a Home* など多くの作品を出した。それらのロマンスに共通な特色は濡れそぼちたる感傷と、悪を遠ざけ善を行へとの勸奨で、茲に乃ちプチ・ブルジョアの好みが発露されてゐた。一人の批評家の解説を参照すると、此作家の道具立て、従つて大衆讀者の歡迎する所のものが明瞭になるのである。——“His [Roe's] simple formula included: first, some topical material, historical event, or current issue; second, characters and incidents selected directly from his personal observation or from newspapers; third, an abundance of 'Nature' descriptions with much praise of the rural virtues; and fourth, plots concerned almost invariably, and never too deviously, with the simultaneous pursuit of wives, fortunes, and salvation.” (Carl Van Doren: *The American Novel*, p. 122.) 同じ時代に於ける最も人氣のあつたロマンス——そして 1913 年になつても猶ほ新たに百萬部も増刷された——*Ben-Hur* の著者 Lew Wallace (1827-1905) は Roe 以上の影響力を有してゐると言つてよい。確かに彼は *Uncle Tom's*

Cabin の著者と並んでアメリカ大衆の渴仰の的である。映畫として輸入された *Ben-Hur* がアメリカの金びか時代の名残であることに氣附いた人が本誌の讀者になかつたとすれば、それは却つて幸であつた。

併し乍ら觀點を少しく變へて眺めると、同じ様に好ましからぬ傾向が此時の趣味好尚に就て見出されるのである。それを格一化の傾向と呼ぶことが出来よう。*American Literature as an Expression of the National Mind* の著者は之を次のやうな言葉で説明してゐる。——“But one of the worst features of the taste of the Gilded Age was its tendency to become standardized. Factories were turning out thousands of uniform rugs, tea-cups, horse-hair sofas, and gilded picture frames. Modern methods of distribution and selling were scattering them all over the country. The old local fashions in furniture, rugs, architecture——and thought——were tending to disappear under a wave of standardization. (Russell Blankenship: *American Literature*, p. 411.) つまり幾多の工場から生産されるところの幾千幾萬といふ絨氈、茶碗、長椅子、金塗りの額縁、是等のもはすべて近代的な配給ないし販賣の方法によつて全國內に限なく行渡るのである。往時にあつては各地方にそれぞれ特有の風が家具にも、絨氈にも、建築物にも、はた思考様式にも窺はれたのであるが、今やそれらのものが片はしから標準格一化の大浪に攫つて行かれて了つたのである。

格一化の傾向を裏から解すれば個人主義的勢力の失墜である。Gilded Age に入つてから人々は漸く自己が環境の支配者でありえないことに氣附いたのである。人々は生活の行路が或る回避し難き事實によつて決定されるのを感じ始めた。個人は各々の社會的地位身分によつて結びつくことによつて、自己の存在を認めるより外はなくなるのだつた。個々の生命には大した意味も

なく、尊重さるべき理由も見出せないと考えられる。絨氈や額縁や茶碗と同じやうに生産され、配給される運命の人間ではないのか。もちろん人間には夢がある。ロマンティックな楽観はなかなか減びるところではなかつたけれども、人前でこそ元気のよい事を述べ立ててもしたけれども、一人思ひに耽る時には漸く影の薄いものとなり行きつつあつた。ロマンティシズムはリアリズムへ、楽観は悲観へ、席を譲りかけてゐた。かうした物の見方の変化がやがて文學にも現れるようになった。歐羅巴文學を濃く染めあげてゐた憂鬱の色がアメリカの文學にも見え始めたのは『金びか時代』の末期に於てであつた。ブランケンシップは此時代のアメリカに於ける創造的精神の彷徨せる状態を指摘して次の言葉で要約してゐる。“Literary realism had a long road to travel before it was accepted in America. Before realism could make much headway it was necessary to produce some national critics who were willing to attempt a diagnosis of America's ills. In literature the Gilded Age was a period of a wide wandering of the creative spirit. Many of the writers were hopelessly lost. Even a colossal figure like Mark Twain had his moments of indecision, doubt, and muddled intentions. Henry Adams, one of the acutest minds of the period, acknowledged that he lost his way and spent years of meditation in a fruitless effort to find it again. Howells and Hamlin Garland knew what they were trying to do, but it was not until the very end of the Gilded Age that Howells found himself, and Garland published his first book at the beginning of the nineties. (*American Literature*, p. 414.)—文學上のリアリズムは迂路曲折の後にアメリカで受け入れられたのである。リアリズムが若干の成功を収めるまでには、アメリカ

の病弊を診断せんとする幾人かの批評家が現れねばならなかつた。文學の領域に就て考へるのに、『金びか時代』は創造的精神の廣くさまよひ歩いた時期であつたのだ。見る影もなく没落し去つた作家は少くない。Mark Twain (1835-1910) の如き巨人でさへ狐疑逡巡、懷疑に捉へられ、意思の混濁せる時代があつた。Henry Adams (1838-1918) はその時代で最も鋭敏なる心性の所有者であつたが、自ら認めてゐるやうに、方向を失ひ、それを再び發見するために數年間沈思黙想したが徒勞に終つたのである。Howells (William Dean H., 1837-1920) と Hamlin Garland (p. 1860) は共に自らの爲さんとしつつあつた所のことを自覺してはゐたにしろ、前者が自己を見出したのは金びか時代の終り頃になつてのことであるし、後者が最初の作品を書物として出版したのは[千八百九十年代]の初年であつたのだ。

アメリカ生活の近代化の經濟的基礎を説くことなしに、南北戦争前に於ける産業發達の端緒を略説した後、直ちに Gilded Age の文化的側面の解説に入つたことは順序を轉倒したものと非難されるでもあらうが、これは社會生活の文化的側面を語ることに新しい時代の序説の役割を負はせようとの意圖に外ならなかつたことを諒とされたい。

第十一章

アメリカ資本主義の成立

南北戦争の戦はれてゐた期間に英國に駐在してゐたアメリカ公使 Charles Francis Adams の息 Henry Adams (1838-1918) は、獨逸に留學し (1858-9)、伊太利に遊んだ (1859-60) 後、故郷に落着く暇もなく父の秘書として英京に出發した。七年の歳月を倫敦で暮した青年 Adams が 1868 年に故郷 Boston へ立歸つた時、彼の永年の歐羅巴的教養はどれだけ役に立つたらうか。もちろん彼自身は大いに自負する所があつたのである。併し新時代のアメリカは古典を必要としなかつた、書物より得た知識で動いてはゐなかつた。新しいアメリカ人は自分の手で獨特の世界を創造しなければならなかつた——科學を、社會を、哲學を、宇宙を、彼等はこれから道路を造り、鐵を山から掘り出さうとしてゐたのである。

Henry Adams が七十歳になつて書きあげた自敘傳 *The Education of Henry Adams* (1907, 1918) の第十六章 *The Press* は、南北戦争を境界としてアメリカがどのやうに質的に變化したかを若い scholar-gipsy の體驗として語つてゐるが、彼の終生にわたる懐疑的な考へ方は彼が 1868 年に歸國した時に受けた大なる精神的衝擊に基因するのではないかとさへ思はれる。彼のやうな知的労働者はどれだけ立派な家系に生れ (Henry Adams の祖父も、曾祖父もアメリカ合衆國の大統領の地位に上つた)、どれだけ深い學問をし、國際社交場裡で磨きをかけて來ても、その技倆を揮ふことのできるアメリカではなくなつてゐた。Boston とは business の別稱に外ならなかつた。

Eastonians は鐵道の建設に忙がしかつた。Adams も鐵道の事業に力を貸したく思つたけれども、それに相應した教育が彼にはなかつたのである。新しい時代の勢力が何處に存してゐるかを彼は知ることが出来た。昔のやうに農業とか手工業とか學問とかではなく、機械的な energy の數々が優越の地位を占めてゐた。此様な變革の起つた結果として五十年代よりの殘存者は土中に生きる蚯蚓と同じで、自分の進んで來た路を引返すことが出来ない。迷兒と言つてよいか、難破船の漂流物と言つてよいか、彷徨の學徒と言つてよいか、とにかく踏みしめて來たところを顧みることが出来ないのである。アメリカ人の中でのアメリカ人と呼ばれてよい彼 Henry Adams の世界は滅んだのである。彼は何も愚痴をこぼすのではない。時代の推移を責めようと云ふのではない。自分はアメリカ土人や野牛のやうに祖先傳來のものを奪はれたわけではない。ただ彼自身に罪があつて斯くなつたのではないことを飽くまで言ひ張りたいたけである。……新しいアメリカ人たちは思考の餘裕がなかつた。一日の勤勞以外のことに彼等の眼は届かなかつた。外の世界に對する彼等の態度は深海の鱗族のそれと同じであつた。なかんづく彼等が、何を爲すべきか、如何にして爲すべきかを、歴史、哲學、もしくは神學を學んだ者の思想なり方法なりから教へられることを烈しく忌み嫌つたのは無理もなかつた。彼等は自分たちの世界がまつたく新しい energy の世界であることを承知してゐたのである。——これを Adams 自身の言葉を引用して言ひ現せば次のやうである。

“One could divine pretty nearly where the force lay, since the last ten years had given to the great mechanical energies—coal, steam, iron—a distinct superiority in power over the old industrial elements—agriculture, hand-work, and learning; but the result of

this revolution on a survivor from the fifties resembled the action of the earthworm; he twisted about, in vain, to recover his starting point; he could no longer see his own trail; he had become an estray; a flotsam or jetsam of wreckage; a belated reveller, or a scholar-gipsy like Matthew Arnold's. His world was dead. Not a Polish Jew fresh from Warsaw or Cracow—American of Americans, with Heaven knew how many Puritans and Patriots behind him, and an education that had cost a civil war. He made no complaint and found no fault with his time; he was no worse off than Indians or the buffalo who had been ejected from their heritage by his own people; but he vehemently insisted that he was not himself at fault... The new Americans had no time for thought; they saw, and could see, noting beyond their day's work; their attitude to the universe outside them was that of the deep-sea fish. Above all, they naturally and intensely disliked to be told what to do, and how to do it, by men who took their ideas and methods from the abstract theories of history, philosophy, or theology. They knew enough to know that their world was one of energies quite new.” (*Education*, pp. 238-9.

明敏なる Henry Adams をかくて混迷へ導いた南北戦争直後のアメリカの産業界に就て語ることは、専門研究者ならぬ筆者にとつては冒険ではあるが、説明の順序として觸れずに置くわけにゆかない。前稿で述べた所の南北戦争までの經濟的發達の後を受けて、アメリカ生活近代化の輪廓を主として工業の方面から記述するのが本稿の目的である。——南北戦争で悲惨な目に

あつた南部諸州は、それまでの政治的権力も経済的覇権もすべて北部の新興資本家の手に譲渡して了はなければならなかつた。一般民衆は窮乏化し、農園は荒蕪に歸した、柵も塀も毀れたまゝで、雑草は蔓るばかり、農具は失はれ、辛うじて家畜の生残つたものを使役して耕作と收穫に従事する事が出来たのだつた。商業は沈滞の極に達し、銀行は店を閉鎖するもの相次ぐ有様で、鐵道も、郵便も名前だけの存在でしかなかつた。新聞があちこちで發行されてゐるのが幾分の力になるぐらゐのものであつた。だが最も良くないことと言へば、働き盛りの白人人口の中、三分の一までが戦争で死ぬか生涯不具で暮さねばならぬ程にいためつけられたことである。それがため經濟機構の主要な要素として彼等を考慮に入れることが難くなつた。そして其上に、他に寄食する孤兒の数は或一州だけでも一萬人を數へたと記録されてゐる。かゝる窮迫の重荷を背負はされたのは勿論、労働者と貧農たちであつた。自己の利益のために戦争を起した地主たちは飢餓もしないし、裸體である必要もなかつた。彼等はやがて北部地方の資本家たちと了解が成つたのである。

北部に於ける經濟的狀勢は南部のそれと全く異つてゐた。戦争中に興つて來た種々の産業は愈々その規模を大にし、資本家階級の勢威は躍進した。そして従前は州政府の權威が聯邦中央政府のそれと對峙してゐたのに、今や州權は殆ど力なきものとなつて行つた。アメリカ合衆國は漸く一つの國民としての自覺を得て來た如くであつた。併しながら、その統一は内部より湧き出たものと云はんよりも外からの壓力に因つたのである。V. F. Calverton はその新著に於て之を次のやうに批評してゐる。“This unity, it is true, was not the outgrowth of voluntary co-operation on the part of the nation as a whole, but was the result of industrial conquest on the part of the industrial and financial forces in the East. It was Nor-

thern capitalism which forced the rest of the nation to march in step with its own programme of progress.” (*The Liberation of American Literature*, p. 333.) してみると我々が南北戦争後のアメリカ經濟の發展を語るといふのは、實は北部地方に於ける資本家勢力の増大を意味するのみに外ならぬこととなる。扨て、凡て如何なる國にあつても、産業の發達の基礎をなすものは低廉なる労働力と、資源であることは言ふまでもないが、アメリカでは天然の資源は常に手の届く處に無盡藏に埋没されてあり、労働力も、女子、少年、移民によつて不自由なく供給され來つた。先づ鐵産物の生産高を表記して参考に供さう(單位千噸)。

| 年次 | 銅 | 鉄線 | 鋼鐵 | 石炭 |
|------|-----|--------|--------|---------|
| 1860 | 7 | 821 | — | 13,044 |
| 1870 | 12 | 1,665 | 68 | 29,496 |
| 1880 | 27 | 3,835 | 1,247 | 63,822 |
| 1890 | 115 | 9,202 | 4,277 | 140,866 |
| 1900 | 270 | 13,789 | 10,188 | 240,786 |

そして鐵産物の價格を見るのに、1881-1885の五ヶ年に於ては年總額四億二千六百萬弗、超えて十年後の1896-1900の五ヶ年に於けるそれは八億二千七百萬弗に達したのである。鐵道の延長は1860年には三萬哩であつたのが、1870年には五萬二千哩、1880年には九萬三千哩、1890年には十六萬七千哩、1900年には十九萬八千哩に及んだ。鐵道の發達に關しては稿を改めて開拓線の終末を説く際に述べなければならぬ事があるから、今は製造工業の發達に就ての統計を示さう。工場數、労働者數ともに千を單位とし、投資金額も生産品價額も百萬弗を單位としてある。

| 年次 | 工場数 | 労働者 | 投資金額 | 生産物 |
|------|-----|-------|-------|--------|
| 1860 | 140 | 1,311 | 1,000 | 1,885 |
| 1870 | 252 | 2,054 | 1,694 | 3,385 |
| 1880 | 253 | 2,733 | 2,790 | 5,369 |
| 1890 | 355 | 4,252 | 6,525 | 9,372 |
| 1900 | 207 | 4,713 | 3,975 | 11,406 |

製造工業の發達が農業の機械化を齎したことは言ふまでもないが、それは小農の生活を脅し、農業を資本主義化することでもあつた。狭小な土地を自分の手で耕してゐる農民が高價な機械を仕入れることは出来ない。併し我々は茲で上記の表に於て、1900年度の工場数が十年以前、二十年、三十年以前よりも減少してゐるのを見逃すわけに行かない。第十九世紀末に到つて産業上の集中化が行はれ始めたために、小工場は姿を消して大組織の工場が建てられるようになった。諸方に點々として散在した工場が少數の樞要地點に於て榮えるようになった。そして個人經營のものが急に跡を絶つて、會社の手で企業かなされることになり、遂には巨大なるトラスト組織の出現とまでなつたのである。

産業發展の物的要素に就て略述した後に、我々は人的要素に眼を轉ずるのが順序であるだらう。第一に人口の増加であるが、1860年に三千百四十四萬を算した合衆國全人口は、四十年後の1900年には倍加して七千五百九十九萬人となつてゐる。此増加した人口は全國へ均等に振りまかれたのでなく、産業の都會集中のために、都市居住者は農村の人口に比して遙かに増加した。

1880年に都市總人口は千四百七十七萬人、農村人口は三千五百三十八萬人であつたのが、1900年には前者は倍加して三千七十九萬になつたのに対し、
1860? 後者は四千五百十九萬人にしかなつてゐない。個々の都會の膨脹も著しい

ものがあつて、六大都市の人口を表示すると次のやうである。

| 年次 | 1860 | 1900 |
|--------------|-----------|-----------|
| New York | 1,174,700 | 3,437,200 |
| Chicago | 109,260 | 1,698,570 |
| Brooklyn | 279,120 | 1,166,580 |
| Philadelphia | 565,520 | 1,293,690 |
| St. Louis | 160,770 | 575,230 |
| Boston | 177,840 | 560,890 |

都市が産業の隆昌を擔ふて顔を輝かしてゐると單純に考へてはならない。産業の中心地では搾取と被搾取の關係が尖鋭化され、ブルジョアとプロレタリアの階級的對立が意識的になつて行つた。産業の個人經營が會社組織、トラスト、と變つて行つたのと同じく労働者側では組合運動、政黨組織までが成長するようになった。尤もアメリカの労働組合はその發達が極めて遅々たるものがある。その理由として Anthony Bimba が列挙してゐる所のものは、(1)ブルジョアよりの妨碍、(2)労働者自身がブルジョアの心理に支配されてゐること、(3)労働者がアメリカ生れと移民とに分裂し、更に移民がそれぞれの本國を異にするに従つて分裂せること、(4)献身的な労働運動の指導的闘士の缺乏、などである。(Bimba: *History of the American Working Class*, pp. 191-2, 参照。) 是等の理由の中、(2)と(3)に就ては茲で注意して置きたいが、前者に對する若干の説明が Calverton によつて與へられてゐる。産業並びに財政の發展が在來の小ブルジョアの地位を危殆に陥れたのみでなく、それは増大する一方の新しいプロレタリアを發生せしめた。そして大ブルジョアが小ブルジョアに壓迫を加へること愈々強ければ、後者に屬した者が益益多くプロレタリアの中へと落ち込んで行く。過去に於てはアメリカの制覇

戦は大ブルジョアと小ブルジョアの間で戦はれてゐた。勿論、第十九世紀に入つてからはブルジョア對プロレタリアの闘争が常に見られはしたけれども、それはアメリカ・プロレタリアの政治的見解ならびに経済的論理が小ブルジョアのイデオロギーに依據してゐたと云ふ事實によつて曖昧にされてゐたのである。“The proletariat was wage-conscious but not class-conscious.” (*The Liberation of American Literature*, p. 370.) 労働者階級の多数の者が個人主義に執着してゐた。労働者と雖も富を致して現に屬する階級を脱し、ブルジョアの住む美しい宮殿樓閣に身を置くことが出来ると考へる者が少数ではなかつた。此様な考へ方が實現不可能と判るような時代が来たにも拘らず、彼等は徹底的に階級意識に眼醒めることが六ヶしかつたのである。かくては労働運動が榮えないのも不思議はないのだつた。

労働者の意識の問題は更に彼等の實際運動の問題へと發展させなければならぬが、それに就ては後に稿を新たにして述べる所があるであらう。茲では南北戦争後の移民に關して少しく説明を加へるに止めよう。南北戦争に際して武器を取つて立つたアメリカ労働者は約百萬人に上つたと傳へられてゐるが、彼等の場處を充たすために新たなる労働力が要求された。家に残つてゐた労働者は賃銀値上と、條件の改善を計つた。これは戦争による物價の騰貴に原因したのであるが、労働力の不足を補ひ、また労働者の要求を拒否する上には、歐羅巴からの移民を迎へ入れるのが資本家にとつて最も都合の好いことであつた。移民のために渡航費を融通してやることが出来れば、それで凡てが解決できるのだつた。大統領 Lincoln は 1863 年十二月、聯邦議會に契約労働移民に關する法案通過を迫り、翌年に到つて contract labor law が出来上つた。それによれば、アメリカ事業家は代理者の手を経て、歐羅巴から労働者を輸入し、その渡航費の補償として十二ヶ月間は彼等を奴隸

同然に使役することを許されたのである。此法律の影響として、俄然移民の數は増した。そして 1882 年に於ける入國移民は七十九萬人といふ未曾有の多數に上り、西部及び中部歐羅巴よりの移民は此前後を境目に減するようになると共に、新しく歐羅巴の東部及び南部諸國からの移住者が之に代つた。1882 年以後は伊太利、埃太利、洪牙利、南方魯西亞その他地中海沿岸からの到着者が斷然他を壓した。その概數を次に掲げて置く。

| 年次 | 入國移民數 |
|-----------|-----------|
| 1861-70 | 2,314,800 |
| 1871-80 | 2,812,100 |
| 1881-90 | 5,246,600 |
| 1891-1900 | 3,844,400 |

かゝる多くの外國生れの労働者が第十九世紀末年のアメリカ社會一般に如何なる影響を與へたであらうか。これはアメリカの資本主義の成立に最も大いなる側光を投げかける問題でなければならない。『アメリカ労働階級史』の著者は次の如く述べてゐる。“This great army of immigrants came mainly into the large cities and took up the hardest, the most dangerous, and the lowest paid jobs in industry and on the railroads. On the other hand, they brought with them radical-revolutionary ideas which had drawn a much greater army of discontented workers under their influence in Europe than in America. Thus the revolutionary movement in this country got its footing first among the foreignborn workers.” (Bimba: 上掲書, p. 140.)

第十二章

アメリカ開拓線の發展

開拓線といふ言葉は讀者に耳新しいかも知れないが、之を英語で frontier と云ひ、pioneering などと言ひかへても實質的には異なるものがないと語つたならば、恐らく諸君はそれが何を意味するかを比較的容易に理解されるであらう。詩人 Whitman の有名な詩に *Pioneers, O Pioneers!* のあることを知る人は、北アメリカ大陸の東から西へ、山を越え、森林を伐採し、大草原に野牛を逐ふ精悍なる人々を想像して、彼等こそ最もアメリカ的な存在であると感じてゐるに違ひない。彼等の足跡、彼等の丸木小舎、そんなものは何時の間にか形を消して、よく耕された農場や、発電所や工場や、自動車道路が今ではアメリカ合衆國全土を蔽つてゐる。にも拘らず pioneers の心理は、心的特徴は現代アメリカ人の性格を形作つてゐると言はれる。今日のアメリカ文明は frontier の産物に外ならないと言はれる。我々はその意味を明かにするために、frontier の歴史を——その西漸と終末を一通り述べてみようと思ふ。frontier といふ言葉は從來『邊境』と譯し用ゐられてゐる例が多いけれども、それではアメリカ史に於て此語が有する特殊な意味、即ち動的要素を表現せぬ憾みがあると考へられるので、筆者は之に『開拓線』の譯語を與へたのである。近代國家成立後の歐羅巴で獨逸と佛蘭西の國境を frontier と呼ぶ時、それは必ずしも動的な意味を負つてはゐない。だがアメリカで frontier と言へば、それは日本歴史に於ける四道將軍時代の東夷征討、地方開發と似たものがあつて、“a moving line of settlement with the unin-

habited public domain before it and the settled country behind” (Blankenship: *American Literature* p. 60) を意味したのである。

アメリカに於ける英吉利植民地は、舊世界の人々から見て明かに一つの frontier であつた。併しこの植民地そのものが發達するに従つて、古くからの定住地に對して新しく frontier が發生し來つたことは極めて自然であつた。此新しい開拓者は常に舊大陸よりの到來者であつて、先住者に比較して數段劣る社會的地位を占めてゐたのであるが、時代の進むと共に古き定住地の住民たちに對する勢を示し來り、やがて一定の地域を劃して新しい政治的勢力を張るに到つた。そして、uninhabited public domain の存する間は同様の事が繰返されて、合衆國は新しい州を一つ一つ加へて行つたのであつた。だが遂に十九世紀末、即ち 1880 年代に及んで、開拓線は消滅する時期に達した。そのことを公の記録によつて裏書させるとすれば、1890 年の國勢調査報告書の言葉を引用するのが最も便利である。——“Up to and including 1880 the country had a frontier of settlement, but at present the unsettled area has been so broken into by isolated bodies of settlement that there can hardly be said to be a frontier line. In the discussion of its extent, its westward movement, etc., it can not, therefore, any longer have a place in the census reports.” (F. J. Turner: *The Frontier American History*, p. 1 に “bulletin of the Superintendent of the Census for 1890” よりとして引用。) そして開拓線そのものの發展と消滅が歴史家の研究對象として問題とされ、一つの解釋に到達したのは 1890 年代のことであつた。即ち此方面の研究の第一人者 F. J. Turner 教授が、1893 年の夏 Chicago で催された American Historical Association の會合で發表した研究論文、“The Significance of the Frontier in

American History” はその基礎を置いたものとされてゐる。(此記念すべき研究は他の論文と共に *The Frontier in American History*, 1920 年出版を形造つてゐる。)

擧げてアメリカ史に於ける開拓線の重要性に就ては以上の片言で暗示しえたかと思ふので、以下に於てはそれの具體的な歴史を少しく述べてみよう。前述の如く、開拓線は植民地時代から既に存してゐたのであるが、獨立戰爭の少しく前にアパラチアの山を踏みこえて、今日の Kentucky にまでそれは進出してゐた。植民地時代に於ける開拓線の發展は比較的遅々たるものがあつた。今、大西洋岸の低地方を一瞥するに、北は New England から南は Carolinas から Georgia に到るまで、すべて背後には一脈の連山を控へ、低地方そのものは更に瀑布線 (Fall line) によつて東西兩部に分たれてゐる。瀑布線は南部に於ては北部に於けるよりも遙かに海岸から遠ざかつゐるけれども、平均してほぼ百哩の内地に一線を劃してゐて、その東側の低地方は Tidewater と呼ばれ、西側につづく稍高地をなす地方は Piedmont [pi:dmont] と呼ばれてゐる。最初の植民は此 Tidewater 地方に腰を据え、間もなく貴族的な地主階級の勢力の根源となつた。Piedmont 地方にはそれ以後の移住民が定住し、海岸地方の古き植民者とは友好關係にあることが稀であつた。かくの如き對立關係は南部地方の Virginia に於て最も激しく、Virginia 植民地に於ける初期の歴史は殆ど常に此關係が中心になつてゐると云はれるほどである。然らば第十八世紀に入つてから歐羅巴より新大陸に移住した人々は如何なる性質のものであつたらうか。嘗てアメリカ人口の民族的構成に就て述べた時にも觸れたことではあるが、それに就て Parrington の言葉を引用して置きたい。“Immigration in the eighteenth century was almost wholly economic in motive. The reports of free land and

free opportunity in America penetrated to remote hamlets of Great Britain, and more slowly to the continent, and drew hither a rude influx of the dispossessed and disinherited of Europe. From the hopeless poverty of great masses of old-world laborers, increasing numbers sought escape through emigration, accepting the hardship and uncertainties of the migration in the hope of bettering themselves ultimately. A host of English nondescripts—broken men, bond servants, 'gaol birds', the leas and settlings of the old world—came overseas, voluntarily or under duress, in numbers running into the hundred thousands, and shared with German peasants from the Palatine, or Scotch-Irish from Ulster, the back-breaking labor of subduing the wilderness." [第十八世紀に於ける入國移民は殆どすべて經濟的動機に因るものであつた。自由に手に入る土地、自由な機會がアメリカにはあると云ふ報知が英國の僻村の隅々にまで行渡り、それが歐羅巴大陸へも擴がつて行つて、アメリカの地へ歐羅巴で相續權を失ひ財産を剝奪された人々がざわざわと引きつけられて來た。希望を打毀された舊世界の窮乏せる労働大衆は續々として國外移住に通路を求め、艱難多く不安に満ちたる浮動の生活を甘受して、究竟に於て自らの境涯を向上せしめるとの希望をはぐんでゐた。無名の英吉利大衆——破産者、奴隸、囚人、舊世界の殘滓や沈溺物といふべきやくざ者——が海を渡つて、或は自ら進んで、或は強制されて、幾十萬と數へられるほど到來し、パラタイン領の獨逸農民とかアルスター地方の蘇克蘭系愛蘭人などと共に、刻苦して荒野開發の勞役に従つたのである。] (Vernon Louis Parrington: *The Colonial Mind*, p. 133.)

是等の移住者が New England にあつても、中部、南部の諸洲にあつて

も瀑布線以西の土地を占據して、文字通りに黙々として労働し、黙々としてアパラチアの麓から、その峽をわけて新しい西部地方の開拓に貢獻したのであつた。彼等は文字を書き残しもせず、議論も戦はず、思索をめぐらすことも稀であつた。彼等にとつては考へるといふ事よりも其日其日の勞役が大事だつたのである。アパラチア分水系を舞臺として活動した當時の無言の男女は自分達の歴史的役割を自覺してはゐなかつた。英吉利植民地が大西洋の海岸地方に限られなくなつたのは十八世紀の中頃以後で、彼等植民地人が自然の障壁を越えて更に西部地方へ進出するためには幾つかの通路を見出さねばならなかつた。New England 勢力は Hudson 河の西域から Mohawk [ˈmou-hɔ:k] の溪谷を溯つて Western Reserve と呼ばれる地方 (Erie 湖の南岸に沿へる地域一帯) にまで伸び、そこから Ohio 州の北部から Illinois, Michigan, Wisconsin, Minnesota 諸洲への發展が約束された。それよりも稍南に當つて、所謂 Cumberland Gap と稱する通路から Kentucky へ出で、Ohio 河流域から Mississippi の溪へつづく地域も早くから開拓者の注目する所となつたのであるが、同地方はフランス人が所有權を主張し、1763 年までは英吉利人に手を觸れさせなかつた。それ以後も獨立戰爭當時まで英吉利本國政府の政策によつて、該地方に植民することは禁じられてゐた。そのために見す見す此 Ohio 河流域の地の開拓は遅延したのであつた。しかも一度足が此に踏入られるや、東部諸地方の過剰人口は忽ちにして潮のやうに寄せて行つた。

併しながら土地に興味あるひは利害を感じるのは腕一本の農民ばかりではなかつた。一般農民のために合衆國政府は、その成立の當初に於ては、一エーカーに付き一弗の割合で賣却した。土地會社が幾つか現れて、たとへば Ohio 州では 1786 年には百五十萬エーカーの土地を求めて Marietta の町

が建設され、1788年には他の会社が百萬エーカーを購入して Cincinnati の町、1796年には別の会社の手で Cleveland の基礎が成つた。中央政府では土地の賣却によつて國庫収入の増加を豫想したのであつたが、事實は之に反し、土地測量と登記費用のために代償の大半は用ゐられて了つた。それで1796年地價を倍にして一エーカーに付き二弗とし、之を年二回に分納することを許すことになつた。併し此改正も思はしい結果を齎らさなかつたと云ふのは、收穫不良の時は地代の支拂が滯滞し、また良作の年にも生産品運搬が困難なため適当な市場を得ること難かつたからである。かくて第十八世紀の最後の四年間に賣却した土地は五十萬エーカーにすぎなかつた。同じ頃に土地投機が横行したのは有名な事實で、或る經濟史家によれば、“George Washington, Thomas Pickering, Benjamin Franklin, Patrick Henry, Albert Gallatin, John Marshall, Robert Morris, and others brought huge tracts of lands in the West, at prices as low as ten cents an acre.”と記録されてゐる。茲に擧げられた人々はいづれも官途の、または民間の有力者である。尤もかうした土地投機で失敗した人もあつたので、Princeton 大學總長 Reverend John Witherspoon の如きは Vermont 州の土地のために投資したが利益が上らず、獨立戰爭に際して軍用金を調達した上記の Robert Morris は一時は數百萬エーカーの土地を Virginia, Maryland, Pennsylvania, New York の諸洲に所有してゐたこともあるが、遂には負債のために投獄され、無一文で此世を去つたと云ふ話もある。

黙々たる開拓者が漸く自覺して自己の社會的勢力を政治的に活用するようになつたのは第十九世紀も二十年代以後のことであつた。既に1800年の大統領選挙に際して、中小農民の味方として立つた Democrat 黨の Thomas Jefferson が勝利をえたけれども、それはまだ新開の西部の勢力を實踐する

ものではなかつた。その新勢力は1828年の選挙に於て、Andrew Jackson が大統領の椅子を占める様になつた時に、始めて合衆國民全體の耳を欽だたしめたのである。此頃までに開拓線は Illinois あたりの大草原にまで進出してゐたし、1840年代には Mississippi 河を西へ渡つて伸展してゐた。ところが此西へ向つて進んで已まない開拓線も、Missouri 河のあたりで一時的に停滯して了つた。それは西部の曠野が Rockies の障壁に行き當つたのと、また他の理由としては1849年に太平洋岸の California に金銀が発見されたが爲に人々の注意が逸らされたのに因ると考へられる。1850年から1890年までの間に、二つの開拓線が、一つは東から、今一つは西から、未開拓の高原地帯——それは Rockies と Sierra Nevada の二大山系によつて圍まれた地方である——を侵蝕して行つた。開拓線發展史の上で此最後の約四十年は、向上期にあつたアメリカ資本主義と關係させて考へる必要があるので稿を改めねばならぬが、開拓線に於ける一つの變り種として Utah に建設されたモルモン教徒の社會に就て一言を費すことは無意味ではあるまい。それは開教百年記念をつい先頃迎へたのであるから、それだけからでも我々の興味を惹くに充分ではあるまいか。

Mormons として知られる Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints の發生は、基督の復活後まさに千八百年目にあたる1830年四月六日火曜日にあると傳へられてゐる。その日 New York 洲の Fayette といふ小村落で二十五歳になる一青年 Joseph Smith (1805-1844) が眞の教會を樹てた。彼に従へば、バベルの塔から新世界へ移住して來た種族の物語を刻んだ黄金の板が発見され、それによつて彼等がアメリカ土人の祖先であること、彼等の英雄として豫言者 Mormon のゐることなどが明かになつたのであつた。彼 Joseph Smith の教説に耳を傾け、彼と心を合せてその道を實踐する者

の数が漸く増して行つたけれども、その仲間を排斥する者は一層多かつた。彼等は轉々として合衆國の諸地方を渡り歩いた末、Smith が暴徒のために殺害されたので、彼に代つた Brigham Young (1801-1877) は 1847 年に、當時はメキシコ領であつた Utah の Salt Lake のほとりに安住の地を定めた。Brigham Young と彼の信者の一團が Salt Lake に到着したのは夏の真中であつたが、やがて千五百人を數へる老若の男女に迎へられて、彼等の本據は堅實に發展し、三年の後には人口一萬一千を擁する一つの社會が曠野の中央に出現した。その成功の所以を究ねる者は指導者たちの賢明な政策を稱賛することに於て一致してゐるのであつて、たとへ漫然たる旅行者と雖も、かの “plural marriage” の制度に眉をひそめることはあつても “the ancient and persistent enemy of mankind, undeserved poverty” は Utah に於ては之を見ることが出来ないと斷言するのである。Mormons の植民社會にあつては投機や商利を目的とする反社會的要素は徹底的に排撃され、各家族の必要に応じて土地が分割して與へられると共に、生産物の處分も必需品の購入もすべて公共の機關を通して處理された。灌漑の工事とそれの利用もすべて社會全體の利益のために考慮され、實行された。此様な生活の指導精神を批評して Beard 教授は、“the central idea was general comfort, not the enrichment of individual—an idea pursued with keen discrimination, as Young steered a steady course between the perils of communism and the menace of disruptive individualism,” (*The Rise of American Civilization*, Vol. I, p. 625) と述べたが、これ自由主義者の立場からよく Brigham Young の政治家的手腕と洞察の非凡なりしことを指摘したものと言へよう。Mormons のかゝる生活原理は開拓線上の他の多くの社會のそれと全く異なるものであつたところに、彼等が他より排撃された理

由の一半があつたと考へられる。或る論者は次の如き言葉で此事を評した。—“Instead of organizing their communities in the haphazard devil-may-care manner, which characterized most of the other Western communities, they [Mormons] pursued a plan of state socialism..... Indeed, part of the opposition to the Mormon settlements grew out of this contradiction between their economic way of life and that of the rest of the frontier.” (V. F. Calverton: *The Liberation of American Literature*, p. 240, note 12.)

扱て、第十九世紀中葉までのアメリカ開拓線の發展に就ては以上の概観で満足するとして、次に我々は稿を新たにして、南北戦争以後に於ける開拓線の問題を、American Indians と白人の開争、自作農創定法 (Homestead Act) の成立、それによつて開拓線の消滅が早められた事實、更に此後者と鐵道會社の利權漁りの關係等を中心話題にして語らなければならない。それはやがてアメリカの農民小説の擡頭と結びつけて考へることになるのである。

第十三章

アメリカ農民と鐵道

アメリカの開拓線が第十九世紀の中頃まではミシシッピ河を西に越え、ロッキーの山麓に迫りつつあつたこと、更に太平洋岸に金鑛の發見せられるものあつて、カリフォルニアに新しい開拓線の出現を見たこと、また是等二つの開拓線とは別箇に、一つの植民社會がユタの Salt Lake に近く、モルモン教徒によつて打樹てられた (1847 年) ことを前に語つた。ところで 1859 年に、現今の Nevada 州の地に於て、Comstock Lode と呼ばれる豊富な銀鑛脈が發見されたのが機會となつて、アメリカ全土の fortune-hunters が此山間の一地域へ雪崩れこんで行つた。これと前後して Colorado にも金鑛が發見され、その他 Montana, Idaho, Wyoming, Arizona の諸地方にも貴重な鑛脈を續々と見出されたので、當時の未開拓地も忽ちにして人間の洪水を出現した。所謂 boom towns と稱せられる俄か出來の町にその洪水は漲んだ。二ヶ月、三ヶ月の間に少くとも一萬人の人間が寄集つて來た。元氣のいい併し亂暴な仲間が奇妙な生活を始めた。鑛主、坑夫、商人、博徒、賣春婦、無頼漢がその要素で、黄金を目あての彼等に酒場は付き物、假普請の建物の三軒目に一軒の酒場、それに應じて舞踏場が幅をきかせてゐた。斬つたり張つたり、さては殺人の罪もそこでは日常茶飯事に數へられた。併し此様な町の生活が何時までも存続したわけではなかつた。漸くに官憲の手が伸びるようになつては、在郷軍人の力で治安を保つ必要もなくなつて行つた。そして "bad man" や desperado は影をひそめた。鑛山熱の煽りが減ると、

その後へ牧畜を事とする仲間が進んで来た。それは Texas 地方で最も榮えた。それは Kansas, Nebraska, Dakota 地方へも擴がった。開拓線の進展に伴つて、坑夫や、それから鐵道工夫に供給する肉類の需要も殖える一方であつたのだ。毎年南の Texas から北へ向つて、一千頭ないし一萬頭を數へる牛の群が青草を喰みながら追はれて行つた。一つも柵のない數百哩の曠野を進んで行く間に牛は目に見えて肥えた。彼等が Kansas の鐵道幹線まで行きつく時分には、立派な商品として汽車に積込まれ、或は屠殺場に追込まれた。かうした“Long Drive”の習慣も 1880 年代には終りを告げるようになった。1862 年の Homestead Act によつて大草原の隅々までが私有地として分割され、柵が結ばれて Long Drive は不可能となつた。かの cowboy のロマンティックな生活は定住農民のために消滅したのである。

自作農制定法 (Homestead Act) によつて合衆國の公有地は、定住開墾を目的とする個人に拂下げられることになつた。百六十エーカーの土地が殆ど無償で農民の手に委ねられた。それがため開拓線終末の時期を早めたと言はれてゐるが、實に 1870 年から世紀の終りまではアメリカ農業の最も急速な擴大期であつた。Minnesota 及び Dakota は小麦の栽培で知られ、wheat belt の名がある。この地帯の南方に續く Kansas, Nebraska, Iowa の諸州は玉蜀黍を産出すること夥しい。此地方の農民は多く獨逸および瑞典、諾威よりの移民であるが、現代詩人の中でも大草原の生活を歌ふ Carl Sandburg (p. 1878) が瑞典移民の子として生れたことは茲で注意して置いて可いであらう。併し我々は農業の發達をその工業との關係に於ても考へなければならぬ。例へば農具の機械化である。1878 年に J. F. Appleby の發明した self-binding twine harvester によれば麥を刈り、揃へ、束ねる操作が機械的に行はれ、從來收穫に際して多大の勞働力を必要とした不便を除去したの

である。これがために麥の生産地域が擴大されることになつた。次いで玉蜀黍の收穫機の發明あり、corn-harvester, corn-husker, fodder-shredder 等が使用されるようになった。1885 年頃には既に三十馬力乃至四十馬力の牽引力によつて動く combined harvester and thresher が用ゐられ、麥を刈り、打穀し、淨め、袋に收めるまでの作業が人力を借らずに行はれるようになってゐた。尤も此機械は西部の極めて乾燥せる地帯に於てのみ使用された。更に 1887 年には孵卵器、1880 年にはクリーム分離器の發明あり、それぞれ農家の經營に大革命を齎らした。かかる情勢を文學作品で取扱つたものとして、我々は Sherwood Anderson の長篇小説 *Poor White* (1920 出版) を挙げる事が出来る。その作品の主人公 Hugh McVey は次々に農業用機械の發明を試み、富を得るけれども、彼と同じやうな發明に従ふ者がアメリカのどの地方にも現れつつあることが語られてゐるのである。上述の農家用の器具機械は最も重要な數例に過ぎないが、或る經濟史家の列擧せる所を引用すると次のやうに煩雜なものである、——“gang plows multiple-row corn plows, steam tractors disks, harrows, drills, tedders, blowers, hay loaders, haystackers, bandcutters, self-feeders, feed choppers, manure spreaders, ditch diggers, potato planters and diggers, and innumerable other farm implements and machines came to lighten farm labor and to increase its efficiency and production. (E. F. Humphrey: *An Economic History of the United States*, p. 396.)

農具の改良、機械化がはたして個々の農民に均等に利益を與へたかどうか。此問題は殊更説くまでもあるまい。我々は當面の歴史的記述を進めるに當つて、白人の開拓線の進展が他の存在に如何なる影響を與へたかを一瞥しなければならぬと思ふ。北アメリカ大陸に獨特の野牛はどうなつたか、赤

色印度人はどうなつたか。白人は彼等を利用したらうか。いな、彼等は颯風の前樹木と同じく、片はしから薙ぎ倒されて了つたのである。鐵道の延長、農場の擴張、さうしたことが野生の動物の生存状態に大きな關係を有つた。Bison 或は Buffalo と呼ばれる動物がアメリカ土人の衣食の根源であつたことはよく知られてゐる。土人はその肉を食用に供し、その皮を身體に纏ひ、弓弦や鞆に作り、またそれを白人と交易して屢々金銭とすることが出来た。然るに白人の進出はそれを忽ちの間に不可能ならしめた。南北戦争の直後、Kansas Pacific 鐵道が西部の大草原に伸びると共に、從來野牛の馳驅せる廣大な地域は鐵路を挟んで南北に分たれ、それ以後この動物はスポーツ的狩獵の対象となり、歐羅巴からさへ多くの好事家を招き、やがてその濫殺を結果した。Kansas Pacific 鐵道の看視人 William F. Cody の如きは一年半ほどの間に、自分の手で四千二百八十頭の野牛を斃したと云ふので、“Buffalo Bill” の綽名を得た。そして 1872-74 年の間に南方地域のみで、三百五十萬頭の野牛が屠られたと云はれてゐるから、北方地域に於ける分も加算すれば、その二倍の犠牲が出たわけである。しかも彼等の殘骸の大部分はそのまゝ遺棄され、毛皮の東部地方へ移送されたものは約七十萬であつたとされてゐる。

野牛の大量的殺戮が土人の生活に脅威となつたことは言ふまでもない。1860 年にミシシッピ以西に住める土人の数は三十萬人と概算されてゐた。土地を奪はれ、衣食の途を絶たれて、彼等は飢餓に襲はれざるをえなかつた。彼等は白人との條約によつて、特別地域を Reservations として保障されてゐたけれども、それは必ずしも白人によつて尊重されなかつた。Indian wars と名けられる所のものが頻發した。1862 年にはミネソタの Sioux 族、1863-64 年にはコロラドの Cheyennes 族と Arapahoes 族、1876 年には Comanches 族と Apaches 族、またダコタの Sioux 族に對して合衆

の軍隊が差向けられた。昔ては獨立對等の民族として合衆國政府から取扱はれ、條約を締結したのであつたが、時の進むにつれて彼等はその獨立性を無視されるやうになつた。1871 年に聯邦會議では、アメリカ土人を合衆國の主權の下にありと認める法律案を通過した。それによると、“No Indian nation or tribe within the territory of the United States shall.....be acknowledged or recognized as an independent nation with whom the United States may contract by treaty,” と云ふのであつた。だが、これが一方的な取極めであることは勿論で、白人の攻勢的態度は合衆國第十九代の大統領 Rutherford B. Hayes (1822-93) でさへ、議會に與へた教書 (1877) に於て、次の如く述べてゐるのによつて證明されるのである。——“In many instances, when they [the Indians] had settled upon land assigned to them by compact and begun to support themselves by their own labor, they were rudely jostled off and thrust into the wilderness again. Many, if not most, of our Indian wars have had their origin in broken promises and acts of injustice on our part.” (Quoted by A. M. Schlesinger in his *A Political and Social History of the United States*, p. 269.) かかる事情を理解する時、我々は第十九世紀末葉以來アメリカ文學に Red Indians を新しい主題とせる作品の現れたことを不思議としないのである。Helen Hunt Jackson (1831-1885) の *A Century of Dishonor* (1881) 及び *Ramona* (1884) の出現は半世紀以前に Cooper が描いたやうな “lofty child of nature” として Indians を見ることが出来なくなつたことを實證する。更に、アメリカ文學に現れたる開拓線の研究を書いた Lucy Lockwood Hazard によれば、ネブラスカの詩人 John G. Neihard (b. 1881) の *Song of the Indian Wars* (1925) は “es-

essentially a song of the struggle for the right of way of the 'iron trail' which 'cleft the ancient bison world,'” であると云ふ。(Hazard; *The Frontier in American Literature*, 1927, p. 137, 参照。)

鐵道といふ怪物がアメリカ社會を益し、また害した歴史は更に一世紀に垂んとしてゐる。だが、鐵道會社が社會の敵とまで考へられるやうになつたのは第十九世紀の後半に於てである。1860年に合衆國には三萬哩の鐵道が敷設されてゐた。その後の鐵道がどれほど急速であつたかは、世紀の末年にその延長哩数が十九萬三千哩に及んだことによつて知られる。此間にPullman “palace cars” が旅客の歎稱の的となり(1865)、自動空氣制動器、自動連結装置の出現をも見た。また當時は地方的鐵道會社が竝立してゐたため、二三百哩以上を旅行するには必ず乗換を必要とし、大西洋岸からミシシッピまで赴くには少くとも六回は乗継ぎしなければならぬ状態にあつた。1870年以後になつてはその不便も直通列車の運轉によつて除かれ、小鐵道會社の合同の機運も動いて來たのであつた。

鐵道會社の合同は資本の集中を意味し、資本力の増大は搾取關係の尖鋭化を意味した。

ミネソタ州で鐵道に與へた土地の廣さはマサチューセツ州の二倍の面積に當り、カンサス州での讓與地積はコネチカウト、ニュー・ジャージー兩州に相當したと云ふ記述がなされてゐる。(Theodore Dreiser: *Tragic America*, p. 32, 参照。)此大規模な取引はミシシッピ以西太平洋岸への鐵路建設期に行はれたものであるが、Union Pacific 鐵道がミスリ河畔の Omaha を起點として西へ、Central Pacific 鐵道がサンフランシスコを起點に東へ工事を進め、是等二線がユタ州の Ogden で連絡した(1869年五月)のはアメリカ交通史上特筆大書される事件である。

Gould, Sage, Vanderbilt, Morgan 等の名はアメリカの大ブルジョアとして知られてゐるが、彼等の富が如何にして築かれたかは餘りにも有名である。彼等の常套手段は官公吏、議員の買収、對立會社の内部へ手を廻して屈服させる事、劣小會社を高壓的に瓦解せしめる事、などであつた。彼等の間に激烈な競争の行はれたのは言ふまでもなく、運輸料金の低下のため致命的打撃を蒙つた會社も少くはない。けれども鐵道會社が獨占的權利を振廻す時には、その犠牲となるものは一般民衆であつた。

鐵道と農民の確執の烈しい事例をカリフォルニアに見出して、之を文學作品に再現したのはアメリカ自然主義の先驅者 Frank Norris (1870-1902) であつた。彼はその傑作 *The Octopus: A Story of California* (1901) に於て、西部の詩を書かうと決心したのでつた、——“poem of the West, that world's frontier of Romance, where a new race, a new people—hardy, brave, and passionate—were building an empire; where the tumultuous life ran like fire from dawn to dark, and from dark to dawn again, primitive, brutal, honest, and without fear.”—(*The Octopus*, Book I, p. 7.) 此言葉は作中の一人物 Presley を説明するために述べられたものであるけれども、作家 Norris 自身の意向を語つたと見て差支ないのである。併しながら、彼の歌はんとした情熱的で剛健な西部の民衆は大なる怪物に直面してゐたのである。Presley が一日外出した時、羊の群が鐵路に迷ひ出て機關車に轢かれた場面を見た。羊の悲鳴がいつまでも彼の耳底を去らない、軌道のあたりどころがつてゐる無殘な屍骸はまさに“massacre of innocents” である。——“Presley turned away, horror-struck, sick at heart, overwhelmed with a quick burst of irresistible compassion for this brute agony he could not relieve. The sweetness was gone

from the evening, the sense of peace, of security, the placid contentment was stricken from the landscape. The hideous ruin in the engine's path drove all thought of his poem from his mind."—(*The Octopus*, Book I, 47-8.) 此光景は詩人の魂を美しい詩以外のもので満たした。羊群と機關車の關係はやがて農民と鐵道會社の關係ではないか。Presleyに扮裝せる詩人 Norris は現實主義者となつて、社會の姿をまともに見きはめなければならぬと感じたのである。彼にとつて鐵道は巨大な怪物、章魚のやうに八方に脚を伸ばして、觸れるものを締めつけずば已まない、無情なる超人間的な存在であつた。*The Octopus* の卷頭の一章は次の dithyrambic なパラグラフで結ばれてゐる。

"Then, faint and prolonged, across the levels of the ranch, he [Presley] heard the engine whistling for Bonneville. Again and again, at rapid intervals in its flying course, it whistled for road crossings, for sharp curves, for trestles; ominous notes, hoarse, bellowing, ringing with the accents of menace and defiance; and abruptly Presley saw again, in his imagination, the galloping monster, the terror of steel and steam, with its single eye, Cyclopean, red, shooting from horizon to horizon; but saw it now as the symbol of a vast power, huge, terrible, flinging the echo of its thunder over all the reaches of the valley, leaving blood and destruction in its path; the leviathan, with tentacles of steel clutching into the soil, the soulless Force, the ironhearted Power, the monster, the Colossus, the Octopus."

作家はフラック・ノリスの語つた鐵道と農民の抗争に就ては別に説く折も

あらう。今はアメリカ開拓線の發展の終末と鐵道の交渉を述べる序に彼に言及したのであつた。それよりも、鐵道によつて急激に膨脹したアメリカ大ブルジョアジーが、一般社會生活にどのやうな刺戟を與へたか、それに就て概括的に語ることを我々は次の課題としなければならない。

第十四章

アメリカ獨占資本主義の時代

今日のアメリカ合衆國が獨占資本主義の時代にあることは言ふまでもないので、かゝる發展を見るに到らしめた様々の原因は上來の記述によつて、その大略を暗示しえたかと思ふ。即ち天然資源の豊富と生産技術の進歩、この二つの根本的な原動力を背景として、合衆國の地理的ならびに民族的特質が相結んで開拓線の西漸、やがてその終末を結果したことが既に語られたのであつた。そこで謂はば資本主義の横への發展を主として語つた我々にとつて、次の問題は、その縦への發展を瞥見することではなればなるまい。それが著しい進展の跡を見せたのが南北戦争以來のことである旨は前に屢々繰返して言つた。その特色は、中小の産業が巨大なる組織へ没入してゆくことであり、自由競争の抛棄であり、統制權が少数者の掌中に歸すると云ふことであつた。この傾向を促進せしめた影響力として史家の數へる所のは、高率の關稅によつて資本が鑛山業と製造工業に振り向けられるようになったこと、鐵道網の膨脹が物貨の集散を容易ならしめて新しき市場を開拓したこと、更に大規模經營の運用は鐵道會社をも製造家をも利益して、投資家、株主に對する配當を愈々大ならしめ、需要者に對しては廉價に供給し、良き客あしらひを可能ならしめたこと等なのである。所謂産業の合理化が年を逐つて盛に行はれるようになった事實を指すのである。そして合理化とは、ヴェルガの言葉の如く、古い現象に對する新しい言葉であつて、資本が利潤を高めるために、技術を改善し、搾取の方法を巧妙にして、生産費を引下げ

ることに常に努力してきた、その事實を指すのに外ならない。

このやうにして、工業生産の急速なる發展は經營單位の規模の擴大をも意味するが、それだけでなく、『最小單位以上に出づる巨大經營の数はますます増加し、……その結果は、再び、近代資本主義を特徴づける所の生産のますます擴大される巨大經營の集積傾向である。』(改造社經濟學全集・有澤廣己著)『カルテル・トラスト・コンツェルン』23頁。)我々は此傾向を合衆國の經營調査に就て端的に見ることが出来る。

| 年次 | 工場数 (單位千) | 労働者数 (單位千) | 動力(馬力) (單位千) |
|------------|--------------|---------------|-----------------|
| 1850 | 123 | 957 | — |
| 1860 | 140 | 1,311 | — |
| 1870 | 252 | 2,053 | 2,346 |
| 1880 | 253 | 2,732 | 3,411 |
| 1890 | 355 | 4,251 | 5,935 |
| 1900 | 207 | 4,712 | 10,098 |
| 1910 | 263 | 6,615 | 18,675 |
| 1920 | 214 | 8,997 | 29,323 |
| 1925 | 182 | 8,381 | 35,760 |

之を 1929 年の稍々詳しく調査に就て見れば、大規模經營工場が如何に優勢であるかが明確になる。全國內の工場数は二十一萬で、内譯：—

| | 全工場に對する百分率 | 職工数 (單位千) | 全職工に對する百分率 |
|--------------------|------------|--------------|------------|
| 職工数 500 以上の工場..... | 1.4% | 3,352 | 38.1% |
| 同 100-500 | 11.4% | 2,912 | 33.1% |

同 100 以下 87.2% 2,534 28.8%

産業の巨體 United States Steel Corporation の如きは使用労働者二十五萬人にも達してゐる。

過去半世紀あまりに於けるアメリカ産業界發展の跡を辿るに當つて、我々はまたかゝる組織を動かした所の個人の名を擧げることが忘れてはならない。Steel Kings, Coal Barons, Railway Magnates, Napoleon of Finance — 鋼鐵王、石炭大名、鐵道大盡、財界のナポレオン、などと呼ばれる人々の中でも最も大なる富を致したのは次の如きものである。即ち鐵道事業にあつては Cornelius Vanderbilt (1794-1877), その子 William H. Vanderbilt (1821-1885), J. Edgar Thomson, Jay Gould (1836-1892), James J. Hill (1838-1918) 等があり、石油事業では John D. Rockefeller (1839-1929), Henry H. Rogers, H. M. Flagler, 鋼鐵業では Andrew Carnegie (1837-1919), H. C. Frick (1849-1919), Charles M. Schwab (1862—), また銀行金融の方面では Jay Cooke, J. P. Morgan (1837-1913), E. H. Harriman (1848-1909), 更に自動車工業の Henry Ford (1863—), 發明特許界の Thomas Alva Edison (1847-1930) 等がある。彼等の精力的で利に鋭いことの實例は茲に一々列擧するわけにゆかぬけれども、例へば、作家 John Dos Passos の *The 42nd Parallel* (1930, 邦譯早阪二郎『北緯四十二度』) とか 1919 (1932) とかを見れば、彼等の中でも代表的なるものの生涯のスケッチが出てゐる。John Pierpont Morgan が 1913 年に Rome で歿した時、その嗣子に繼承されたのは、New York, London, Paris 等の國際都市に於ける諸經營であつた。その中には四つの銀行、三つの信託會社、三つの生命保險會社、十の鐵道會社、三つの市街鐵道會社、一つの通運會社等があつた。他にも彼の息のかゝつてゐる事業が少からずあつた。十八の鐵道會社、U. S. Steel,

General Electric、電信電話会社等にも Morgan 系の重役が据ゑてあつた。そして是等の上に振ふ勢力が如何にして生れ出でたのかと言へば、機會と機會を掴む能力が幸したのである。之を Dos Passos は (war and panics on the stock exchange, bankruptcies, warloans, good growing weather for the House of Morgan)——『戦争と株式恐慌、破産、戦債、これがモルガン家にとって豊作日和と云ふものだ』と記してゐる。(Dos Passos: 1919' "The House of Morgan." pp. 335-340 参照。)

Dos Passos は 1919 に於て盛んに石油の匂ひを發散させてゐて、Upton Sinclair の大作 *Oil* (1927, 邦譯平凡社新興文學全集米國篇・高津正道・ポール・ケイト共譯『石油』) に於けるよりも鋭い箇處もあるほどである。だが Standard Oil トラストの組織を解剖したグラフを見ようと思へば、例へば前記有澤氏の『カルテル・トラスト・コンツェルン』(186 頁)を開けばよい。そして Standard 系諸会社の純利益一覽表 同書 190 頁)によれば、1930 年度に於ては 1929 年度に比して利益が半減してゐるとは言へ、なほそれは一ヶ年に二億二千萬弗といふ巨額に達してゐることが知られるのである。

そしてそれは独占經濟的構成とその進化の研究に對して特殊の興味を提供すると言はれる。即ち『石油工業は、十九世紀の中葉から二十世紀にかけてのその独占資本主義的發展の迅速さにおいて、それが既に達成したところの帝國主義的發展の最高の高さにおいて、また最近科學によつて裝はれた技術が應用せられる範圍の廣大さに於て、己れに比較すべき競争者を有たない。石油工業において我々は初めて純粹培養の帝國主義を見出すことが出来る』のである。(有澤氏著上掲書 161 頁参照。)

以上、我々はあまりにも性急にアメリカ独占資本主義の輪郭を語つた——それは語つたと言ふことが出来ないかも知れない。その發展過程を跡づける

ことを怠つたのであるが、その一面を描いた例を文藝作品に求めるとすれば、Dreiser の *Jenny Gerhardt* (1911) に一つの師話として車輛製造業者のトラスト結成のことが出てゐる。(同書第四十七章その他参照のこと。邦譯新潮社世界文學全集高垣譯『ジュニーゲルハート』。併し場面を制限して、之を個人の經驗を通して眺めることも何等かの補足になるであらう。それには Dreiser の自叙傳に就くのが便宜である。第十九世紀末葉のアメリカ——“the most lurid phase of that vast, splendid, most lawless and most savage period in which the great financiers were plotting and conniving at the enslavement of the people and belaboring each other” (あのとえらい、素晴らしい、法律無視の蠻力時代、財界の群雄が互に謀略を傾け相手の虚を窺つて鎬を削り、民衆を奴隷化しつつあつた物凄い狀勢) のアメリカを回顧して、Dreiser はその Pittsburgh 新聞記者在勤當時のことを、自叙傳 *A Book About Myself* (1922, 一昨年之が *My Newspaper Days* と改題出版された) の第五十九章以下で述べてゐる。Dreiser は 1894 年四月この西部ペンシルヴェニアの工業都市へ來るまでは、ミドルウェスト地方の目を遮るものなき大草原のあちこちを歩き廻つてゐたので、Pittsburgh 附近の brown-blue mountains は實に珍しかつた。だがそれよりも、二十四歳の彼にとつて驚歎の對象となつたのは歐羅巴からの移民炭坑夫の姿であつた。彼は其處で始めて、近代的アメリカを可能ならしめてゐる基底にふちあたつたのである。尤も彼が當時既に資本主義社會の矛盾に目醒めてゐたと云ふのではない。彼は多くの炭坑労働者がアメリカの人買ひの甘言に瞞されて故郷を後にして來たのだとは知らなかつた。労働者の頭をはねる親分やスパイの存在も、會社經營の販賣店による搾取も知らなかつた。彼が知つてゐたのは、十五ヶ月前に 1892 年六月から十二月まで、大争論があつ

たこと、Andrew Carnegie を始め其他鋼鐵王の帷幄の者が邸宅の周圍に電流を通じた鐵條網を張り廻らして、“lawless attacks of lawless working-men” に備へたこと、カーネギーの片腕 H. C. Frick が Alexander Berkman と呼ぶ暴漢のために輕傷を負はされたこと、資本家たちが Pinkerton 暴力團から三百名の應援を受けたこと、等であつた。ただ、何よりも若い Dreiser の心を魅し、占有したのは Pittsburgh の高低のある街筋であつた。明るく照明されたその近代的風貌であつた。

Pittsburgh を貫流する Monogahela の流れを溯ると、Homestead (當時の人口約一萬二千)の製鐵工場地帯がある。そこで闘はれた勞資の對抗戦を Dreiser は直接に見聞しなかつたのであるが、六ヶ月の滞在期間中、彼は“a compound sense of defeat and sullen despair” (敗北と無言の絶望とが交錯した感じ)を受けとつてゐた。その陰鬱な空氣は労働者たちの氣持の反映に外ならなかつた。彼等は十五ヶ月前の大罷業で受けた傷痕を忘れることが出来なかつた、それに加ふるに工場主たちはポーランド人、ハンガリア人、リヌニア人をどしどし輸入して、放逐された罷業者を補充してゐたのだつた。Dreiser は始めてこの地域を訪れた時の印象を次のやうな言葉で記録してゐる——“Along the river sprawled for a quarter of a mile or more the huge low length of the furnaces, great black bottle-like affairs with rows of stacks and low sheds or buildings paralleling them, sheds from which came a continuous hammering and sputtering and the glow of red fire. The whole was shrouded by a pall of gray smoke, even in the bright sunshine. Above the plant, on a slope which rose steeply behind it, were a few moderately attractive dwellings grouped about two small parks, the trees of which were

languishing for want of air. Behind and to the sides of these were the spires of several churches, those soporifics against failure and despair. Turning up side streets one found, invariably, uniform frame houses, closely built and dulled by smoke and grime, and below, on the flats behind the mill, were cluttered alleys so unsightly and unsanitary as to shock me into the belief that I was once more witnessing the lowest phases of Chicago slum-life, the worst I had ever seen. The streets were mere mud-tracks. Where there were trees (and there were few) they were dwarfed and their foliage withered by a metallic fume which were over all. Though the sun was bright at the top of the hill, down here it was gray, almost cloudy, at best a filtered dull gold haze.” (流れに沿ふ三四町の間焙煉爐が低く頑張つて多差してゐた、眞黒な、壘のやうな形狀だ、それに並行して列をなせる煙突だの押潰したやうな建物だのが立つてゐた。その建物からは絶えずハンマーで打つ音、バチバチはねる音が聞こえ、赤熱の焰が見えてゐた。此全景をどんよりと霧が幕となつて蔽ひ、輝かしい日光をも遮るほどであつた。工場の背後にあたつて聳然と丘が連り、その上には幾棟かの感じのよい住宅が二ヶ處の小公園を取圍んで群がつてゐたが、公園の樹木は空氣の缺乏のためにぐつたりとなつてゐた。公園の後ろから横手にかけては幾つもの教會の尖塔がのぞき、失敗と絶望に對して催眠劑の役目を擔つてゐるのだ。裏通りを行くと、きまつて、同じ様式の木造家屋が建てつまり、煙と煤とでよごれ燻ぶつてゐるし、下方、工場の後ろ手の長屋に眼を轉じれば、こつたかへして見るもいぶせく非衛生的な露次の連続、これには嘗てシカゴで見た最悪の貧民窟を今一度目のあたりに眺めてゐるのかと、ただもう愕然と

なるばかりである。往來は泥田も同然。樹木といふ樹木（と言つても數へるほどしかないが）みな發育不充分で、その葉はあたりに瀰漫せる金屬の毒氣のために生色を失つてゐる。太陽の光は丘陵の頂上では燦爛たるものがあるのに、低い此邊では灰色に見え、殆ど曇天同様、よくしたところでどんよりした金色の霧の中にでもゐるやうだ——*A Book About Myself*, p. 391.

かゝる状態を眺めた Dreiser が如何に之を解釋したか疑問である。彼は別の自叙傳 *Dawn* の末尾で語つたやうに、“wondered and stared”（驚きの眼を睜つて諦視してゐた）にすぎないのであらう。*Dawn* は 1931 年出版、幼少時代から二十歳までの経歴を語つたもので、*A Book About Myself* には直ちに之に續く四五ヶ年の経験を記録してある。併し此時、彼の眼を新しい世界へ見開かせてくれた一人の友人があつた。それは労働記事擔當の記者で、労働者階級に同情を寄せてはゐたが、アメリカの労働運動は hopeless だと言つた。“They hadn't the subtlety and the force and the innate cruelty of those who ruled them. They were given to religious and educational illusions the parochial school and church paper, which left them helpless.”（彼等労働者はその支配者たちの有する狡猾も、暴力も、内在的殘虐性もすべて有たぬ。彼等労働者は宗教と教育に關して幻影を懐いてゐる。教區學校と教會の刊行物に關してであるが、そのために手も足も出ないのである。——*A Book About Myself*, p. 393.）そして此労働記者は資本家の攻勢に就てもよく知悉してゐたのだつた。彼に従へば、資本家たちは労働者の組織團結を絶滅せしめないまでも、それを歩行困難に陥らしめる計畫を實行に移さうとしてゐた。そのために彼等は低賃銀で満足する歐洲移民を全国的に氾濫せしめようと策してゐたのだ。そして彼等移民労働者を利用して、高賃銀のアメリカ労働者の要求を一蹴し去らんとし

てゐたのだ。此人物と交るようになつてから Dreiser は労働者の生活を親しく觀察し、それに対する見解も漸く正確になつて行つたのであるが、それはそれとして、其後移民労働者が現代産業界に於ける重要性が如何なるものであるか、労働者の立場を一般的に記述する前に、その現勢を表示して置くのも無益ではあるまいと思ふ。（これは Anthony Binba; *History of the American Working Class*, p. 224. に引用されてある數字を用ゐた。）

| 産業部門 | 外國生れ労働者百分率 (全國労働者に對する) |
|------------|---------------------------|
| 鐵 鋼..... | 58% |
| 石 炭..... | 62% |
| 肉類罐詰..... | 61% |
| 毛 織 物..... | 62% |
| 棉絲紡績..... | 62% |
| 衣 服..... | 69% |
| 製 革..... | 67% |
| 家 具..... | 59% |
| 石 油..... | 67% |

なほ東洋からの移民労働者に就いても一言しなければならないが、1860 年代から 70 年代へかけて支那人労働者が鐵道工夫として盛んに輸入され、1870 年に既に五萬六千人を數へたと言はれるけれども、1871 年 Los Angeles に於ける race riot で二十一人の支那人が殺されて以來、遽に東洋人排斥が起り、移民は漸次減退した。そして第二十世紀に入ると間もなく事實上支那移民は禁止されて了つた。日本移民が問題になり始めたのはそれ以後のことで、1906 年に日本人小學兒童を白人兒童と區別して取扱ふと云ふ事件からであ

つた。併しながらアメリカ合衆國自身にとつて是等東洋移民よりも比較にならぬほど大きな問題は黒人である。殊に世界大戦後、工場労働者としての黒人の地位が認められるに及んで、彼等は階級的自覺をえて白人労働者と提携し、今やその行動は廣く注目の焦點となつてゐる。だがその問題を詳説する餘裕が茲には與へられてゐないので、次に我々は歴史的記述の順を追ふて、労働者の運動を回顧的に跡づけなければならない。

南北戦争を境にアメリカ工業資本主義が向上期に入つたことは、他面労働運動の擡頭をも意味した。それよりも早く既に 1825-35 年頃から機業界には産業労働組合が芽生えてはゐたが、その工場組織の幼稚にして小規模なること莫吉利に及ばざること遙かに遠いのみならず、獨逸に於けるよりも劣つてゐたから、近代的労働者の組織としては殆ど無力であつた。それに當時の craftsmen や mechanics は必しも常に被働者ではなく、使用者にもなる機会が多く、實際に組合會員の中に主人格のものも屢々見られた。それで彼等の個人主義的な考へ方が農民の考へ方に接近してゐたのも不思議はなかつた。開拓線の展開につれて工場も増加したけれども、労働階級の團結によつて有利な結果を見なかつたと云ふのは、古い工業地域の労働者は新しい地方に移住せず、新しい地方の開発と共に新しい労働者が地方的に出現した。しかも彼等は古い労働者と連絡が取れてゐなかつたのである。東部地方の労働者が階級的なプログラム乃至イデオロギーの確立を企てても、それは西部の新開地方にあつて農民的小市民的イデオロギーの影響下にある新しい労働者のために發達を阻止され、また覆された。アメリカに於ては歐羅巴とは事情を異にし、新しい集團が地方的に發生したので、經濟關係、階級關係を常に低度の様式から繰返し發達せしめて行かねばならなかつたのである。その背景にあつて常に之を擧げつてゐたとも言ふべきは、壓倒的な農民の存在であつた。

彼等は數に於て労働者よりも大であつたばかりでなく、その發達の歩調も極めて速かであつた。従つて、労働者の間に直接的な労働條件に関する要求以上の一般的な政治上の要求が成形する時には、それは大抵の場合に急進的な農民のスローガン、プログラム、イデオロギーが採用された。つまり南北戦争前期にあつては、アメリカ労働運動は、utopian socialism と對比して考へる時、之を理解し易いと評される所以である。1850-60 年頃になつてアメリカ工業は一段の飛躍を見たとは言へ、まだ組合の組成分子は主として craftsmen と mechanics とであつた(労働の使用者は除外された。)そして黒人奴隸問題が論議されたけれども、労働者自身は西部の土地開發問題に寧ろ多く心を惹かれてゐた。1857 年の恐慌が來た時、組合は事實上潰滅に歸し、やがて南北戦争の到來を見た。組織労働者は反戦行爲に出づることを謀議したが、ものにならなかつた。彼等は獨立したプログラムを有つてゐなかつたのである。彼等は西部の農民、および北部の資本家の消極的協同者であつた。南北戦争後、改造期の問題は、政治的には主として、北部の小ブルジョア的不平分子が南部と結托することを沮むことにあつた。若し是等兩者が協力すれば、新興の北部資本家の代言者 Republican Party (1854 年結成) をその專權的地位から轉落せしめ、聯邦中央政權の工業資本家による獨占を不可能ならしめる危険があつたのである。

扱て南北戦争後に於て労働運動は再興の機運に向つた。活潑なる工業化と賃銀低減がその主なる原因として擧げられるであらう——生活費は七割の高騰を見たのに、賃銀は三割しか上らなかつたのである。既に 1870 年までに労働組合の運動が強くなり、それから約二十五年間は歐羅巴に於て 1860 年以前に見られたやうな闘争的な時期であつた。1865 年十一月に於て異る六十一の産業別労働組合所屬の地方的組織が約三百あつた。1871-72 年の間に

於て、組合員の買数は三十萬人と數へる人があり、また六十萬人と稱する人もある。1873 年末までに全国的及び國際的な労働組合の數は二十二に達し、その中で主要なるものは International Coopers' Union of North America (1870 年成立)、Miners' National Association, Brotherhood of Locomotive Firemen (以上 1873 年成立) 等であつた。此他に National Labor Union が 1866 年に五十の組合から送られた代表によつて Baltimore 市で組織され、その決議には注目すべきものがあつたが、重要な問題を解決しえずして早くも 1872 年には解體してしまつた。1873 年の恐慌の影響が又もや労働者の團結を弱めたとは言へ、1879 年頃に到つてそれは勢力を盛返して來た。そして此頃の運動が二つの流れに別れたことは専門研究者の指摘する所である。第一のものは熟練労働者よりのみ成る craft unions の組織により、第二のものは特殊の地域に於けるあらゆる労働者の組織によるものである。前者を代表するのは 1879 年に、Cigarmakers' Union の指導者たる Strasser と Samuel Gompers (1850-1924) とによつて計畫され、成立を見た Federation of Organized Trades and Labor Unions of the United States of America and Canada であるが、今日の American Federation of Labor はその後身である。その指導精神は Gompers の勞資協調主義であつた。これが成立に當つては、上述の第二の流れに屬する Order of Knights of Labor も参加したが、これは組織分子が雜然として、會員資格は十八歳以上、現に賃銀労働者たる者もしくは嘗て労働者たりし者と云ふので、醫師、辯護士、銀行家等は缺格者とされたけれども、小市民層や裕福な農民は包含されてゐた。此組織も革命的でなく、勞資共働、階級諧調を綱領とした。併しながら指導者の理想は労働者大衆によつては奉ぜられず、屢々爭議の勃發を見た。ところで、社會主義的理論が指導精神として導き入れらるるまでに、アメ

リカ労働運動史上に大きな足跡を印し、またその後及び反動的役割を演じつつある是等の對立的組合の消長をその會員數の變化の中に見るとすれば、次の表を参照するのが捷徑であらう。(Bimba 前掲書の記載による。)

| | K. of L. | A. F. of L. |
|------------|----------|-------------|
| 1879 | 20,151 | — |
| 1880 | 28,100 | — |
| 1882 | — | 50,000 |
| 1883 | 51,900 | — |
| 1884 | — | 100,000 |
| 1885 | 104,000 | — |
| 1886 | 702,900 | — |
| 1887 | 500,000 | 150,000 |
| 1888 | 259,700 | — |
| 1889 | 220,600 | 200,000 |
| 1890 | 100,000 | — |
| 1892 | — | 250,000 |
| 1893 | 74,635 | — |
| 1898 | — | 300,000 |

Knights of Labor の指導した労働爭議は、1883 年の電信従業員の罷業を手始めに、1885-86 年の間に Gould 資本の支配下にある鐵道網に於ける三回にわたる大罷業等、幾多あつたが、1886 年に八時間労働を要求して起つた罷業(参加人員三十四萬人)に於て Federation of Labor が積極的に活動したため、此時期を境目として、Knights of Labor の勢力は頽勢に向つた。尤もそれは一つの機會にすぎず、その諸他の理由としては、指導者の背信、

緩やかな會員資格、明確な經濟的・政治的プログラムの缺如、産業組合との握手を忽諾に附せること、及び資本の攻勢等が擧げられてゐる。——資本家側の聯合會が労働組合に對抗して現れ始めたのも此頃からであつた。——そして、其後十九世紀末九十年代に於ける大争議は、1892年の Homestead と Pittsburgh とにあるカーネギー鋼鐵工場の罷業（此時アメリカで始めて社會主義的理論による指導が實際化されたと言はれてゐる）にしても、1894年シカゴの Pullman Palace Car Company の罷業（此時の指導者は後に Socialist Party を創立した Eugene Debs, 1855-1926, であつた）にしても、軍隊の派遣を見るほどに支配者側が硬化したのと、労働者の組織の間に連絡を缺いてゐたことのために、敗北の苦盃を嘗めたのであつた。それより曩 Socialist Labor Party が 1880 年代末になつて稍々形を具へて來たが、それも既存労働者組織と分離してゐたので生長を見ることができなかつた。——其他 Anarchists, I. W. W., Communists 等の運動に就て一應の説明を必要とするが、それは別の機會に俟たねばならぬ。

アメリカに於ける社會階級の發達は、開拓線の存在によつて特異な道を辿つて來たが 1900 年頃までには、そのやうな事情は殆ど消滅に歸してゐた。開拓線の終末と共に急進的な農本主義は影を沒し、それが労働者に與へた影響も弱まつて行つた。1893 年の恐慌が西部及び南部の農民を窮地に陥れ、彼等の死物狂ひの政治的行動たる People's Party の出現となつたが、それも 1896 年に泡と消えてしまつた。かくて獨占資本主義の確立は 1899 年の米西戦争を相圖として、新時代の面貌をあらはに見せることになつた。それ以來、1914-18 年の世界大戰に到る期間には舊來の小ブルジョア的殘存勢力の最後の花やかな努力が或は muckrakers による政治的社會醜聞の摘發と

なり、或は Woodrow Wilson によつて代表される新自由主義の一時的勝利となり、更に文學的表現に於ては地方的なるものから全國的なるものへ進む路が開かれた。詩、小説、批評、劇それぞれの分野に新しい生命が氾濫しかけた。文學的ナショナリズムが論議されるようになった。その形勢を加速度的に驅つて行つたのが世界大戰で、即ち獨占資本主義は急速に成熟せしめられ、従前のアメリカ的發達を遂げた特異な社會階級關係は解消して爾餘の高度に工業化されてゐる諸國に於けると同一の關係を呈示するようになった。此戦後の、即ち 1910 年代後半以來のアメリカで新しく發達した工業部門を數へれば、石油工業以下、電氣、化學、自動車、航空機等を擧げることが出來、交通運輸の機關としての自動車と航空機は一世代前の鐵道の地位に取つて代らうとしてゐる。さねば作家 Sinclair Lewis が長篇小説 *Dodsworth* (1929) で自動車會社の社長の歐洲漫遊旅行を物語つても、それは Frank Norris が鐵道會社の巨大な力を描いたのと比較して、彼等の社會的關心に於ける軒輊を除いては、決して異とするに足りないのである。我々は今、それらの工業の發展を始めとして銀行獨占と鐵道の問題、外國への資本輸出、農業恐慌、労働者階級の狀態等に就て語る餘裕もないし、それは餘りに重すぎる荷でもあるので、それらに關しては他の適當なる刊行物、例へば叢文閣版、世界經濟叢書の一冊である『アメリカ資本主義の諸問題』に譲るとして、茲には 1929 年に於けるアメリカ合衆國の階級組成を Lewis Corey の研究 (*The Modern Quarterly*, Vol. IV, No. 3—Autumn, 1932) によつて參考の便に供したい。

| [階級組成要素 | 有所得者數 | その百分率] |
|-------------|------------|--------|
| 賃銀労働者 | 27,750,000 | 58.5 |
| 事務員 | 4,750,000 | 10.1 |

| | | |
|---------------|------------|---------------------|
| 小 貧 農 | 3,700,000 | } (62,000,000) 13.0 |
| 中 農 | 2,000,000 | |
| 大 農 | 500,000 | |
| 下層ブルジョア | 5,500,000 | 11.6 |
| 中 間 層 | 2,880,000 | 6.0 |
| 上層ブルジョア | 382,000 | .8 |
| 總 計 | 47,462,000 | 100.0 |

【註——賃銀労働者の中には日稼農業労働者をも含む。ブルジョア階級の区分に就て：下層は年収三千弗以下、中間層は同三千弗乃至一萬弗、上層は同一萬弗以上。】

上表に對する若干の説明を加へると、農民人口は茲では 13% とされてゐるが、それは一世紀前には 70%、六十年前（南北戦争）後には 50% を占めてゐた。しかも今日の農民は抵當に悩まされてゐるので、その總額 1920 年に七十八億七千五百萬弗であつたが、1928 年には九十四億六千八百萬弗に増加し、抵當の利息も 1909-1927 の間に三倍に高騰してゐる。しかも農産物収入の増加は 60% にすぎない。更に借地小作人の全農民に對する百分率は 1880 年——25.6%、1920 年——38.1%、1930 年——42.40% となつてゐる。又、上層ブルジョア階級は人數に於て 0.8% にすぎないのに、その所得額の全國民所得額に對する比率は 1929 年に於て 22% を占め、全國資源の 46% を所得してゐるのである。中間層及び下層ブルジョア階級は國民全所得の 30% を、資源の 32% を占めてゐた。此兩者の中で中間層に屬するもののは大半は独占資本主義組織の直接的產物で、下層に屬するものは舊來の中産階級の遺物と見られる。最後に労働者階級の所得を見るに、人數に於て

68.6% を擁しながら、所得額は國民全所得の 41% で、資源に關しては僅々 4.7% を顔ちもつのみである。そして以上の數字から計算して有所得者たる農民人口 (13%) の所得は 7%、資源所有は 17.3% であることが判る。かくの如き状態を見る時、我々はそれが 1920 年代末から 1930 年代に及ぶ世界的恐慌時代のアメリカ文學に於て、Humanism の提唱と左翼文學の進出を經濟的社會的に基礎づけてゐるものと考へざるをえない。何人が Humanism に左袒し、何人が左翼文藝陣に参加するかは寧ろ第二の問題で、何がかゝる對立を文學の領域にまで齎らしたかを理解することが先づ肝要である。アメリカ文學の歴史的背景を語つた趣旨は此點を幾分にも明らかならしめんことにあつた。

—(完)—

参 考 年 表

(1607-1688)

社 會 的 状 勢

- 1607 *Royalists の Jamestown 上陸。
 1616 [徳川家康の死。]
 1620 *Pilgrims (*Mayflower* 號にて) Ply-
 1625-49 Charles I 在位。[mouthに上陸。
 1628 *Massachusetts Bay Colony 成立。
 1630 *Boston 開市。
 1634 *Maryland 植民地。
 1636 *Connecticut植民地。*Harvard Col-
 lege 設立。*Pequot Indians との
 戦争。*Providence 市 Rhode Is-
 land) Roger Williams によつて創設。
 1638 *New Haven (Conn.) 開市。[島原
 の亂]
 1639 *アメリカに於ける最初の printing
 press (Cambridge)。
 1643 *New England Confederation 成る。
 1648 [Westphalia 媾和 (三十年戦争終
 1649 Charles I. の審判と處刑。[末]。
 1649-60 The Commonwealth in England.
 1651 First English Navigation Act.
 1653-58 Cromwell, Lord Protector たり。
 1659-1715 [フランス王 Louis XIV 在位。]
 1660 The Restoration. Charles II 即位。
 1662 Royal Society 設立。
 1663 *南北 Carolina 植民地。
 1664 *New Amsterdam 占領 (New York
 1666 London 大火。[となる]。
 1673 *Marquette 及 Joliet ミシシッピ河
 を発見。English Test Act (國教會
 に歸信せざる者を官職に就かしめ
 す)。
 1675 *マサチューセツ州に於ける King
 Philip's War (Indian)。
 1676 *Virginia に於て Bacon の叛亂。
 1681 *William Penn によつて Pennsyl-
 vania 植民地創設。
 1682 *La Salle ミシシッピ河を下航す。
 1685-88 James II 在位。
 1688 Glorious Revolution.

文 藝 界 趨 勢

- 1608 *Milton 生る。
 1611 聖書の Authorized Version 成る。
 1612 *Anne Bradstreet 英國にて誕生。
 1616 Shakespeare 死。[Cervantes 死]。
 1619-37 Ben Jonson 桂冠詩宗。
 1626 Francis Bacon 死。
 1628 Bunyan 生る。
 1631 *Michael Wigglesworth 英國にて
 1634 Milton's *Comus* 上演。[生る]。
 1637 *Thomas Morton: *New English
 Canaan* アムステルダムにて出版。
 1638 Milton: *Lycidas*。
 1639 *Increase Mather 生る。
 1640 **The Bay Psalm Book*。
 1642 劇場閉鎖。Newton 生る。
 1647 *Nathaniel Ward: *The Simple Cob-
 ler of Aggawan* ロンドンにて出版。
 1650 *Anne Bradstreet: *The Tenth
 Muse* ロンドンにて出版。
 1652 *Samuel Sewall 英國に生る。
 Milton 失明。
 1653 Walton: *Compleat Angler*。
 1660-69 Pepy's *Diary*. 1825 年出版)。
 1661 Defoe 生る。[*of Doom*。
 1662 *Michael Wigglesworth: *The Day*
 1663 *Cotton Mather 生る。
 1666 *Sarah Kemble Knight 生る。
 1667 Milton: *Paradise Lost*
 1670-88 Dryden 桂冠詩宗。
 1671-6 Wycherley の戯曲上演。
 1672 Steele 及び Addison 生る。
 1673-1729 *Samuel Sewall: *Diary*. (18
 1674 Milton 死。[82 年出版]。
 1678 Bunyan: *Pilgrim's Progress, Part I*
 *Anne Bradstreet: *Contemplations*。
 1684 *Increase Mather: *Essay for the Re-
 cording of Illustrious Providences*。
 1687 Newton: *Principia*。
 1688 Bunyan 死。Gay 及び Pope 生る。

(注) * はアメリカ, [] 内は英米以外の事項を示す。

(1688-1759)

社會的狀勢

- 1688-1702 元祿時代。
 1688-1702 William and Mary 在位。
 1689 Toleration Act (非國教徒の集會を
 1692 *Salem witchcraft (騒む)。
 1693 *此年までに Boston, Philadelphia,
 New York 等に printing press 設
 1700 *Yale College 設立。 [蓄。
 1700 *Yale 大學創設。
 1701 *Detroit 設立。
 1702-1714 Queen Anne 在位。
 1704 *アメリカに於ける最初の新聞刊行
 —Boston News-Letters。
 1707 Scotland と England 聯合して
 Great Britain を形成す。
 1714-1727 George I 在位。
 1718 *Scotch-Irish のアメリカ來住。
 1721-1742 Sir Robert Walpole 英國最
 初の prime minister たり。
 1724 [フランス勅令によりて Catholi
 country となる]。
 1726 *獨逸移民のアメリカ來住。
 1727-1760 Gorge II 在位。
 1728 *B. Franklin はじめて Philadelphia
 に印刷所を設く。
 1729 *Franklin によりて The pennsyl
 vania Gazette (Saturday Evening
 Post) 創刊。 [建つ。
 1732 *アメリカ最初の劇場 Charleston。
 1734 *信仰復興 Great Awakening。
 1740-1786 [Frederick 大王在位]。
 1746 *Princeton 大學設立。
 1748 [Aix-la-Chapelle の媾和]。
 [Montesque 「法の精神」]。
 1749 *Pennsylvania 大學設立。
 *Ohio Company 成立。
 1752 *アメリカにて最初の regular thea
 trical company 上演。 [設立。
 1754 *King's College (現 Columbia 大學)
 1755-63 *French and Indian War。
 1756 [Black Hole of Calcutta]。
 1757-61 Newcastle-Pitt 聯合内閣。
 1759 *Quebec の戦 (Wolfe 將軍戦死)。

文藝界趨勢

- 1693 *Cotton Mather: *The Wonders of
 the Invisible World*. [西語死す。]
 1694 [Voltaire 生る。芭蕉歿す。]
 1700 Dryden 死。
 1700 *Samuel Sewall: *The Selling of
 Joseph*.
 1702 *Cotton Mather: *Magnalia Christi
 Americana*.
 1704 *Sarah Kemble Knight: *Journal of
 a Journey from Boston to New York
 in 1704*. (First published. 1825).
 1705 *Michael Wigglesworth 歿。
 1706 *Benjamin Franklin 生る。
 1709-11 Addison & Steele: *The Tatler*.
 1711-12-14 Addison & Steele: *The Spec
 tator*.
 1712 Pope: *Rape of the Lock*.
 1715 [新井白石「西洋紀聞」]。
 1719 Addison 歿。
 1719-20 Defoe: *Robinson Crusoe*
 1722 Defoe: *Moll Flanders*.
 1726 Swift: *Gulliver's Travels*.
 1728 Goldsmith 生る。 Gay: *The Beg
 ger's Opera*. Pope: *Dunciad*.
 1729 Steele 歿。
 1730 *Samuel Sewall 歿。
 1730-57 Calley Cibber 桂冠詩人たり。
 1732-48 *Franklin: *Poor Richad's Al
 manac*.
 1737 *Francis Hopkinson 生る。
 1744 Pope 歿。
 1749 Fielding: *Tom Jones*.
 Goethe 生る。
 1750 *John Trumble 生る。
 1751 Gray: *Elegy in a Country Chur
 chyard*.
 1752 *Philio Frenan 生る。 [chyard.
 1755 Johnson: *Dictionary of the Eng
 lish Language*.
 1759 Burns 生る。
 *Thomas Godfrey: *The Prince of
 Parthia* (first published American
 tragedy; acted 1767).

(1760-1789)

社會的狀勢

- 1760-1820 George III 在位。「の基礎成る。
 1760 Plassey の戦。印度に於ける英帝國
 1763 *フランス North American posses
 sions を擧げて英國に委ぬ。
 1763-67 *Mason and Dixon line 決定。
 1764 *Sugar Act
 1765 *Stamp Act. 「を發明。
 1767 英人 Hargreave "spinning jenny"
 1769 Watt 蒸氣機関發明。 "Napoleon
 生る]。
 Daniel Boone アレガニー山脈を越
 えて Kentucky に入る。
 1770 *Boston Massacre.
 1771 Robert Owen 生る。
 1772 [Charles Fourier 生る。]
 1773 *Boston Tea Party. 「完成
 Liverpool, Manchester 間に運河
 1774 *第一回大陸會議 (First Continental
 Congress).
 Quebec Act 英國議會通過。
 1775 Edmund Burk 國會にて "Con
 ciliation" の名演説。
 *Lexington, Concord 及び Bunker
 Hill の戦。
 1775-83 *アメリカ獨立戦争。
 1776 *獨立宣言 (七月四日)。 「tions
 Adam Smith: *The Wealth of Na
 1778 Benjamin Franklin フランスに使
 ひして援助を請ふ。[フランスは合
 衆國の獨立を認めて條約を結ぶ]。
 1781 *合衆國聯邦全部 Articles of Con
 federation を批准す。
 1782 英國 U.S.A の獨立を認む。
 1783 *英米間の媾和成る(パリ會議、九月
 三日)。
 *スペインは Florida の地を英國よ
 り獲得す。
 1787 Cartwright 力織機を發明。
 1788 *合衆國憲法十一州によりて批准。
 1789 *George Washington 大統領就任
 (三月四日)。
 [フランス革命勃發]。*

文藝界趨勢

- 1760-61 Goldsmith: *Citizen of the World*
 1762 [Rousseau 「民約論」]。
 1766 Goldsmith: *Victor of Wakefield*.
 *Robert Rogers: *Ponteach* (first
 American tragedy on a native
 theme) London にて出版。
 1770 Wordsworth 生る。 Goldsmith
Deserted Village
 1771 Scott 生る。
 1772 Coleridge 生る。
 1772-3 *John Trumble: *The Progress of
 Dulness*.
 1773 Goldsmith: *She Stoops to Conquer*
 1774 Goldsmith 歿。
 1775 Jane Austen, Charles Lamb 生る。
 Freneau: *Five Revolutionary Sa
 tires*.
 1776 *Thomas Paine: *Common Sense*
 Hopkinson: *A Prophecy*.
 1776-82 *Trumble: *M'Fingal*.
 1776-88 Gibbon: *The Decline and Fall
 of the Roman Empire*.
 1778 [Rousseau, Voltaire 歿]。
 1781 *Freneau: *The British Prison Ship*.
 1782 *Crevecoeur: *Letters from an
 American Farmer* (倫敦出版)。
 [Rousseau: *Confessions*.]
 1783 *Washington Irving 生る。
 1786 Burns: *Poems* (Kilmarnock).
 De Quincy 生る。
 1787 *Royall Tyier: *The Contrast* (職業
 劇演によつて上演された最初のア
 メリカ喜劇)。
 1788 Byron 生る。
 1789 James Fenimore Cooper 生る。
 Blake: *Songs of Innocence; Songs
 of Experience*.

(1790-1815)

社会的状勢

- 1790 Franklin 歿。
 1791 Bill of Rights (合衆國憲法修正十ヶ條)。
 1791-94 英國に於けるCanal Maniaの時。
 1792 Eli Whitney 綿繰機を發明。(代。733-4 [フランス恐怖時代]。)
 1797-1801 John Adams 合衆國大統領。
 1799 Washington 歿す。
 1790-1800 此期間に Rhode Island, Vermont, Kentucky, Tennessee 等合衆國聯邦に加はる。
 1800 合衆國人口五百三十萬(過去十年間に百三十七萬増加)。領域八十九萬二千方哩(現在の領土の23.8%)
 1801 Thomas Jefferson 大統領。
 1801 [英國の愛蘭併合]
 1803 Louisiana をフランスより購入。
 1804 [Napoleon フランス皇帝となる]。
 1805 [Trafalgar の戦]。
 1806 [Holy Roman Empire 滅亡]。
 1807 聯邦議會は奴隷の輸入を禁ず。
 [英國にても奴隷の賣買を禁ず]。
 Robert Fulton の汽船始めて Hudson 河を航す。
 1809-17 James Madison 大統領。
 1809 Abe Lincoln 生る。
 1809 [Metternich 奧太利宰相]。
 1810 合衆國人口七百二十三萬。面積百七十二萬方哩(現在の46%)
 1812-14 對英國戦争。
 1814 [Napoleon エルバ島に流寓]。
 1815 Mississippi の汽船航行、New Orleans より Louisville (Kentucky 州)まで二十五日を要す。New England 其他の地方にて織維工業労働者七萬六千。

文藝界趨勢

- 1790 [Goethe Faust 起稿]。
 1791-2 Paine: *Rights of Man*。
 1791 Boswell: *Life of Johnson*。
 1792 Shelley 生る。
 1793 Godwin: *Political Justice*。
 1794 Bryant 生る。
 1795 Carlyle, Keats 生る。
 1796 Burns 歿。
 1798 William Dunlap: *Andre* (職業劇團の上演せる最初のアメリカ史劇)。
 Joseph Hopkinson: *Hail Columbia* written and sung)。
 Wordsworth & Coleridge: *Lyrical Ballads*。
 1799 [Balzac 生る]。
 1801 *New York Evening Post* 紙創刊。
 1802 [Victor Hugo 生る]。
 1803 Emerson 生る。
 1804 Irving 最初の渡歐。Hawthorne 生る。
 1806 詩人 Wm. Gilmer Sims 生る。
 Noah Webster: *Compendious Dictionary of the English Language*。
 Longfellow 生る。
 1807 [Goethe: *Faust*, Part I]。
 1809 Irving: *History of New York*。
 O. W. Holmes, E. A. Poe 生る。
 [Mrs. Browning, Tennyson Charles Darwin, W.E. Gladstone 生る]。
 1810 [Scott: *The Lady of the Lake*]。
 Theodore Parker transcendentalist) Margaret Fuller (Ossoli) 生る。
 1811 Harriet Beecher Stowe 生る。
 [Thackeray 生る]。
 1812 [Dickens 生る]。 [grimace]。
 1812-18 [Byron: *Childe Harold's Pilgrimage*]
 1813 Crevcoer フランスにて歿す。
 [Jane Austen: *Pride and Prejudice*, Shelley: *Queen Mab*]
 1813-43 [Robert Southey 桂冠詩人]。
 1814 F.S. Key: *Star-Spangled Banner* written and sung)。
 [Wordsworth: *The Excursion*]
 1815 *North American Review* 創刊。出版の中心地は Boston, Philadelphia で、兩市各々から十五種宛の雑誌刊行さる。なほ新聞は合衆國全土に日刊週刊を合せて四百種あり。

(1815-1839)

社会的状勢

- 1815 [Stephenson 蒸汽機関車發明]。
 [Waterloo 會戰, Vienna 會談]。
 1816 [New York-Liverpool 間に定期航路開く]。
 1817-25 James Monroe 大統領。
 1817-42 運河の開鑿盛んなり。
 1817 スペインより Florida を獲得。
 1819 汽船の大西洋航路始まる。
 1820 合衆國人口九百六十三萬。
 1820-30 [英國元首 George 四世在位]。
 1821 Monroe Doctrine 發表。[メキシコ獨立]。
 1825-29 John Quincy Adams 大統領。
 1825 Erie Canal 成る。Mississippi 本支流の航行汽船125隻を數ふ。
 Virginia 大學開校。
 1826 Thomas Jefferson 歿す。
 1828 二政黨の對立—National Republicans 對 Democratic Republicans ("Democrats")
 1829-37 Andrew Jackson 大統領。
 1830 合衆國人口千二百八十六萬。面積百七十九萬方哩。鐵道延長23哩。運河千二百七十哩。
 1830 合衆國人口一千二百八十六萬。入國移民二萬三千人。鐵道延長23哩。大統領 Andrew Jackson (1829年就職)。
 1830 [-37. 英吉利王 William 四世]。
 1831 The American Antislavery Society 設立。
 1832 [英國 Reform Bill]。
 1833 [英吉利帝國全版圖を通じて奴隷廢止さる]。
 1836 Texas 地方、メキシコより獨立す。
 1837 Martin Van Buren 大統領就任。經濟恐慌起る。
 [Queen Victoria 即位]。
 1838 Maryland 州より Illinois 州に到る國道 Cumberland Road, 834 哩完成。汽船 Great Northern 號大西洋横斷、十五日を要す。

文藝界趨勢

- 1815-32 Irving 十七年間歐洲に駐まる。
 1817 Bryant: *Thanatopsis*。
 1819 Walt Whitman, James Russell Lowell 生る。Irving: *The Sketch-Book*。
 1821 *Saturday Evening Post* 創刊。
 1826-29 Longfellow 歐羅巴留學。
 1826 Cooper: *The Last of Mohicans*。
 1827 Poe: *Tamerlaine and other Poems*。
Youth Companion 創刊。
 1828 [D.G. Rossetti, Meredith, Tolstoy, Dostoevski 等生る]。
 1829 詩人 Henry Timrod 生る。
 1830 合衆國の新聞數 825 に上る。
 女詩人 Emily Dickinson 生る。
Godey's Lady's Book 創刊 (1888 年廢刊)。
 1830 Paul Hamilton, Emily Dickinson
 1831 Poe: *Poems*。 [生る]。
 1832 Irving: *The Alhambra*; John Pendleton Kennedy: *Swallow Barn*。
 [Scott, Goethe 歿す]。
 1833 [Carlyle: *Sartor Resartus*]。
 [Balzac: *Eugenie Grandet*]。
 1834 Emerson Concord に居を定む。
 [Lytton: *Last Days of Pompeii* Coleridge, Lamb 歿す]。
 1835 William Gilmore Simms: *The Yemassee*, Poe, "Southern Literary Messenger" 誌の editor となる。
 Mark Twain 生る。
 [Browning: *Paracelsus*] [生る]。
 1836 Longfellow, Harvard 大學教授と Bryant: *Poems*, Emerson: *Nature*。
 1837 Hawthorne: *Twice-Told Tales*。
 William Dean Howells 生る。
 [Carlyle: *French Revolution*, Dickens: *Pickwick Papers*]。
 1838 Whittier: *Ballads and Anti-Slavery Poems*。
 1839 Longfellow: *Voices of the Night* Bret Harte 生る。

(1840-1854)

社會的狀勢

- 1840 合衆國人口千七百〇六萬。入國移民八萬四千人。鐵道延長 2,818 哩。
- 1841 W.H. Harrison 大統領就任。一ヶ月にて死, John Tyler 後を襲ふ。Brook Farm Community 設立—1847 年解散。 「化。
- 1844 Morse の發明にかゝる電信の實用
- 1845 James K. Polk 大統領就任。メキシコより獨立したる Texas が合衆國聯邦に加入せるために、合衆國とメキシコの間に関戦。
- 1846 Mormon 教徒 Illinois 州より Utah に移る。 [英國 Corn Law 撤廢]。癡醉藥始めて用ゐらる。
- 1848 合衆國メキシコと講和, New Mexico と California を割讓さる。 [フランスに於ける政治的變革によつて第二共和國出現, Louis Napoleon 大統領となる。爾餘の歐羅巴諸國にても變革頻繁]。
- 1849 California に金礦發見 Zachary Taylor 大統領就任。合衆國內の工場數十二萬三千, 勞働者五十九萬七千。
- 1850 合衆國人口二千三百二十六萬。入國移民三十六萬人。版圖面積二百九十九萬七千方哩 (現在の面積の八割)。鐵道延長 9,021 哩。Millard Fillmore 大統領就任。
- 1850 合衆國面積二百九十九萬七千方哩 (現在の八割)。人口二千三百十九萬人。入國移民三十七萬人。鐵道延長九千哩。工場數十二萬三千。勞働者九十五萬人。大統領 Millard Fillmore (Whig)。シンガー・ミシン發明 (1840-50 の間に許可された特許件數六千五百)。
- 1853 大統領 Franklin Pierce (Democrat) 就任。Commodore Perry 日本に使者。 「量シカゴ以西太平洋岸までの鐵道開
- 1854 Republican Party 結成。

文藝界趨勢

- 1840 The "Dial" 誌創刊 (四年後に廢刊)。Poe: *Tales of the Grotesque and Arabesque*。 [Thomas Hardy 生る]。
- 1841 Emerson: *Essays*。 Cooper: *The Deerslayer*。 Joaquin Miller 生る。
- 1842 Irving スペイン公使として 1846 年まで在職。Sidney Lanier, Ambrose Bierce 生る。 Tennyson: *Poems*。
- 1843 Henry James 生る。 Wordsworth 桂冠詩人となる]。
- 1844 James Russell Lowell: *Poems*。
- 1845 Poe: *The Raven and other Poems*。
- 1847 Longfellow: *Evangeline*。
- 1848 Lowell: *The Biglow Papers*。 [Thackeray: *Vanity Fair*。]
- 1849 Thoreau: *A Week on the Concord and Merrimac Rivers*。 [Ruskin: *Seven Lamp; of Architecture*。
- 1850 Hawthorne: *The Scarlet Letter*。 Emerson: *The Representative Men*。 Wordsworth 歿す, Tennyson: *In Memoriam*。
- 1850 Emerson: *Representative Men*。 Hawthorne: *Scarlet Letter*。 Whittier: *Songs of Labor*。 Harper's *Magazine* 創刊。
- 1851 Hawthorne: *House of the Seven Gables*。 Melville: *Moby Dick*。
- 1852 Hawthorne: *Blithedale Romance*。 Mrs. Stowe: *Uncle Tom's Cabin*。
- 1854 Thoreau: *Walden*。

(1855-1875)

社會的狀勢

- 1855 Mrs. Carl Schurz によりて幼稚園設立。
- 1857 經濟恐慌。大統領 James Buchanan 就任。
- 1860 全國人口三千百四十萬人 (一平方哩に十人四分の割)。入國移民數十三萬人に減 (1830-60 間の移民總數二百五十萬人)。鐵道延長三萬哩。工場數十四萬。勞働者百三十萬人。此年の特許四千七百件。
- 1861 Lincoln (Republican) 大統領。 1861-65 南北戦争。
- 1862 Homestead Act (自作農土地法) 制定。
- 1863 奴隷解放布告。
- 1865 Lincoln 暗殺され, Andrew Johnson 大統領就任。最初の女子大學 Vassar College 創立。
- 1866 大西洋横断海底電信成る。禁酒黨、婦人參政協會等創設。Ku Klux Klan テネシー州にて發生。
- 1867 ロシアより Alaska を購入。
- 1869 蹴球漸く盛に Princeton 對 Rutgers の對校競技行はる。
- 1870 領土面積三百六十一萬七千方哩 (現在の九割六分)。人口三千八百五十五萬人。1860-70 年間の入國移民數二百萬人。鐵道延長五萬二千九百哩。工場數二十五萬二千。勞働者二百五萬四千人。農業従事者五百九十二萬人。
- 1872-73 八時間勞働要求の運動。
- 1873 經濟恐慌。タイプライタ Remington) 發明。
- 1874 萬國郵便同盟調印。
- 1875 庭球を英國より學び普及せんとす。

文學的刊行物

- 1855 Whitman: *Leaves of Grass*。 Irving: *Life of [Washington]*。 Longfellow: *Song of Hiawatha*。
- 1856 Emerson: *English Traits*。
- 1857 *Atlantic Monthly* 創刊 (Lowell が主筆)。
- 1858 Holmes: *Autocrat of the Breakfast Table*。
- 1859 *Graham's Magazine* (Philadelphia, 1841—) 廢刊。
- 1860 Emerson: *Conduct of Life*。 Hawthorne: *The Marble Faun*。
- 1861 Holmes: *Elsie Venner*。
- 1863 Longfellow: *Tales of a Wayside Inn*。
- 1865 *Nation* 創刊。 *Liberator* (Boston weekly, 1831—)。 *Knickerbocker Magazine* 1833—。 *Southern Literary Messenger* Richmond, 1834—) 等廢刊。 Longfellow ダンテ神曲翻譯。 Whitman: *Drum-Taps*。 Whittier: *Snow-Bound*。 *Galaxy* 創刊。
- 1866 Sidney Lanier: *Tiger Lilies*。 Mark Twain: *The Jumping Frog*。
- 1868 *Overland Monthly* (San Francisco) 創刊。
- 1869 Mrs. Stowe: *Oldtown Folks*。 Mark Twain: *Innocents Abroad*。
- 1870 *Outlook* 創刊。 Lowell: *Among My Books*。 Bret Harte: *Duck of Roaring Camp*。
- 1871 Whitman: *Democratic Vistas*。 Lowell: *My Study Windows*。 Joaquin Miller: *Songs of the Sierras*。
- 1872 Henry James: *Passionate Pilgrim*。 Mark Twain: *Roughing It*。 E. A. Roe: *Barriers Burned Away*。
- 1873 Mark Twain: *The Gilded Age* (Charles Dudley Warner と合作)。
- 1874 John Fiske: *Outlines of Cosmic Philosophy*。
- 1875 Henry James: *Roderick Hudson*。

第十九世紀後半期のアメリカ文學はそれ自身に於て注目すべきであると言ふよりも、現代への準備時代として考へる時、一段その重要性を増すのである。

文學者の生死・動靜

- 1850 Margaret Fuller 歿。
- 1851 James Fenimore Cooper 歿。
- 1851-2 Lowell 第一次歐洲旅行。
- 1852 Daniel Webster 歿。Edwin Markham, Henry Van Dyke 等生る。
- 1853-7 Hawthorne リバプール領事。
- 1853 Mrs. Stowe 奴隷廢止運動の爲漫遊。Thomas Nelson Page, James Whitcomb Riley 等生る。
- 1854 Longfellow ハーバード大學の教職を辭す。Marion Crawford 生る。
- 1856 Bert Harte 加州に移り住む。
- 1856-7 Lowell ハーバードにて Longfellow の後繼者たり。
- 1858 Horace Tranbel 生る。
- 1858-60 Hawthorne 英伊旅行の後歸米。
- 1858-61 Mark Twain ミシシッピ河にて Pilot を勤む。
- 1859 Irving 歿。Augustus Thomas 生る。
- 1860 James Huneker, Hamlin Garland 等生る。
- 1861 Bliss Carman 生る。
- 1861-5 Howells 領事としてベニスに駐。
- 1862 Thoreau 歿。Mary E. Wilkinson Freeman, Edith Wharton, O. Henry 等生る。
- 1862-6 Mark Twain ネバタ州、加州に在。
- 1863 Santayana 生る。
- 1863-73 Whitman ワシントン府に在住。
- 1864 Hawthorne 歿。Paul Elmer More, Richard Hovey 等生る。
- 1865 Irving Babbitt, Clyde Fitch 等。
- 1866-86 Herman Melville ニュ・ヨーク 世に勤務。
- 1867 Mark Twain 歐洲及聖地旅行。
- 1868 Brete Harte *Overland Monthly* を編輯。Charles A. Dana *New York Sun* の主筆となり新經營方針を立つ。E. L. Masters, Robert Herrick 等生る。
- 1869 William Vaughan Moody, Booth Far-kington, Edwin Arlington Robinson 等生る。
- 1870 William Gilmore Simms 歿。Frank Norris 生る。
- 1871 Bret Harte 東部に歸る。Stephen Crane, Winston Churchill, Theodore Dreiser 等生る。
- 1874 Amy Lowell 生る。

世界文學狀勢

- 1850 Tennyson: *In Memoriam*. Emily Bronte: *Wuthering Height*. Wordsworth, Balzac, 佐藤信淵(嘉永三年) 歿。Maupassant, R.L. Stevenson, 小泉八雲等生る。
- 1852 Thackeray: *Henry Esmond*.
- 1853 大英博物館開く。Kingsley: *Hypatia*.
- 1854 Dickens: *Hard Times*. Rimbaud 生る。
- 1856 Flaubert: *Madame Bovary*. Shaw, Oscar Wilde 等生る。
- 1857 Baudelaire 「悪の華」, Conrad 生る。
- 1857-9 Thackeray: *Virginians*.
- 1859 Darwin: *Origin of Species*. Fitzgerald: *Rubaiyat*. Dickens: *Tale of Two Cities*. De Quincey, Macaulay 等歿。Bergson, 坪内逍遙(安政六年) 等生る。
- 1861 George Eliot: *Silas Marner*.
- 1862 Spencer: *First Principles*. Hugo: *Les Miserables*. Turgeniev: *Fathers and Sons*. Hauptmann 生る。
- 1863 Taine 「美文學史」 Thackeray 歿。
- 1864 Tolstoy: *War and Peace*.
- 1865 Arnold. *Essays in Criticism* (First Series). Ruskin: *Sesame and Lilies*. Lewis Carroll: *Alice in Wonderland*. Kipling, Symons, Yeats 等生る。
- 1866 Ibsen: *Brand*. Dostoevsky: *Crime and Punishment*. Wells, Galsworthy, Croce, Romain Rollan 等生る。
- 1867 Baudelaire 歿。Bennett, 瀧石(慶應三年) 等生る。
- 1868 Browning: *The Ring and the Book*.
- 1869 Sainte-Beuve 歿。
- 1870 D. G. Rossetti: *Poems*. Huxley: *Lay Sermons*. Dickens 歿。
- 1871 Swinburne: *Songs before Sunrise*.
- 1872 Samuel Butler: *Erewhon* 鳥崎 壽村(明治五年) 生る。
- 1873 Pater: *Renaissance*.
- 1874 Hardy: *Far from the Madding Crowd*. Masened 生る。
- 1875 長谷川如是閑(明治八年) 生る。

(1876-1890)

社會的狀勢

- 1876 獨立百年記念博覽會 Philadelphia に開催。野球 National League 組織。
- 1877-81 Rutherford B. Hayes 大統領。
- 1877 電話の實用化。蓄音器發明。
- 1879 白熱電燈の發明。
- 1880 領土面積三百六十一萬七千方哩(現在の九割六分)。人口五千十五萬。密度一平方哩に十六人強。1871-80年間の入國移民數二百八十一萬。鐵道延長九萬三千哩。工場數二十五萬三千八百。勞働者二百七十三萬人。農民七百七十萬。國富一人當り八百五十弗。
- 1880 高層建築 Mills Bldg. 紐育に建つ(高さ 120 feet).
- 1881 James A. Garfield. 大統領就任後半歳にして暗殺され、Chester Arthur 後繼者たり(1881-85)。パナマ運河開鑿起工。
- 1882 此年に於ける入國移民數七十八萬九千人に達す、空前の大數。
- 1884 ライノタイプ發明。
- 1885-89 Grover Cleveland 大統領。
- 1885 電車の出現。
- 1886 American Federation of Labor 組織。紐育港頭の自由女神像フランスより贈らる。
- 1887 英帝國第一回植民地會議。
- 1889-93 Benjamin Harrison 大統領。
- 1887 Jane Addams 女史によつて Chicago Hull House 開設。
- 1890 領土面積1880年と同じ。人口六千二百六十五萬。密度一平方哩につき二十人強。1881-90年間の入國移民數五百二十四萬人。鐵道延長十六萬七千哩。工場數三十五萬五千。勞働者四百二十五萬人。農民八百五十六萬人。國富一人當り一千三十八弗。Sherman anti-trust 法制定。國際版權法制定。

文學的刊行物

- 1876 Mark Twain: *Tom Sawyer*. Lowell: *Among my Books* (2nd Series). Lanier: *Poems*.
- 1877 Sarah Orne Jewett: *Deephaven*.
- 1878 Lanier: *Marshes of Glynn*. Henry James: *Daisy Miller*. *Galaxy* 誌(1866-) 廢刊。
- 1879 George W. Cable: *Old Creole Days*. John Burroughs: *Locusts and Wild Honey*. Henry George: *Progress and Poverty*.
- 1880 J. C. Harris: *Uncle Remus*. Lew Wallace: *Ben Hur*.
- 1881 *Critic* 誌 *Century Magazine* 等創刊。
- 1882 Whitman: *Specimen Days and Collect*. Marion Crawford: *Mr Isaacs*.
- 1883 *Ladies' Home Journal* 創刊。Mark Twain: *Life on the Mississippi*. Riley: *The Old Swimmin' Hole*.
- 1884 Mark Twain: *Huckleberry Finn*. Howells: *The Rise of Silas Lapham*.
- 1884 Helen Hunt Jackson: *Ramona*. Frank Richard Stockton: *The Lady or the Tiger*.
- 1886 *Cosmopolitan* 誌: *Forum* 誌創刊。
- 1886 Mrs. Burnett: *Little Lord Fauntleroy*.
- 1887 *Scribner's Magazine* 創刊。T. N. Page: *In Ole Virginia*. Crawford: *Saracinesca*. Mary E. Wilkins Freeman: *A Humble Romance*.
- 1888 Henry James: *Partial Portraits*. Edward Ellamay: *Looking Backward*.
- 1889 *Poet-Lore* 誌創刊。Mark Twain: *A Connecticut Yankee*. Howells: *A Hazard of New Fortune*.
- 1890 *Conservator* 誌創刊。Henry James: *The Tragic Muse*.

此期間に誕生せるアメリカ詩人、劇作家、小説家、批評家の名に注意せよ。彼等を除いては、現代アメリカ文學が如何に寂寥を極めることか。

文學者の生死・動靜

- 1876 Henry James パリより倫敦へ移る。Jack London, Willa Cather, Sherwood Anderson 等生る。
 1877 John Macy (-1923) 生る。「在」
 1877-80 Lowell 公使として Spain に駐
 1878 Bryant 歿。Bayard Taylor 駐獨公使として滯歐中客死。Upton Sinclair, Carl Sandburg, Adelaide Crapsey (-1914) 等生る。
 1879 John Muir アラスカ氷河踏査。Vachel Lindsay (-1931), Dorothy Canfield Fisher, John Erskin 等生る。
 1880 Lowell 駐英公使たり(1885年まで)。Bret Harte 領事として Glasgow 在職。Whitman カナダ漫遊。Hergesheimer H.L. Mencken 等生る。
 1881 Lanier 歿。Stuart Sherman (-1926), Chares Norris 生る。
 1881-90 Aldrich *Atlantic Monthly* 主筆たり。
 1882 Emerson, Longfellow, T. W. Higginson 等歿。Susan Glaspell, George Jean Nathan, James Oppenheim (-1932) 等生る。
 1883 Max Eastman, Alfred Kreymborg, Arthur Davison Eicke, William Carlos Williams 等生る。
 1884 H. D., Sara Teasdale, Giovanitti 生る。
 1885 Sinclair Lewis, Ezra Pound 生る。
 1886 Melville ニューヨーク税關を辭す。Emily Dickinson 歿。Van Wyck Brooks, John Gould Fletcher 生る。
 1887 Joaquin Miller 加州 Oakland に居をトす。Floyd Dell, Robinso Jefferse Mariann Moore 等生る。
 1888 Eugene O'Neill, T.S. Eliot 生る。
 1889 Waldo Frank 生る。
 1890 Lafcadio Hearn 日本へ赴く。

世界文學狀勢

- 1876 Morris: *Sigurd the Volsung* 大島貞益譯マルサス人口論要略(明治九年)。
 1877 Tolstoi: *Anna Karenina* Zola: *L'Assommoir* (居酒屋)
 1878 Herdy: *The Return of the Natives*. Lord Dunsany, 有島武郎(明治十一年)生る。
 1879 Meredith *The Egoist* Zola: *Nana*. Ibsen: *A Doll's House*. 完譯邦文新約聖書(明治十二年)。
 1880 George Elliot 歿。Zola: 實驗小説論。岡川白村(明治十三年)生る。
 1881 Carlyle 歿。
 1882 Darwin 歿。James Joyce, Virginia Woolf, A.A. Milne 生る。Hardy: *Two on a Tower* 「新體詩抄」(明治十五年)。
 1883 Stevenson: *Treasure Island*. Edward Carpenter: *Towards Democracy, Part I*. 坪内譯 *Julius Caesar* 該撒帝談自由太刀餘波録。
 1884 George Moore: *A Mummer's Wife*. Walter Besant: *The Art of Fiction*. J. C. Squire 生る。
 1885 Pater: *Marius the Epicurean*. Meredith: *Diana of the Crossways*. W.H. Hudson: *The Purple Land*. 坪内譯「小説神髓」(明治十八年)。
 Hugo 歿。D.H. Lawrence (-1930), Sean O'Casey 等生る。「完譯邦文新約聖書」(明治十九年)。「Hyde」
 1886 Stevenson: *Dr. Jekyll and Mr. Hyde*
 1888 Matthew Arnold 歿。Mrs. Ward: *Robert Elsmere*. Moore: *Confessions of a Young Man*. 二重譯ツルゲネフ作「あひびき」。
 1889 Robert Browning 歿。J.M. Murry, Katherine Mansfield (-1923) 生る。Yeats: *Wanderings of Aislin and other Poems*, Carpenter: *Civilization: Its Cause and Cure*. Hauptmann: *Before Sunrise*.
 1890 Ibsen: *Hedda Gable*. Patrick Mac-Gill 生る。

あ と が き

この「アメリカ文學の歴史的背景」は、昭和6年10月から同8年4月まで「英語研究」誌上に連載されたものである。

高垣君がなくなられたのは昭和15年だから、今では足かけ7年まへになる。いつ頃のことかハッキリはおぼえてゐないが、僕は同君の生前に、この論稿を book form にまとめるやうにすすめたことがある。ある必要があつて、くりかへして自分で讀んだ経験から、どうも雑誌に分載されたままのものでは不便だつたからである。且つ絶えず散逸しうな危険があつて保管の上からも、少からず不都合が多かつたからである。ところが、同君は、「どうも、あのままでは……」と、氣がすすみかねる様子であつた。なる程、毎月の締切に追はれ、枚数の制約を受けながら書きすすめたものだから、完全といふわけにはゆかない。その月々によつて 精粗濃淡のできることは、やむを得ない。同君として不満が多く、従つて書物として再び世に問ふ氣になれないのも、また、もつともかも知れない。さう考へたので、その時は、しひて、すすめることはせず、そのままになつた。

たまたま、こんど文藝春秋新社が、新しい門出に何か有意義な出版をしたい希望をもちつてゐることをきいたので、僕はこの本を上梓することを、すすめる氣になつたのである。これは、ちよつと考へると、著者たる高垣君の意志にそむくことになるやうに思はれたかも知れないが、僕は、かならずしも、さうばかりは考へない。高垣君は、おそらく、生きてゐるうちに、「アメリカ文學の歴史的背景」を、もつと完全なものに書きあらためたい希望を持つてゐたにちがひない。しかし、今となつてみれば、それはできない相談に過

あ と が き

ぎない。そこで、あるがままの「アメリカ文學の歴史的背景」が、果して出版に値するか、しないかといふことが、あらためて問題になつてくる。僕は立派に出版するだけの値うちがあると信じたのだ。アメリカ文藝思潮の變遷發達をその一般歴史との關聯に於て、これだけに究明することのできる人は、今らよつと日本に見あたらない。この本は、アメリカ文學の研究の點で日本の學界に相當な刺戟を與へたに相違ない。そして、その結果、日本に於けるアメリカ文學の研究が何歩か前進することになれば、故人は満足してくれるにきまつてゐると思ふ。

以上のやうな由來、以上のやうな信念で、僕はこの本を社會にすすめるものである。

昭和 21 年 7 月

吉 田 甲 子 太 郎

*A mad ship loves a tempest
as if there were pleasure in the
tempest*

22-384



アメリカ文學の歴史的背景

頒 價 25 圓 (税 込)

昭和 21 年 10 月 15 日 印 刷

昭和 21 年 10 月 25 日 發 行

| | |
|-------|--------------------------------|
| 著 者 | 高 垣 松 雄 |
| 發 行 者 | 東京都豊町区内幸町 2 / 5 澤 村 三 木 男 |
| 印 刷 者 | 東京都板橋區志村町 5 福 末 治 |
| 印 刷 所 | 東京都板橋區志村町 5 凸版印刷株式會社 |
| 配 給 元 | 東京都神田區淡路町 2 / 9 日本出版配給株式會社 |
| 發 行 所 | 東京都豊町区内幸町 2 / 3 文 藝 春 秋 新 社 |

會員登記 A 102018

930-Ta29ㄅ



1200500759641

930
TA29

終